
[練習作]ダンジョン物

夜霧 時矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「練習作」ダンジョン物

【Nコード】

N0565W

【作者名】

夜霧 時矢

【あらすじ】

ダンジョン物のくせに最初の章ではさっぱりダンジョンに潜つてる最中の描写がない不思議作品。

PC閲覧横書き推奨を前提に書いています。

あらすじの改行が小説情報以外に反映されなくて困る。

現在書き直し準備中、反応は鈍いかもしれない。

生存報告は行うので生きているかどうかは活動報告参照。

「似ている作品があったら感想欄で教えて下さい、参考にします」

ブローグ 思いでポロポロ（前書き）

続ける事よりも完結を目指す事にした。

とりあえず物語が追い付き次第旧ダンジョン物は消します。

目指すは一章完結

ブローグ 思いでポロポロ

この世界は優しくも厳しい、だからこそ俺は生きていける。
俺は、死後二度目の生を受けた。

俺はこの世界にどうかかわるのか、世界は俺をどうするのか。
それはまだわからない。

ただ、俺はこの世界を嫌いではない。

家を飛び出してから二十年がたった。

当初、見た目はカッコイイより可愛い系でこれはモテる！と思

った俺は悪くない。

これでも男女交際の的な意味で魔法使いなのです。

なにせ見た目はまだ小学生みたいなものである。

事実小学生みたいなもので未だ性欲は存在しない。

さて、いきなりこんな話をされてもよくわからないと思う。

だから、少しだけこれまでの話をしよう。

（生前、前世と言えるその話）

俺はどこにでもいる、むしろどこを探せば見つかるの？ 的なモ
ブの一般人だった。

そう、大多数の中の一人であり特別優れているわけじゃないし大
抵劣っているとみられる部類だ。

文章、漫画、映像等の娯楽が好きでオタクと言うほど知識もなく
ただ楽しむ程度の人間だ。

人付き合いに関しては引きこもりと同レベルで苦手であるが、家

が裕福なわけじゃないので最低限周囲とのかかわりを持っていた。
そんなこんなでな流されて生きて、社会に出て世間の冷たさに絶望したころ俺は死んだ。

別に、よくある神様がうんぬんとか邪神やら悪魔やらがうんぬんで殺されましたというわけではない。

単純に交通事故だった。

相手は居眠り運転だったのだろう、ハンドル操作を間違えたのか歩道に突っ込んできたのだ。

残念な事にそこは電信柱やらガードレールやら障害物になるようなものではなく減速もなかった。

そして跳ねられてすぐ、俺は死んだんだと思う。

なにせそこで記憶が終わっているから。

「生まれてからの話」

生まれた直後は周囲が大変喜んでいたのを覚えている。

気づいたら生まれていたのでこれが転生というやつなのだと思う。
なぜ生前の記憶を持ったまま生まれたのかわからないが、あまりの痛みに暴れたのを覚えている。

周囲の人たちは大変喜んでかなり大きな声で騒いでいたんだと思う。

言語が違ったので言っている事はさっぱり理解できなかったが。

暫くは耳が発達するのに時間がかかるらしく音が良く聞こえずくぐもって聞こえた。

それでもなんだかんだで大事にされているのがわかった。

ただ、意識がなぜかはつきりしないのはどうにかしてほしいと思う、赤ちゃん特有のものだろうからあきらめたが。

後々になって分かった事だが、子供が生まれにくく、生まれても大抵死産という種族の子供だったのだ。

たぶん、喜んでいたのはそのせいだろう。

〈幼少期の話〉

元々いた世界と違って純粋な人間以外の人類がいる世界らしい。どうやら転生は世界も超えるようだ。

俺の種族は長命種と呼ばれるものすごく長生きの種族らしい。

まあ出生率が悪いのはそのせいだな、増えすぎないようにする自然の摂理だ。

そしてこの世界には魔法がありモンスターがいて文明が機械文明まで到達していない程度だ。

まあ魔法が無駄に便利なので元の世界みたいに狂った速度で発達するわけないよなと思う。

もちろん魔法を覚えました。

元々科学的な知識を小学校から高校までで教える義務教育を受けていてよかったと初めて思った。

パソコンもそれなりに障っていたのでシステムの概念もそれなりに理解できる。

そしてそれらに似ているのだ、魔法の雰囲気というか使い方というか構成というか。

そんなわけで村では神童として扱われた。

ああそうそう、成長が早いのは大体人間換算で七歳あたりまで、そこからゆっくり成長するらしい。

つまり、七歳までは人間と同じように成長するのだ。

そして七歳を迎えるころには村八分になっていた。
なぜに？

「疎まれていたころの話」

両親に新たな子供ができたのは喜ばしい話だ。前世のうる覚えな性教育知識をフル活用して“当たりの日”にするよう誘導したのが良かったらしい。

いやあ、この種族月のものが半年に一度しかないってすごいなと思った。

これで子供なんてできるわけねーべ。

そんなわけで、得意な回復魔法を出産前からかけ続け元気な妹が生まれましたとさ。

嗚呼、妹可愛いよ妹。

べったべたの超世話焼きでお兄ちゃん大好きっ子が育ったが、両親が矯正してしまった。

うぬれ両親、いつかいてこましたる。

そのころ神童と呼ばれていた自分は元のひきこもりの性格から妹と一緒に一人でいる事が多く、少々孤立していた。

両親からも少し距離を置かれ始めたのも妹ができてからだだったと思う。

そのころなんか両親から妹と距離を置かされ始めたのに気づけば何か変わったかもしれないが後の祭りである。

なぜそんな事が起こったのか？ それは異世界の知識は異世界の常識という異端を俺にもたらしただからである。

結果的に忌み子として見られていたと、村を出る時に村長に教えてもらわなければなぜ避けられていたのかわからなかったほどだ。

俺の行動は結果的には利益をもたらしたが行動が異様であり変であり教えてもない事を知っており普通は知っているはずの事を知らなかった。

結果、暗黙の了解を破りまくり種族的なうんぬんを無視した拳句誇りがどうのこうのと、正直教えてくれたのはうれしいが村長つざい、最後だからって恨み言言わんで下さい。

「村から出てからの話」

初めてモンスターに遭遇した、無論死にかけた。

子供が生きていけるほど旅は甘くないのだ。

もちろん世の中も甘くないわけで、人とすれ違っても特に優しくしてくれるわけではないのである。

学んだことは優しい言葉には裏がある。

元の平和な世界ではどうだったか知らないが、この世界では無意味にやさしいやつらは危険であると学んだ。

三回ぐらい身ぐるみはがされた。

運良く生き残ったが、それから同じような事が何十回と有った。

だが村には帰れない、追放されたようなものだったので帰っても追い出されるだろう。

なにせ、子供の作り方を教えてしまったのだ。

今更忌み子を村に置く理由がなかった。

そして俺は死ぬ気で強くなったわけで、最弱のモンスターであるゼリーっぽいのをどうにか殺せるようになった。

そして初めてのレベルアップを経験した。

どうやらこの世界、ゲームのようなシステムが存在するらしい。

たとえばここがゲームみたいな世界でも、モンスターを倒してもお金を稼ぐことはできない、一つ賢くなった。

やっぱりお金持つてるわけないよね、モンスターが。

「世界を知ってから話」

あれから一人で世界を放浪している。

俺の故郷はかなり辺境の森の中だったらしく必死に歩いても町一つ遭遇しない。

さすがに村はいくつか遭遇したが、基本的に小さな社会は外からの人間を受け入れないので特に日記に書くようなことはなかった。道はあるにはあるがたぶん旅人や行商人が使ったためのものなのだろう。

自分が生きているのはモンスターが殺しても消えてしまわないので食べる事が出来たからだ。

最初の頃は悲惨だったなあ。

必死に葉っぱかじったり根っこかじったり食べれそうな死体を肉食の小動物と取り合ったり。

少なくとも人間のするような生活ではなかった。

最弱モンスターのゼリーは糞不味かった事をここに記しておく。

今ではモンスターを倒して素材と呼ばれる生活に使える部分を剥ぎ取りそれを売る事で生活している。

気がつけば村を飛び出して十年がたっていた。

未だ小学生にしか見えないため信用してもらえず町では雇ってもらえなかった。

まあ冒険者モドキしてるからいいんだが。

そして町で新たな情報を手に入れた。

モンスターは基本的にダンジョンから逃げ出したもので、ダンジョン内で殺すと素材を残して消えるらしい。

そして、そんなモンスターを狩る連中を冒険者と言い、遺跡と呼ばれるダンジョンからいろいろなアイテムを回収して生活するんだそう。

なんと冒険者なら自分のような小さな子供でもなれるらしい。

さすがに死ぬだろ、普通は。

まあそうだよなと大笑いされたが、本気で俺の事をただの子供だと思っているらしい。

そしてダンジョンだが、この近くには無いという話なのでさらに旅をつづける事にする。

後、ステータスを見る魔法を教えてもらった。

変な呪いっぽいのがついていた。

長命種の宿命という名前らしい。

たぶん種族的なものなので仕方ないと諦める。

そしてその内容だが次のようなものだ。

・成長速度干涉「低下補正」 どうやら長命種の成長が遅いのはこれのせいらしい。

・特殊技能干涉「成功率低下補正」 ゲームで言うところの職業についてないからそんなものはもっていない。

・生産スキル干涉「成功率低下補正」 上記同様持っていない。

・レベルアップ速度干涉「低下補正」 なんか、聞いた感じ人の十倍ぐらい必要なようだ。

・レベルアップ時ステータス追加上昇 詳細不明である。

・転職制限「基本職の転職不可」 職業訓練生つてのの上にある基本職業に転職できないらしい。

どうやら特殊職業というのは生産職らしく、その道のプロを目指すなら一般人だろうと最低でもこの生産職につくらしい。

そして初心者であり子供な俺は元の世界で言う職業にもつけてないのでリアル無職である。

二ト万歳。

そんなこんなで町についた。

気がつけば誕生から二十年たっていた。

ブローグ 思いでポロポロ（後書き）

ブローグ終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：初心者

称号一覧 「転生者」「家出人」「光化学狂信者」

<< 特殊技能一覧

> 魔法：ステータス閲覧

・Lv.1 名前、職業、称号一覧、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・Next-count 150

> 魔法：生命力回復補助

> 魔法：肉体活性化

<< 祝福一覧

> 長命種の宿命

・成長速度干涉「低下補正」

・特殊技能干涉「成功率低下補正」

・生産スキル干涉「成功率低下補正」

・レベルアップ速度干涉「低下補正」

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

第一話 思い出す過去（前書き）

会話が一切ない。

ただしこれはわざとである。

次回から会話が入る予定。

プロローグと分けたのはまともに生活しだしてからはまた別だと思
ったから。

加筆修正済み 2011・11・4。

第一話 思い出す過去

世界は優しくない。

世界は犠牲を望んでいる。

世界が、罪に塗れているが故に。

親の罪は子へ、世界の罪はその世界の生命へ引き継がれる。

故に争いは無くならない、不幸は消えず、それでも運命^{それ}にあらがう者たちがいる。

その名は冒険者。

自らを犠牲に、世界を導く者たちである。

だがその冒険者すら罪に塗れている。

だが、それでも人々は諦めず前を見つめ歩んで行く。

……というのが冒険者の前提らしい。

つまり「憧れる、しかし信用するな」という事らしい。

冒険者は良いやつもいれば悪いやつもいる、ただし基本的に荒くれが多いという事だ。

元々食うに困って冒険者になる人は結構いるらしい。

そのほとんどは死ぬが、今の俺みたいにそれ乗り越えたやつらはそこそこいいところまで行くそうだ。

そして、今更知った事だがこの世界にはダンジョンと呼ばれる地下迷宮があつて、ゲームの如く色々なものが発掘できるらしい。

そのせいで科学技術や魔法技術が発展しないみたいだが発掘できるものだけで生活していけるほど発掘品は便利だという事である。

ますますゲームめいてきた。

俺はゲームの世界に転生したのだろうか？

しかし生前こんなゲームは見た事がない。

システムも聞きかじったダンジョンがどう言うものかと言つのも

生前好きだった不思議のダンジョン系（入るごとに構造が変わる迷宮）ではなかった。

ただし、固定なわけでもないため実際にゲームで言う“再突入”とは時間軸的な流れにあたるもので、実際には知っているゲームの世界なのかもしれない。

それにしても特殊な効果を持つアイテムや傷を治す薬の名前やら一切知っているものがないのが気になる。

気になったわけで調べてみたが、分かった事はいくつかしかない。ネットワークはあるが、一部の王族とギルド系と呼ばれる組織の上級幹部が使う現代で言う電話とファックス、初期のHTML（ネットワーク上で見れる文書）のようなものだった。

まあ、ここにきて世間知らずの箱入り娘ならぬ息子だったことがわかっただけで儲けものだろう。

後、軽々しく名前を教えてはいけないそう。

名前を聞いても嫌な顔をして教えてくれなかったのはそのためらしい。

何やらこの世界、奴隷制度に近い物があるらしく名前を生まれた場所と内容が事実である罪状があれば奴隷モドキとして一定期間こき使えるらしい。

無論警察組織のようなものがあり厄介ごとを起こすやからを王族や貴族、平民に至るまで分け隔てなく神の名の下に取り締まるらしい。

親切に一から十まで教えてもらったがやはりと言ったらいいか、一部自身の持つ常識と照らし合わせて納得できない事柄もあった。本来、名前を明かすのは結婚相手や家族や上位者（家臣から見た王族等）であり、名前を聞くという事はそういう事だったらしい。さらに、ステータスを明かすのも厳禁で、無論聞くのはとんでもないマナー違反だ。

追加で言えば、仕事名と職業名をギルドに登録してないと身分証

明を求められた時に厄介な事になるらしい。

通常は親が生まれた時にするらしいのだが、あんな辺境じゃ絶対してないなと自身の証明書を発行してもらった。

なお二回目からは有料で、一回目は国が出してくれるらしい。

このカードがあると公共施設が利用できるようになり、何処何処の誰々というものもギルドカードを提示できればギルド側に問い合わせる事が出来、当事者同士で本名がばれる事がなくなる。

また各国の国境を超える際、非常に面倒な手続きをしなくても提示すれば犯罪歴を参照後に通してもらえろという便利アイテムらしい。

ただし、特定の月に現在在籍している国に対し税金を払いこまなければいけない。

商人ギルドなんかもギルドカードを提示できれば特にチェックもなく買い物ができるとか。

つまり、身分証明書兼首輪なわけである。

親切丁寧にこんな田舎者の子供モドキに教えてくれる自称神官のお姉さんは、仕事だからこんな親切にしてくれるわけではない。

こんなに冒険者ギルドが親切なかだぐももちろん裏がある、という事である。

冒険者ギルドは働いてほしいし問題を起こしてほしくない、つまり問題起こしたらぶっ殺して村八分にすんぞゴルアという事を周知徹底しているだけである。

ちなみに神官は女性だけの専用職業であり、男性がなれるのは教主と呼ばれる渡り歩く魔法医者である。

薬ではなく魔法を使って治療するから魔法医者である。

まあそんなわけで、ダンジョンとギルドのある町での生活が始まったわけだ。

「町での生活、始まりは浮浪者」

良く考えたら住むところがない、金もない、食べ物もなければ着る服しかない。

ないない尽くしである。

このままでは浮浪者一直線で、とりあえず宿と仕事の確保が最優先だが……、すでに一週間ほど就職活動をしているが見つからない。寝る場所は町の外で野宿である。

川があるので毎日洗っているが、それでもどうにもならないのはこの見た目だ。

もう十歳ぐらいの子供に見えるわけである。

そりゃだれも雇ってくれないわな。

そして初めて野宿のために町を出た時はモンスター侵入を防ぐための門に阻まれて門番さんに説明するのにかなり時間を取られたっけ。

あー、正気を疑ってたよな子供が野宿のために町を出るとか、親はどうしたとかさんざん聞かれたし。

とりあえず町の外に家でも作るべく、日々就職活動と物資の調達に明け暮れている。

現在、最低限の生活費は襲いくるモンスターをぶっ殺して素材を売ってどうにかしているが、本当に最低限で食糧とかは自力調達である。

ん？ お金をどこに使ってるんだって？ 無論大工道具と釘とか家（ほったて小屋とも言う）を作るのに必要な物資の調達である。変わった事と言えばこの町に来てから一日一回かならずダンジョンに潜っている事ぐらいだろう。

ダンジョンではモンスターの死体が消えるため食料の確保はできないが、素材を自分で加工する手間がかからないため最低限のお金を確保するためである。

ちなみにそのお金は買った大工道具やら物資をためておくための

倉庫を借りる代金に消えている。

外に置いておくとも使ってもいいという扱いで法律で罰則もないため持つてかれて売られてしまうのだ。

嗚呼無情とは誰の言葉だったか、まあどうでもいい。

日曜大工で最低限の工作技術を上げつつ一年ほど必死にがんばっていたら、さすがにあわれに思ったのか神官のお姉さんから冒険者ギルドとして使っている建物である、通称神殿と呼ばれる場所の一角を建設場所として提供された。

無論それからはそこを寢床として使っている。

獣の皮で作った寝袋モドキ、意外とあったかいです。

雨の日が辛い。

それからはわき目を振らず小屋を作っては取り壊す日々だ。なかなか納得できる建物はできない。

必要な空間は寝る場所と最低限の物置なのでそれほど大きくないのが救いと言えば救いだ。

さて、そんなこんなでさらに二年が過ぎた。

だんだん望んだ家ができてきたのが嬉しくて、つついっほかの事まで頑張ってしまった。

まず作ったのは井戸だった。

もうね、面倒なんだもん、川までお風呂入りに行くの。

ただ、なめていたと言わざる負えない。

レベルアップで元の世界で考えたら人外な力と体力をもつてしても一年かかった。

まあその一年は壁用の煉瓦作ったり煉瓦作ったり煉瓦作ったりした時間で半分を占めるのだが。

ここまでで町についてから四年が経過した。

ただ、井戸はギルド関係者に感謝された。

普通は井戸なんて掘らず近くの川に水汲みに行くらしい。

水汲みが下っ端の仕事でもあったので、下っ端の皆様方には本当

に感謝された。

まあそれでも井戸から水を引き上げるのは辛い。川までを往復するよりは楽なんだろう。

変人と見られながらも快適な生活のため頑張った、超頑張った。ものができるまで周りからはひたすら地面を掘る可哀そうな子ども扱いだったが。

次に手を出したのは鍛冶だ。

ダンジョンで出る鉄鉱石をため込み必死に頼み込んで鍛冶屋に疑似弟子入り（目的のものが完成するまでと言う期限付きで）した。どうしても欲しい物があつたのだ。

お金もないので必死に自分で材料を集め施設を貸してもらえよう交渉したわけで、何かを教えてもらう約束をしたわけではない。

まず鉄鉱石からまともな鉄を生成するのに一年かかった。

下働きモドキをして技術を盗むのに一年かかったとも言いが。

鉄鉱石から鑄型に流し込み失敗せずにできるようになるまでさらに一年かかった。

以外と気泡が入ったりして不思議なほど脆くなるため難しかったのはいい思い出である。

鍛冶屋のお爺さんが途中から孫のように可愛がられていたが、鍛冶に甘えは許さんとこれでいいかなと思っても厳しく指導してきた。完成したのはレール付きの窓である。

ガラスの方は白っぽい半透明ながら結構簡単にできた。

集める材料がわかっていたからだろう。

後なぜか鏡もできた。

必死に目の細かい砥石で磨いて鏡状にした鉄板をガラスコーティングで錆びないようにしたものだ。

こっちは必死に透明な英石やらなんやら探して限りなく透明なやつで作ったので鏡としてちゃんと機能している。

まあガラス流し込む時に少し色が変わってしまったがそこらへん

は許容範囲だろう、綺麗だし。

正直男の俺は鏡なんて使わないが。

なぜ作^{んだ}つたし。

おっと元の世界の方言が出た。

後々の事だが、なぜか神官のお姉さんが使いに来るのである一室に設置しておいた。

ちなみにかなり馬鹿でかい全身用の鏡である。

ちなみにヒビ入れたやつはぶっ殺すことしているが、幸い入れるやつはいないようだ。

なぜ作^{った}かは激しく疑問だが気にしたら負けな気がする。

ちなみに後でわかった話だが、ガラスはすごい高級品でこんなほったて小屋に使うようなものではないらしい。

普通の窓は開ける時は開けっ放し、閉める時は板をはめるんだとか。

でも冬寒いじゃん、明かりどうすんのよ？ と本気で思うがそのせいで凍死者が出るとか本末転倒だと思っ^んだが。

え？ 技術の一般公開？ お爺ちゃんがやってくれるそうです。

そして本命、中の量が見える覗き窓付きタンクに水道管、井戸用の手漕ぎポンプである。

そう、水道だ。

シャワーを再現するのはしんどかった。

金属板に穴をあけるのがあんなにしんどいとは知らなかった。

無論暖める機構なんてないので水しか出ないがこっちの世界では画期的発明である、一般には理解されなかったが。

冬は水道管の中が凍るだろうかそこらへんはしかたないと諦める。井戸の底が地下なので凍らないが、手漕ぎポンプ内の水が構造上どうしても凍る。

冬はポンプあるのに手動でくみ上げとか無様をさらす事になりそうなのでどうかしたいと思う。

まあ水道管は無駄に太くしてポンプは一々水抜けばいいんだらう

けど。

ここまででさらに一年がった。

俺がこの町に来てから気づけば七年がたっていた。

そして、小屋もとい自宅が完成した。

さすがに自宅を建てるのは気が引けたので十にも及ぶ仮眠室、シャワー室、簡易倉庫を作り俺が使う一室を除いて公共施設とした。ちなみにシャワー室の窓は覗かれないように不透明の光を通す程度にしてありかつ高い位置に設置してあるので覗きはできないのだ。ふん下っ端教主ども、涙を流しても事実は変わらんかな？ 割ったり穴開けたりしたら死なない程度にぶっ殺す。

まあ基本的に使用するのは神官さんたちとギルド関係者の一部だが、使用料金がほんの少しだが自分に入るのはうれしかった。

まあ、一番再現が難しかったゴム部分は最弱モンスターことゼリーが出す柔らかくしたスーパースポールのようなプニョ玉を加工して作った。

そして水道を設置した、試運転が終わると神官さんたちがすっ飛んできてなんで井戸をふさぐのかと言ってきた時は正直マジでビビりました。

もうすごい剣幕だった。

まあ結果だけ言えば、ポンプと水道が便利だという事で神殿側で使う分を作らされたが……。

まあそのおかげでタンクに水を補充するのは下っ端さんたちがしてくれるらしい。

ちなみに貯め水は衛生的に危険なので、毎日使い切り翌朝補充しなければならない。

そして気づけば簡易倉庫は尋問室に化けていた。

まあ、自分が使っている倉庫は町で借りているものなので特に問

題なかったが、掃除用具が置いてある尋問室がシユールすぎるのに笑った。

ちなみに尋問室に選ばれた理由はこの小屋がかなり頑丈でかつ手ごろな大きさで、この簡易倉庫に窓がないためらしい。

ちなみにベッドはスプリングが作れなかったので、プニヨ玉で簡易ウオーターベッドになっている。

プニヨ玉を細かく砕くのに物凄い苦労したなあ。

布はいいのがなかったので馬鹿でかい兎っぱいやつの毛皮で代用している。

あの兎も人に馴^なれるなら可愛いから大人気だろうに、なぜ自分の容姿を利用しないのかね？

ちなみに代用品だが、ウサギっぱいやつの毛皮を正四角形に切り出し縫い合わせた贅沢な一品で、そこいらに売り出せば王族が買っていくだろうとの評価を貰った。

ただ材料が全てモンスター産のため非常に値段が高く、一般の商人や大工ではまず作れないと言われた時は泣いたが。

そもそも冒険者でこんな生産スキル高いの俺くらいじゃなかろうか？

でも木枠にプニヨ玉詰めて兎の皮を縫い合わせてできた布を張り付けただけなのになあ……。

ちよつと獣臭いが半年もすると俺の体臭の方が染みついたのか、それもなくなった。

まあ結構洗ってるせいもあると思うが。

無論毛布とかもないので兎の皮で作った着ぐるみモドキの寝間着で寝る。

毛布はやはり兎の皮で作った毛布だ。

夏は暑いので使わないだろうが冬は快適だ。

そして俺が待ち望んだ快適な生活が訪れたのだった。

なお、羊皮紙が主流みたいだったので和紙の作り方を教えたら研究が始まったっぽい。

大事になったのは決して俺のせいじゃないと信じたい。

ただ、突飛な事をして冒険者ならおおむね受け入れられるという事を実感した。

ちなみにだが、ベッドが設置されているのは自分の部屋だけである。

気がつけばこの町に来てから八年がたっていた。

気がつけば木の小屋から煉瓦の小屋にレベルアップしていたが気にしてはいけない。

中はちゃんと内装やつてるので相変わらず木製だ。

時間が過ぎるの早いなあ。

「神殿のマスコットモドキになってからの話」

それからはダンジョンに潜る日々である。

まあ毎日潜っていたが。

一時期狂ったようにゼリーとホーンラビットを殺して回っている子供が噂になったが気にしないっいたら気にしない。

そのせいで元の服が赤黒くなり使えなくなっただのは悲しかったが、もはやあんなボロイ服を着る意味もなかったので捨てた。

とりあえず今は最下層である五十層を目指して頑張っている。

ちなみに、なぜか神官服モドキを着させられているため普通の服はもっていない。

そんなお金はないのである。

全て貯蓄している。

そして転機は訪れた。

この町に自称勇者を名乗る（ある意味）猛者が現れたのだ。

自分と同じ転生者か？　と思っただが、何やら称号に勇者というのがあって、それがあると特別な運命に巻き込まれるらしい。

ふと気になって確認してみると自分の称号が変わっていた。

まず「家出人」から「神殿の隠れマスコット」に、「光化学狂信者」から「未来科学狂信者」に。

後「技術屋」ってのがついた。

技術にパクリってルビ振られているような気がした。

確認のためもう一度ステータスを呼び出したら消えていた。

気にしたら負けだ。

確かに自分で考えたわけじゃないけど、自分で考えたって明言した事ないぞ、そこんとこどうなんってんだシステム。

それに今更だが、家出人はわかるとして光化学狂信者は意味が分からなかったが、もしかしたら生前レーザー兵器に浪漫を感じていたからか？

もしかして世界基準でそんなものへの理解と興味からそうなったんだろうか？

正直どう考えてもオーバーテクノロジーだし、知っているのは自分ぐらいだろうからもはや狂信と言うべきレベルで存在を確信してたせいだな、たぶん。

まあそんな事はどうでもいい。

問題なのは基本勇者は固有^{ユニーク}モンスターに遭遇しやすくお人よしである。

つまり、協力して倒せば固有^{ユニーク}アイテムを貰えるかもしれない、たとえばそれが初心者用の上位武器だったとしても。

ちなみに上位武器ってのは神様とやらに祝福された自己修復機能付きの丈夫な武器の事である。

それに対して下位武器というのは人間が作る武器の事で、良品は中位武器と呼ばれたりするが正式には下位武器の分類となる、らしい。

結論から言えば、勇者様強すという何とも言えない結果になった。正直こっさりついていくだけで初めて五十層突破したわけだ。

ダンジョンを突破すると宝箱の部屋に転送されていた。

転移魔法があるので驚かなかったが、ダンジョン攻略そのものに特典があるのは知らなかった。

たぶん教えるまでもなくみんな知っている事なのだろう。

そして勇者と逸れた^{はく}。

後々知った事だがパーティー登録をしていないと別々の部屋に転送されるらしい。

登録をしていると一緒に部屋の部屋に転送され、人数分宝箱があるんだとか。

中身は紫色をしたホーンラビットの角だった。

ホーンラビットの角は腐るほどもってるよ、正直いらねーとその時思った自分を後々になって殴ってやりたくなったのはまた別の話である。

確認が終わると自動的に外へ転送されたのでとりあえず帰る事にした。

外は暗くなっていたので月明かりでのシャワーもそこに寝ようとしたら猫の人、通称猫神官の人が乱入し俺はなぜか抱き枕になった。

眠かったし、体ができてないせいか性衝動もないのでそのまま眠ったが、やっぱり女の人って柔らかいねというのが感想である。

ちなみにこの猫の人、すぐく気まぐれで本当に猫っぽいのだ。

しかも元の世界にはいなかった半獣^{ワイルドハーフ}というか猫耳娘^{キャット・ウーマン}というか、そういう見た目の人だ。

ダンジョンに潜り始めた最初の頃何度も死にかけたが、地上で血だらけな自分を見つけてもほぼ無視だし「助けてほしいなー」といっても「そう」の一言で終わらせた猛者である。

せめて医者を呼んでほしい。

かと思えば気が向いた時だけからかわれるというか遊ばれるとい

うか、玩具扱いされるので正直ちよつと困っている。

このごろはさすが猫の人と納得する事になっているので気にしていなかったが、もしかして発情期？

いや、そんなそぶりも行動もなかったし違うか。

まあそんなこんなで驚く事はそれぐらいだった。

のち分かった事だが、手に入れた角はこのダンジョンの一番上位なレアアイテムで、勇者様のものを横取りしてしまったらしい。

さすがに謝りに行ったのだが、まあランダムなので気にするなと言われた。

正直こういうのは勇者に流れるような物でしょ？

そこところどうなんだろ、もしかして自分もなんか厄介ごとに巻き込まれる運命だか何だかなのだろうか。

まあそんな事はなつてから対処するから問題ない。

勇者なんてのがいるんだ、丸々投げてしまえばいい。

それより重要だったのは、手に入れた角である。

名称を精霊獣の角といい、上位ダンジョンに行くところこそ手に入るアイテムらしい。

軽く恐ろしく丈夫なのでショートソードにしてもらってから二年間今の今まで使い続けているメイン装備だ。

まあショートソードとは言っても、俺の体が小さいため比率のせいでロングソードに見えるんだけどね。

そういえば今年でダンジョンに潜り始めて十年目に入るわけか。

そういえば一部素材の安定供給とかやってたら「ダンジョンの主」とか「エターナルの人」とかよくわからない称号がついていた。

まあ確かにダンジョン内で人助けとか結構したけどもダンジョンの主って俺はこのダンジョンのボス扱いか！？

まあ神殿で確認したら民間称号だったのでダンジョンに潜る有名な子供として知れ渡ったせいだろうとの事。

後潜っているダンジョン名がいつの間にか初心者ダンジョンになっていた。

あれか、色々な人に教えたりこつそり助けたりして生還率上がったせいかな？

上級者ロールプレイして初心者育てたせいかな？

まあいいや、関係ない関係ない、気にしたら負けである。

話を戻すが、称号には二種類あり、一般からの認識と呼び名でつくのが民間称号、神様とやらが付けてくれるのが特級称号というらしい。

ちなみに称号で特典がつくわけではないが、ものによっては一般社会で自慢できたり就職が有利になったりするらしい。

まあそんなこんなで今に至るわけだ。

後余談だが、今回会った勇者様俗に言う不幸系で周囲の人間に幸運をばら撒いてしまう人だったらしい。

通りで一人きりだったわけだ。

第一話 思い出す過去（後書き）

一話終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：初心者

転職可能職業：職業訓練生

称号一覧

「転生者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「神殿の隠れマスコット」民間称号：冒険者ギルド関係者からの称号

「技術屋」民間称号：一般民家からの称号

「ダンジョンの主」民間称号：冒険者からの称号

「エターナルの人」民間称号：冒険者からの称号

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・Lv.1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・Lv.2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・Next-count 243

>魔法：生命力回復補助

・Lv.13 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・Lv.30 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

<<祝福一覧

> 長命種の宿命

- ・ 成長速度干渉「低下補正」
- ・ 特殊技能干渉「成功率低下補正」
- ・ 生産スキル干渉「成功率低下補正」
- ・ レベルアップ速度干渉「低下補正」
- ・ レベルアップ時ステータス追加上昇
- ・ 転職制限「基本職の転職不可」

第二話 生活に慣れた生活（前書き）

今回から結構な数の名前付きキャラクターが参戦。

ダイブ物語らしくなってきたがなんというか、中途半端な一人称が
凄くやっかい。

変な癖なので治したいがいかんせん無意識なので難しい。

誰か助けてたもれ。

なお、今回のタイトルが変なのはワザとである。

そろそろマジでダンジョン探索描写を入れなくてはきている。

ただ生活も書いていて楽しい、これは問題だ。

第二話 生活に慣れた生活

幼子は夜明けに笑う。

そんな伝説ができようとしていた。

「な、何だってー!？」

ただし棒読みである。

事の始まりはステータス閲覧魔法、まあコール系と呼ばれる魔法だがそれがレベルアップした事に端を発している。

もう何十何百とダンジョンを走破している。

そして基本的に時間のない俺は敵を瞬殺しなければ悲しいほどに時間が足りなかった。

結果、どこぞの武将の如く国土無双してやんよと言わんばかりにここ十年で瞬殺を極めたわけだが、それはどこぞのMMORPG(多人数参加型大規模ロールプレイングゲーム)の如くドバドバダバ湯水のごとく経験値を得られるという事であるわけだ。

実際には少し違うのだがまあそれは別の話である。

つまりは普通の人の百倍必要であっても普通のゲームに換算すればうん十倍、場合によっては百倍強の経験値を得るという事である。そんなこんなで十年、まあモンスターのコアを狙った瞬殺を極めてからなので実質五年ほどだが毎日毎日レベルアップしてるような感じになってもおかしくない。

というかある程度そうなってたし、最初の頃は一日十とか二十とか上がる事があったし。

結論。

問題の部分までステータスを表示すればこういう事である。

名称：フィフィル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：初心者

転職可能職業：職業訓練生

LV・99 / 99 EXP・99・98% NEXT: 13452

コスト
限界値寸前でした。

あと一回ダンジョンに潜ればコストするね。

いやね、正直な話転職ってどうやるんだろー？ とか疑問に思ってたんですよ。

でも、忙しいし後でいいよねーとか思っちゃったわけですよ。

つまり、「エターナルの人」＝「自主的永遠の初心者モード」というわけだったのだ。

つまりニート。

エターナル
そりゃ永遠って呼ばれるわ、マジで。

もちろん就職先がある方がおかしい。

でもでも、もしかしたらコストしないと次の職業とか無理なのでは？ という最後のあがきで公共図書館に調べに来たわけだが。

「ふむふむ」

初心者指南書なるものによると

・ 初心者はレベル十で職業訓練生に、職業訓練生はレベル十五までに各専門職につく事ができる。

・ 各専門職になって半人前。冒険者としてそれ以前の状態では、身体に障害を抱えるものと同等の存在として扱われる。

・ 初心者と職業訓練生はお金を払ってもさっさと抜け出すものでそれ専用の学校が存在する。

・ なぜなら下位職と呼ばれるそれらは専門職ごとにある特殊な技能、魔法を一切覚えられないからである。

・ さらに、下位職は転職するとレベルが一に戻るため受けていた

レベルの恩恵を半分以上を失う。

・ どの職業もレベル限界値に達してから転職すると祝福があるが、基本的に実践するのは歴戦の戦士ぐらいである。

・ レベル限界値は職業ごとに違う。

・ 転職時、下位は全て、上位は半分のレベルを失う。ただし、下がったレベルに対し約半分の恩恵を転職ボーナスとして受ける事ができる。

・ 大抵上位職が上限にいたるまでに必要な年月は戦い続けて八年から十年と言われている。己の進路を決める参考にせよ。

まとめるとこんな感じであつた。

正直、どっかの六法全書だか広辞苑みたいな厚さの子供向け教科書みたいな本を読むとか拷問だったが子供向けだけあって無駄に分かりやすかつた。

あえて言おう。

普通の人が普通に狩りして八年から十年、酷いともつかかるわけで、特殊な事が何もできない半人前以下の状態で上限到達は狂気の沙汰であるという事だ。

つまり、やつちまいました。

冒険者でも絶対やらない奇行に走っていたわけで、そりゃアンだけ素材回収しといて初心者とか狂気の沙汰で有名になるわほんと。

もうね、門番さんとか各公共施設の受付の人とかに顔パスなのも納得だわ。

問い合わせるまでもなく本人ですという完璧な証明がされてる。

何それ勇者とかより有名なんじゃね？ ある意味。

まあ運が上がると（言われていると）はいえ馬鹿でかいウサ耳を常時つけてるのは兎人^{ラビニア}か俺くらいでしかも俺は明らかにつけ耳、かつ十年以上も子供やつてる種族なんて長命種ぐらい。

しかも一般のために技術解放？ おたく馬鹿なんじゃないのと言われても反論できません。

いやあ、何度か暗殺未遂されたから何かと思ったら製造ギルドのガラス部門だったのね。

まあ効率的な材料の採取法とか俺が作った窓枠の製造法だとかお爺さんが気を利かせて色々ゆずったんだろう、ギルドが製造しているのを見るに。

そのせいでガラスの値段が暴落したかな！ 陶器部門とは作るものによる住み分けでもしたんだろうガラス窓ばっか作ってるのを見るに。

とりあえず、さすがお爺ちゃんと言わざるをえない。

ナイスだお爺ちゃん！

最高だぜお爺ちゃん！

ビューティフル……、はちよつと違うか。

まあそんな話は置いて、この初心者指南書は親切で色々な事が書いてある。

たとえば初心者がやらかす失敗とか暗黙の了解とか色々だ。

本によると職人は食ってくために基本秘伝を外に漏らさないらしい。

まずここで俺アウト、一度目の暗殺はこれか？

本によると長命種は人里離れたところで暮らしており里から出てこず、非友好的で他種族には恐ろしく冷たい。

次にここでも俺アウト、二度目はこれだろうか？ いや導入された人員を見るに三度目だろうきつと。

本によると神殿は神聖で不可侵、私的に使ってはならない。

さらにここでも俺アウト、実はこれが三度目とか？ それだと推測が合わないな。

本によると神殿での争い事はご法度、したら冒険者による冒険者のための集団リンチ確定。

セーフなようでアウト、口うるさい神官さんと結構喧嘩した覚えがあるわ。

結論。

あれ、俺やばくない？

まあ後々調べてわかった結論だけ言うと孤児院も兼業してるので、俺はある意味では明らかに子供なので問題ないらしい。

普通孤児は知り合い程度でも知っていれば引き取るらしいので基本発生しないが、子持ちの旅人が死んだりするとたまに出るらしい。そもそも子持ちは旅なんてしない、子供は世界の宝ですが暗黙の了解。

そんなわけで孤児は滅多に出ないので気づかなかったのだ。つまり俺が作ったのは仮眠室兼孤児院モドキとなっていたわけで、道理で一般の方々も一切文句を言っていないわけだ。

孤児が孤児院作るってどうなのよってのは言っではいけない、気にしたら負けだ。

まあ、今度から技術公開する時は誰かに相談しよう、お爺ちゃんとかお爺ちゃんとかお爺ちゃんに。

井戸とポンプあるし、水道技術は便利なので是非普及してほしい物だ、主に公共施設に。

ああ、そういえば冒険者なのに税金払ってないなー催促来ないし、と思ってたら実は孤児と引き取り手含め免除らしい。

孤児を預かる家の家族も免除らしいのでみんな進んで引き取るわけだ、結構高いし。

子供のいる家にそれなりの支援が出てるし子供に対しての免除が多い。

それで税金高いんじゃないの？

まあ閑話休題。ちつてもいい

問題なのは何か？

いやね、今から転職するとなんか負けた気がするんだよね、後ゼロコンマゼロ二パーらしいし。

とりあえずギルドカードナンバーの下三桁が六百六十六なのもなんか嫌なのでさっさとレベル上げて転職してしまおうと思う。

ちなみにギルドカードナンバーはランダムで振られ、かつ職業別に管理されているらしい。

どこぞのデータベースみたいなシステムがあるみたいであるが、そういうシステムの概念は無いみたいでどこかの天才が構築したのをそのまま使っているらしい。

夢が広がる憧れる？ いいえ楽な暮らしがしたいだけです。

そしてそろそろまともな食生活がしたいなあ。

ほとんどモンスターの肉と保存食ってどんだけーという話である。ああそうそう、プニヨ玉が基本的に食材扱いだったのに笑った。どうやら元の世界でいうゼラチンのような働きをするらしい。

しかも無駄に高濃度で一つのプニヨ玉で一万分近くゼリーが作れるとか。

……正直建材だと思ってました。

いやね？ 熱を加えると柔らかくなって最終的に液状になるんだけど、基本的に水弾くし固まると硬くなってとてつもない接着力があるので水道管つないだりするのに使ってた。

しかもそれ以降は熱を加えても変化しないし、鉄が溶けるレベルの熱じゃないと燃えないので絶対に建材だと思ってたんだ。

そして調べてみると実際に建材としても使われてたのに笑った。

ただし、プニヨ玉に一切混ぜ物をしない場合の効果らしく建材として使う場合数をそろえなければならず非常に高価になるため貴族や王族しか使わないんだとか。

食材として使う場合はすり潰して粉っぽくしてから小指の先ほど少量を大なべにいっぱいまで入れた水に混ぜてから使うんだとか。

正直すり潰すのがメンドクサイので加工費払って作ってもらいました、十個分。

びっくりしたのが防腐剤の役割もするらしく作ったゼリーは大抵半年から一年持つらしい。

ただし味はさすがに劣化するので保証しないと商店のおやつさんは笑ってたが。

供給を増やしたせいかわプニヨ玉の研究が進んだらしく、コラーゲン風呂みたいな使い方をする馬鹿貴族が増えたんでもうけさせてもらってるとかも言ってたな。

それならコラーゲンパックとかもいいんじゃないだろうか？ といつか本当にプニヨ玉って高濃度コラーゲンもとい高濃度ゼラチンなの？

正直予想外すぎる。

後植物系モンスターから片栗粉が作れるらしい。

モンスター＝食材の理論は不思議な事に常識みたいだ。

ただしモンスターの死骸が残るのはダンジョンの外なので、一階層でそのモンスターが出現するダンジョンの近くでしか取れないんだとか。

香辛料系は素材として残るらしいのでダンジョン内でもとれるらしい。

まあ閑話休題もここら辺でいいだろう。

ダンジョンへ潜ったが残り必要経験値が後二桁なところで攻略完了してしまった。

正直忘れていたので悔しい。

いやね？ 俺だって半分ぐらいまでは覚えてたんだよ？ 今日は無駄にレア素材が出るのがいけないんだ、行く先々でレア素材が山のように出るのが悪い。

なにせ十年乱獲して初めて見るアイテムもあったし。

地上で遭遇してもレア素材って手に入らないんだよね、同じ部位をとつても鑑定かけると普通の素材だし。

まあ簡単に一覧にすると次のようなものが出たわけだ。

魔獣のコア：各魔獣から「魔獣名コア」形式で出る。武器防具作成時に混ぜて作ると特殊な効果がつくので非常に高価、下手したら家を買えるレベル。

魔獣の肉：各動物系魔獣からとれる「魔獣名の肉」形式で出る。

結構おいしく非常に痛みにくいいため長期保存が可能なので旅のお供として重宝されている。

兎の耳：アクセサリにして装備すると運が上がる。今使っているのがボロくなってきたので正直嬉しい。これも無駄に高いが、出現率がそれなりでかつデカイのであまり好まれない。

兎の尻尾：兎の耳と同様、しかし小さくまとまっているので人気がある。こっちは初めてお目にかかるほど珍しい上に目玉が飛び出るほど高価、城が買える。

設置型トラップ各種：素材ではないがダンジョン内のトラップを解除、回収したもの。正直作る技術がないので非常に便利に使っている。

緋色の骨：陶器の素材としてよく使われるもので、真っ白い下地に緋色の模様が入る非常にきれいな陶器になるが、ドロップ率が悪いためにあまり出回らない。

黄金の骨：金色の骨で実際には黄銅。高級な食器などの材料として重宝されている。ただし、あくまで冠婚葬祭や祭り等で使われるものがほとんどで嫁入り道具として有名。

マンドラゴラの根：魔法薬の材料になる魔力を多量に含む植物。ただし毒性が強く熱処理をしないまま食べると死ぬ。

ドリアードの葉：魔法薬の材料になる魔力を多量に含む植物。ただし幻覚作用が強く熱処理をしないと大変な事になる。

紫狼の爪：ボスドロップ。毒を持つ紫色の巨大な爪。加工すると

トリカブトと同じ強心剤になる。見た目が綺麗なためかお守りとしても人気が高い。

紫狼の牙：ボスドロップ。毒を持つ紫色の牙。加工すると麻酔薬に化けるので重宝されている。男性用首飾りになる事もある。

クリア特典：今回は一角獣の角。脆いが非常に高価な薬の材料、しかし基本的に小さいので一つではそれほど価値もない。一つで大体一回分の量。

祝福された鉱物：「祝福された鉱物名」形式で出る原石ではなく製錬された塊。品質が非常に高く水道管の材料として活躍している。

兎の耳と設置型トラップ各種、黄金の骨、祝福された鉱物を除いて初めて見る素材だ。

もちろん普通のドロップ品はいつものようにかなりの数拾ったが全部捨てても問題ないレベルのドロップって一体なんなんだ？

正直今まで稼いできた総額より稼いってしまった気がする。

あれ、もしかして俺今日死ぬの？

いやいやいやいや、普通にダンジョン脱出してるからそれはないな。

ちなみにダンジョンだが町の中央にあって常に監視されているのでモンスターがあふれたり出たところで襲われるなどの犯罪が発生したりは滅多にない。

まあ、大抵の冒険者は道具袋に入れ見えないようにして出るので高価なものを持つていかどうかも分からない相手を襲うほどの価値はあまりないせいでもあるが。

なによりこのダンジョン、生活用品が良く出るが基本的に低レベル系で固められているため正直稼ぎも少なくあまり人気がない。

まあ、噂によるとレアドロップの確率って波があって数十年に一度とてつもなく高確率で落ちるとか聞いた事がある。

きつと運よくそれにあたったんだろう。

ありがとう兎の耳もといつけ耳、きつと君のおかげだ。

しかし全部俺自身で使う素材ってどういう事ですか、正直全然稼いだ気がしません。

「おう坊主、今日も研究かい？」

「あ、ミノのおっちゃん。さすがに毎日研究してるわけじゃないよ。今日は首飾り用のヒモ二本と薬瓶四つ頂戴」

「なんだ、また薬の材料手に入れたのか？　さすがは神殿の薬庫だな」

「いやそれ言ってるのおっちゃんだから」

ちなみに今のは商店のおっちゃんことミノタウロス系半獣^{ワイルドハーフ}で種族的には体力自慢の牛獣人である。

この無駄に巨大な商店を経営する敏腕経営者である。

基本的に素材はこの商店に流すので、この商店に並ぶ素材の七割が俺が供給する物とか笑いそうになる。

ちなみに、自力で疑似ウォーターベッドを作った猛者でもある。

さらに自力で室内に井戸も掘ってしまった。

俺が供給したものと言ったら煉瓦の作り方と手漕ぎポンプぐらいである。

夏は冷たい水売って稼いだらしい。

冷却魔法で作る氷を使った力キ氷を教えたら毎日くれたっけ。

かけるものが練乳で、供給元が胸の大きな嫁さんとかリア充爆発すればいいのに。

まあ、どう見ても嫁さん含めミノなのでそこまで羨ましくないが。まあそんな話はどうでもいいだろう。

このおっちゃんも物作り好きで俺の真似をして大抵のものを作ってしまっつ。

現在商品が並んでいる棚やら机やらは全部おっちゃんの手作りで、改装も増築も全部自分でやっているらしい。

しかも綺麗な嫁さんがいる勝ち組である。

未だ子供はいないがまだまだ若いので問題ないらしい。

「いやいやご謙遜を、神殿の薬師と言えば貴方様ですよ？」

「いや誰だよテメエ。というかそんな称号俺持ってないから」

「ワハハ、まあでもな、この町で一番薬もってるのはお前らしいぞ？ 腐らないとはいえ一体どれだけため込んでんだよ」

「そりや何があるかわからないから作り置きぐらいするよ。正直これらのヤブ医者には信用できないし、誰かから聞いたから薬なんて理論俺は認めない」

正直この世界の薬を使う医者は半分ぐらいが昔ながらの薬草系で全体として七割がヤブというか駆け出しである。

医学の門は非常に狭いのである。

俺だって薬学全集なる調査書がなければまともに薬作れないのに何も知らない駆け出しに同じことができるなんて思ってたない。

なぜ図書館にある薬学全集を読んでないやつが医者なんてやってるんだと本気で思ったぐらいだ。

ちなみにこの薬学全集、昔いた狂人が数々の人体実験の末書き出した確かな実績と後ろ暗い過去を持つ禁書の一種で、しかしなぜか図書館に置いてあるというところでも本だ。

ただし俺もある種ヤブ医者である。

正しい薬の知識は持つていても診察の技術も経験もないので実際にやると失敗するに違いない。

「さすがに子供に診察してもらおうなんて変な奴はいないと思うが気を付けろよ？ 命に係わる以上かなり変な言いがかりつけられるからな」

「もちろんそこは気を付けるさ。というかため込んだ薬は自分用であって誰かに使うためのものじゃないよ」

「ま、困ったら分けてもらいに行くからその時は頼むわな。ああ全

部で十五エクな」

「ういよ。またなんかあったらお願いね」

「おうよ！ 大切な業者様だからな。今後もしつかり納品頼むぜ」

「……あのねえ。まあ業者なんて言葉教えたの俺だけだよ。ああそうだ、これちよつと粉にしてもらうていい？」

渡したのは紫狼の牙で、麻酔薬を作るための材料だ。

「おうよ。ゴリゴリつと。にしてもこの鉄のすり鉢丈夫だな。どのすり鉢使っても壊れちまうから苦労してたんだ。粉は薬瓶の一つに入ればいいな？」

「そうしてくれると助かる。まあ助かってるならよかったよ。正直作ったはいいいけどめんどくさくて使ってなかったんだよね。じゃあまた今度やらせてもらおうよ」

「ああまたな」

「またねー」

とりあえず商品を受け取り帰るのだった。

〈薬師フィフィルの日常〉

さて今日の薬はえーと、麻酔薬と魔法約二種類か。

これができたら五十種類超えるな、結構たまったな。

材料はダンジョンでとれる素材の数々である。

まず麻酔薬だが、これは紫狼の牙を粉にして高濃度アルコールに付け込むと麻酔薬が出来上がる。

すでに粉になっているのでドロップ品の高濃度アルコールに付け込む。

比率は粉一に対しアルコール一万である。

牙一つで大樽一個分の麻酔薬が出来る。

後どういうわけか粉を入れて一週間ほどでアルコールが一定温度まで蒸発しなくなるが、そこらへんはファンタジーと割り切っている。

採算性を無視すれば液体燃料としても使えるが、本格的にもったいない使い方なので命がかかわらない限り普通の人はそんなことしない。

ちなみにこの高濃度アルコール、お酒としては不味いらしい。味がしないとかなんとか。

俺はお酒飲まないのだからないが、味がなければ付け込み系の果実酒を作ったら美味しいんじゃないかなろうか？

まあそれはそうと、付け込んだものを一ヶ月ほど熟成？ させる
と従来品より強力な麻酔薬になる。

基本的には霧吹きで患部に吹き付けて使うらしい。

従来品は塗って使うのだが、効果が出るまでにしばらくかかる。効果がかなり強いので直接かけるのは絶対してはいけないらしい。かつ、速効性なので分量を間違えると危険だと言われている。

なおこれを水で百倍に薄め、薬草の粉を一束分とプニヨ玉をほんの少量入れて作られるのは応急薬と呼ばれる塗り薬で、戦場で良く使われるらしい。

兵士や冒険者の必須アイテムとか言われていて、まあ簡単に言う
と痛み止め兼傷薬である。

本当に速効性なので致命傷を負ってしまった仲間に原液を飲ませ、最後の時間まで痛みを消し去ってやるのにも使うらしい。

飲むタイプの痛みどめにするには水で千倍で薄めるか、ぶっちゃけ危険なためほかの薬を使う。

さて次の薬だ。

えーと、紫狼の爪は穴開けて紐通して首飾りにするから魔法薬の

類か。

まずマンドラゴラの根は一度どろどろになるまで煮込んで成分を抽出するがこの建物では台所にあたる部分がないので外でやるしかない。

そろそろ寒くなってきたのでちょうど良いっちゃちょうど良いんだが、まあこの前みたいに近所の女の子雇うか、安いしお菓子やつてれば文句出ないし。

というわけで三軒隣の犬っ娘こを訪ねる。

ちようど外にその子の母親がいたので聞いてみる事にしよう。

「こんにちは、リアさんいますか？」

「おや、神殿の秘蔵っ子じゃないかい。また調合かい？」

「はい、ちよつと煮込まなければいけないものが出まして、ちよつとお手伝いをお願いしようかと」

「はいはい構わないよ。ただあれはちよつとお給金出しすぎじゃないかい？ 子供のお小遣いを超えてると思うんだけどね」

「いえ、結構大変な作業ですし大人ですとこの三倍は出さないといけませんし妥当な額ですよ。問題であればお給料はもってきますので分割して渡してあげて下さい」

「まあ確かにそれがいいかね、じゃあ次からそうしておくね。ちよつとリアー？ 神殿の兎さんがきてるよー！」

…… 兎さん？

まあ確かにいつもウサ耳つけてるけどさ、運が悪いから。

後兎人ラビニアは基本森から出てこないのその言い方はどうかと思うんですが、言いませんが。

「はいはい。ああフィーちゃん、今日もお料理作るの？」

「いやお料理じゃなくてお薬だからね？」

「だって人参煮込んでたじゃない」

「あれは蓬莱人参って言うて立派な滋養強壮剤の材料だよ？」

「でも美味しかったよ？」

「そりゃ甘いからね。飲んだの遅かったし眠れなかったんじゃない？」

「あー、確かに遅くまで寝つけなかったかなー？」

「とりあえず今日は二つあるんでお給料は一回半分出すよ」

「やった！」

リアのお母さんの目が光った気がした。

リアはまだ直接もらえない事を知らない。

「では手伝ってくれるようなので今回のお給料です」

「ありがとうね、じゃんじゃん使ってくれていいからね？」

「……え？ あれ？」

リアってこういう突発的な事態に対処できないんだよね、なぜか。まあ貰えないわけじゃないからいいだろう。

「ほら、行くよ？」

「う？ あ、うん」

とりあえず孤児院の自宅に帰還。

鍛冶のついでに作ったデコボコ鍋を二つ出す。

ちなみに外にはあるが簡易的な竈が三つある。

ただし出来損ないで俺以外は誰も使わない。
なにせ小さい。

どう見ても子供用である。

ちなみに燃料は植物系ドロップ品で油をいっぱいに吸っている薪と燃え出しようなスポンジっぽい何かである。

ちなみにこのスポンジっぽい何か、物凄くよく燃える。

火力も不思議なほど強いので薪や炭の着火剤として普及している。さて、とりあえずマンドラゴラの根を刻んで水を入れ、もう片方にはドリアードの葉をすり潰して水を入れる。

「じゃあ火をつけて色が変わるたびにこれを入れてね」

「うんわかった」

「俺は薬棚の整理やつてるから何かあったら呼んでね」

「りょうかい」

ちなみに今渡した瓶は液化魔力と呼ばれる魔法薬の一種でドロツプ品である。

単体ではほとんど使い道がないが魔法薬の調合には必ずと言っていいほど使用する液体だ。

そして俺は小屋の中に戻ったわけだが薬棚を見てやはりそろそろ分類分けするべきだと思いなおす。

正直適当に突っ込んであるだけなので何がどこにあるかあまりわかっていない。

ただし、何があるかはリストにしてあるので問題ない。

一時期瓶に薬の名前を彫り込もうと躍起になっていたのだが正直無理でした。

まあ金属のふたに文字を刻み込む方はどうにかなったので問題ないが。

そしてびっくりしたのがこの方法がある意味画期的で、誰もこの方法をとっていなかったのが笑える話。

やり方としては文字の形をした出っ張りのある金属棒をハンマーでたたきつけて文字をつけるのである。

今までは棚ごとに分類しておいていたらしく、空っぽなら作らなきゃなんともアナログで実用的な使い方をしていたんだとか。それってスペース無駄じゃね？ という言葉で目から鱗だったとか。

正直整理がメンドクサイという話をちらほら聞くが薬を間違えるという話は聞かなくなった。

ヤブ医者はこれすらしないので未だに薬を間違えると聞いた事があるが、この町では表記のない薬瓶の使用を禁止しているのでそんな事は発生しない。

さて、未だに全容を理解できない薬棚だが、意外と日常で使う薬が多い。

分類としては次のようなものだ。

- ・ 傷薬（塗り薬）強さに応じて五種類
- ・ 痛み止め（原液ただし大樽のため薬棚外にて保管）
- ・ 痛み止め（塗り薬）強さに応じて十種
- ・ 痛み止め（飲み薬）強さに応じて十種
- ・ 風邪薬（滋養強壮剤）強さに応じて十種類
- ・ 胃腸薬（漢方薬っぽい何か）整腸剤と保護剤と抑制剤の三種
- ・ 興奮剤（魔法薬）疑似惚れ薬、疑似排卵剤、精力剤強さに応じて三種
- ・ 魔力回復薬（魔法薬）強さに応じて五種
- ・ 体力回復薬（魔法薬）強さに応じて五種

ちなみにほとんどは濃度の違いで薬の強さをわけている。

何せ必要な強さから離れすぎると毒になったり効かなかったりするのだ。

ただ胃腸薬系は漢方薬系統なので飲みすぎない限り大丈夫である。興奮剤は俺自身で使う予定はないが、おやっさん当たり差し入れようと思って作ったがいらないと言われてしまったために保管してあるだけだ。

興奮剤を二種類飲ませて自分も興奮剤飲めば子供ぐらいできると思うんだけどなあ。

まあ二種類がどれどれを自身が飲めばいいかは察して下さい。

まあ奥さんもおやつさんに好きな事やらせてるみたいだし、もう少し自由でいたいんだろう。

ちなみに今作っている三種類は一番強い薬で、牙が痛み止め原液の上位薬剤で効果的には今ある痛み止めを濃縮したようなものだ。ただし今ある痛み止めに比べ効果時間が長く副作用も小さい高級薬である。

マンドラゴラは興奮剤の魔法薬版で混乱剤とか呼ばれることもあるほど強力な惚れ薬の一種だ。

ただし従来品のような飲ませるタイプではなく体に塗るタイプで、例えるならフェロモンのような効果があるらしい。

使うつもりはない、手に入ったので何となく作ってみただけだ。

ドリアードが滋養強壮剤の魔法薬版である。

非常に強力で死にかけてる相手とか衰弱してる場合とかにしか使えないだろうと思うが非常に強力であることに変わりはない。

少量で通常の滋養強壮剤と同じ効果があるので旅のお供として有名な薬でもある。

まあ今ある薬を棚ごと、強さごとに並べたがやはり結構な量が出てきている。

一回に使う量を考えれば軽く一年は医者でできそうな量だな。今更だがなんでこんなに作ったんだろうか？

まあきつと趣味だ。

意味なんてない。

え？ 強心剤は作らないのかって？

正直心臓病なんて見てわかる物じゃないから作っても無駄だと思う。

普通毒として以外は使わない薬だしね。

さて、そろそろ魔法薬の方もできてるだろう、薬瓶もって外に出た。

「あ、お兄ちゃん。ちょうど今呼ぼうと思ってたの」

「ん？ どうした？」

「お薬が真っ白になっちゃったの」

ちなみに今作っている薬は両方とも最初は緑、煮ていると黄色になり液化魔力を加えると緑に戻り、完成すると白くなる。

なので問題なく完成したようだ。

分量？ 水と材料は最初に用意した量でいいし液化魔力は基本的には何といても全部蒸発するので何の問題もない。

「よし、完成したみたいだね。今日はありがとうね、はいべっこう飴」

「わーい！」

最初は金平糖を作ったのだが、予想以上にめんどくさく難しかったので最初の一回以外は全部べっこう飴だ。

ちなみに砂糖はドロップ品なので高級品である。

まあ俺は乱獲する関係上、氷砂糖のような砂糖の結晶が大樽一杯分あるわけで特に気にせず使っているが、実は結構リッチな生活しているのかもしれない。

とりあえず出来上がった魔法薬を薬瓶に詰めてふたには仮のラベルをはっておく。

大抵の場合、蓋には後から刻印するのだ。

まあそんなこんなで今日の調合も終わり一息ついた。

気づけば真っ赤な夕日が綺麗な時間帯になっていた。

紫色になるまでには残りの作業を終わらせてしまおう。

ところで兎シリーズだが、大抵は金属で固定し輪を作りそこに紐を通して首からかける首飾り方式が主流である。

まあその場合耳はデカいので不評なのもわからないでもない。

ちなみに兎シリーズには耳、尻尾、腕、足、皮があるが皮だけは別物扱いであるらしい。

というのも巨大兎の一枚毛皮は子供用の対呪魔具になるのでアクセサリーにはしないからだとか。

まあ、ここらには元となる巨大兎がいないので手に入らないそう
だ。

まあそんなこんな兎の尻尾のアクセサリを作る。

そういえば俺のように耳をつけ耳にした例は見た事がないが。

後で聞いた話だが、つけ耳というのは一般的に義手や義足等と一緒に戦闘などで欠損した獣耳の代用品という扱いらしい。

つまり、一般的に見た俺は兎人になりたかった長命種に見えるの
だろう。

どちらにしても里から出てこない一族なので変わり物には違いな
いが。

とりあえず尻尾の方は従来の方式でいいだろう。

ちなみにだが、兎シリーズは全てが明るい黄色をしている。

ラビニア

兎人は耳から尻尾、体毛に至るまで真っ白なで間違えられる事は
絶対ない事をここに明記しておく。

そんなわけで詐欺とかもできない、もはや常識である。

爪の方は安全祈願のお守りになるらしいがよくしらない。

どうやら液体魔力に付け込むことによつて魔具にするらしい。

対毒の魔具になるらしいので俺も一応付け込んでおくことにする。

ここで重要なのは、牙だけでなく紐も同時に付け込まなければい
けないらしい。

そうする事によつて首から下げるといふアクションで対象を認識
させているため紐も魔具の一部という扱いになるらしい。

魔具としては結構ポピュラーな部類なので目立つこともないだろ
う。

まあさすがにジャラジャラとアクセサリを付けたりしたくないが、

まあ場合によっては仕方ない、準備できるものは準備しておくのが
自分のやり方である。

よし、外も暗くなっ たし今日は寝よう。

第二話 生活に慣れた生活（後書き）

・大樽

普通のデカイ樽だが、主人公の背よりもでかく主人公が丸まれば軽々三人はいるほどでかい。

・金平糖

砂糖菓子的一种で、大きな鍋に砂糖を敷き砂糖水をかけながら乾燥させころがしデコボコな球体にしたお菓子。綺麗に作るのは職人の技である。

・べっこう飴

水と砂糖で作るシンプルな飴。結構おいしいがほぼ百パーセント砂糖なので食べ過ぎると太るし体によくない。型にはめると色々な形にできる。

二話終了時点での主人公ステータス。

スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。

なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：フィフィル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：初心者

転職可能職業：職業訓練生

L V ・ 9 9 / 9 9 E X P ・ 9 9 ・ 9 9 % N E X T : 2 7

称号一覧

「転生者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「神殿の隠れマスコット」民間称号：冒険者ギルド関係者からの称号

「技術屋」民間称号：一般民家からの称号

「ダンジョンの主」民間称号：冒険者からの称号

「エタールの人」民間称号：冒険者からの称号

<< 特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

- ・Lv.1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能
- ・Lv.2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能
- ・Lv.3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能
- ・Next-count 42355

>魔法：生命力回復補助

- ・Lv18 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。
- 効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。
- 効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

- ・Lv37 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。
- 効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。
- 効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

- ・成長速度干涉「低下補正」
- ・特殊技能干涉「成功率低下補正」
- ・生産スキル干涉「成功率低下補正」
- ・レベルアップ速度干涉「低下補正」
- ・レベルアップ時ステータス追加上昇
- ・転職制限「基本職の転職不可」

第三話 イベント発生（前書き）

とりあえず投げる。

いつになく早く次話が完成した。

文章評価 5 + 3 平均 4 結論：普通

ストーリー評価 5 + 4 平均 5 結論：まだまし

評価が嬉しいが、正直感想が欲しい。

第三話 イベント発生

朝が来た、きつと今日もいい日になるだろう。

適当だけどね？

まあ今まで兎の耳で運を上げてたところに兎の尻尾が加わって単純計算二倍運が良くなってるはずだからいい日になってくれないと困る。

まあまだ魔具化していないので尻尾の方は効果ないんだけどね。
一日あるものに付け込んで初めて幸運補正付きアクセサリになるのさ！

さて、話は変わるが前々から予定していた事だが今日は一日鍛冶を行う。

何を作るかつて？

やっと必要量がそろったのだ。

そう、浴槽を作るだけの材料がなあ！
元日本人としては風呂は必須である！

誰が何と言おうと絶対である！

神が否定しても俺が否定させない！

ちなみにもう浴槽用の鋳型は作ってある。

形の関係上引き抜けないので使い捨てだが使うのも俺ぐらいなので問題ない。

材料が揃うまでは必死にデザインと利便性を高める研究をしてやつとこの日が訪れたのだ。

それに、何よりもステンレスの材料がそろったのだ！

さすがに量までは覚えていないが大体一割とかそこらへんは勘で
どうにかなるだろう強度なんてあんまり関係ない。

なによりも普通の浴槽と違って馬鹿みたいに厚いしな！

一度形にすると再加工が恐ろしく難しいが、鑄型なら何の問題も
ないんだぜ！

材料は銅！　そしてそれなりの量を用意したクロム、ニッケル。
クロムとニッケルは両方で三割前後程度だったはずだ。

そして、世間一般からすればそれら二つは利用法がよくわからな
い屑金属として扱われるので買い取り出しても集まらないし本当に
苦労したよ！　マジで！

そついや配合の分配はクロムが少ない方だっけか？

まあ純粋な物質ばかりだし適当でもある程度あつてれば問題ない
だろうな。

いやあ祝福された鉍物つて純粋な鉍物が得られるから楽でいいわ
あ。

とりあえずクロム一割のニッケル二割ぐらいでいいか、どうせ過
熱部分以外は分厚くなるんだし問題ないはずだ。

なぜか生前の記憶が無駄に鮮明で助かった。

正直生前の記憶なんて時間と共に忘れるかと思っただが、生前
思い出せなかったようなことまで思い出せるのだ。

現在生きてきた記憶よりも生前の記憶の方が鮮明なのはやはりフ
アンタジーと割り切るしかない。

考えるだけ無駄である。

とりあえず溶かし終えしっかり混ぜ合わせたわけだがとにかく暑
い。

水飲みながらやってるが死ぬほど暑い。

魔力圧の鍋で溶かすとは言え、正直俺の五倍以上でかい鍋でお立
ち台に乗って専用の棒でかき回して料理するようなものである。

無論、一番暑いのは鍋から溶けた金属を出し鑄型に流し込む、金属が空気に触れ熱が逃げるその時である。

まあお爺ちゃんが無言で手伝ってくれるので一人でやるよりははるかに楽だ。

そして鑄型に必要量を流し込み、上から浴槽の内側の空間になる部分の鑄型？ を押し付ける。

まあ両方とも軽石みたいなやつを削り出して作るんだけどね、馬鹿でかいその石を探すのには苦労しました。

無論両側に長い持ち手がついており直接触れるような事は無いし、一度下ろしてしまえば中に仕込んだ鉄の自重で安定してくれる。

一番思ったのはこの世界の物作りって便利でぬるいなという事である。

全てが全てではないが元の世界に比べて鍋で金属溶かすとかありえない事やるし魔法があるので昔ながらのやり方でも温度管理とか楽だし。

いや、無論風魔法で炭の温度調節ができるというだけで温度管理そのものは職人の技よ？

そんなこんなで浴槽「飯」が出来上がりました。

後は鑄型の部分を削りだしユー字型の過熱用水道管を取り付ける上下の穴と排水用の穴をあけ、事前に作っておいたステンレスの水道管を取り付けるだけである。

無論内側と外側の鑄型となっていた石を削り落とした後、荒を砥石で削らなければ使い物にならないがそこらへんは一ヶ月もかければ問題なくできるだろう。

むしろ商店のおっちゃんに手伝ってもらえば三日でできる気がする。

こういう新しいものの好きだし喜んで手伝ってくれるだろう。

まあその場合は比較的手に入るアルミと何かの合金で作るだろうが俺には関係ない事だ。

もつかるのはお爺ちゃんなので何の問題もない。

え？ 転職はどうしたのだった？

そんなものより風呂である。

はい脳内会議煩い黙れ、メイン人格の強権をもってして意見は全却下である。

とりあえず頑張ってくれたお爺ちゃんには一番風呂を譲ってあげようと思う。

まあ俺だけが使うわけじゃないのでかなりデカく作っているので三人ぐらいいは余裕で入れると思うけどね。

ああ、事前に洗面器は作っておいたのさ！

ふははは、そこらへん抜かりはないのさ！

ああ、もちろんバスタオルと体洗うためのタオルの材質は別物ですよ。

へちまっぱい植物は探したんだが見つからなかった。

どうやらウリっぱい植物はあるもののあの見事な繊維が残るものは無いようなのである。

しかたないので体洗う方は目の粗い安いほうを用意しバスタオルは目の細かい柔らかい物を用意した。

なお、洗濯は無料で使わせる予定の神官さんたちに押し付ける予定である。

石鹸にシャンプー、リンスは存在する。

ただし、例の如くドロップ品なので無駄に高い貴族たちが使うものだけだな！！

まあ話によるとある神官さんが冒険者の一人に貢がれたらしいので分けてもらったが、頼めば結構分けてもらえそうである。

え？ 俺は持っていないのだった？

別のダンジョンの特産らしくて今住んでいる地域のダンジョンじゃ出土しません、なぜか。

このダンジョンは食材系が特産らしい、まあいいんだけどね。

とりあえず必死こいて丸太とテコの原理で運んでいるのだがこれがまたキツイ。

商店までもつていくとミノのおやつさんが目を輝かせて出てきた。後ろでミノなお嫁さんが呆れてますが病氣なので諦めて下さい。まあ戻ってきたら家族風呂作るだろうからそれで許してやってつかさい。

「あれか、これがお前さんの言ってた風呂か。それで俺は何をすればいいんだ？」

「無論荒削りで形を整えて俺が砥石で整える」

「とりあえず石で作るとは思わなかったな」

「いや石じゃないから。まあ削ってればわかるよ」

「こんなデカけりや俺でも入れるんじゃないか？」

「まあね。出来上がったら皆でまずはいるさ」

「お前さん、そのためにだけにデカくしたのか？ デカくするのは大変だろうに」

「さすがに使うのは俺だけじゃないし何より俺だっていつまでも小さいわけじゃないからね、とりあえず削ろう」

まあそんなわけで中のステンレスを削り出したわけだがおやつさんはビビっていた。

鋳型が使い捨てなのにビビっていたのか鋳型そのものに驚いたのかは知らないがかなり驚いていた。

普通風呂を金属で作るやつらはいないだろうからそれにビビったんだろうな。

まあそんなこんなで金属部分の取り出しに成功しここからは手動ドリルっぽい何かで必死に穴をあける作業だ。

ちなみに穴をあけるための魔具であるためステンレスなんて馬鹿硬いものでも穴をあけられる優れものだ。

魔法マンセーと叫びたい。

まあ効率はそれほどよくなく、どちらかと言えば使用者の力に依存する部分が多い道具である。

おやつさんは文字通り化け物レベルの力があるのでそこまでかからないようだが細かい作業が苦手だ。

結論だけ言うと自分は排水用の小さい穴を必死になって開け終わる頃には真夜中で、おやつさんの担当のユー字管をぶっ刺すデカい上下の穴は普通に開け終わっていた。

ただし、大きい方の穴は予定していたよりも少し大きく穴が開いていた、結局つなぐためのコネクタを作る羽目になったが問題ない。

細かい隙間？

まあいつもの如くプニヨ玉とかして埋めましたよ。

それから内側の研磨に三日かかったがまあいい方だろう。

搬入は一度シャワー室の壁を壊す事になったが何の問題もない。

その時の詳細はまあ後々という事で。

そして外側は木の枠で覆い内側はスノコのような板を底にあたるように固定する。

火傷が心配なのでお湯になって水が循環する穴のあたりには保護用に木枠を取り付けあまり近づけないようにし火傷防止のためにお湯をかき混ぜるためのオールモドキも置いておくようにした。

オールモドキをへんな木剣と馬鹿にされたのはいい思い出である。馬鹿にしたやつらは絶対風呂を使わせてやらん。

なお、排水口をふさぐ栓は例の如くプニヨ玉加工品である。

プニヨ玉万能説が浮上しているが無視である。

さて、設置である。

だがその前に、今更だが俺の住処すみかを紹介しよう。

まず自身の部屋は物置も兼ねているため九畳ほどのスペースをと

っているが、半分以上は薬剤庫、残りのうちさらに半分は疑似ウォーターベッドである。

他の仮眠室は一部屋が四畳半ほどのスペースを持っている。自身の部屋も含め計九つの仮眠部屋がありその隣が倉庫兼用具庫兼尋問室で、最後が排水の関係から後回しになった九畳ほどのシャワー室だ。

見た目は横長の長屋風である。

各仮眠部屋には四畳半ごとに一辺が三十センチほどの大きさの天窓二つと同様の大きさの二枚一組の窓があり、簡易ではあるが窓に鍵のようなものもついている。

天窓は明かりを取り込むための窓なので開かない。

なお、倉庫に窓はいらないという独断と偏見により窓はついていない。

ちなみに前作った鏡は最後のシャワー室に設置してある。

無論の事風呂は最後のシャワー室に設置する予定だ。

壁に馬鹿でかい穴をあけた時は神官の皆に白い眼で見られた。

別にこんな馬鹿でかい覗き穴を作ろうなんて馬鹿な事するわけないだろう！（混乱気味です）

まだ二次性徴前で興味よりも恥ずかしさの方が強いんだぞゴルアリア充ぶつ殺す！

というかこんな馬鹿でかいと中に入っても丸見えだって、そんなのにはいる人いるわけないだろう！

さて、閑話休題はおいとこう。

U字型の配管部分を外に突き出す形で壁を修復し突き出した部分に耐火煉瓦で、建物と間をあけて大きめの竈を作る。

ここで重要なのはU字になる部分がちょうど過熱部分になる事である。

後、触ると危険なので基本的に管の部分は周りに耐火煉瓦を積んで触れないようにしておく。

さあショータイム！

え？ ショータイムは違うつて？

こまけえことはいいんだよ！

まず、事前に伸ばしていた水道から多量の水をなみなみと家族風呂？に注ぎます。

まああのタンクの中身じゃ全然足りないので必死に手漕ぎポンプをこぐわけですが誰も手伝ってくれません。

まあまた可哀そうな子供扱いなのですね、わかります。

そして次に先ほど作った竈に火を起こす。

後は浴槽にお湯をかき回しに帰りながら火を絶やさなければいいだけなのでお爺ちゃんとおやつさんを呼んでもらう事にした。

ちなみに石鹼は敵ドロップのため高級品なので、そのうち実験して民間で作れるようにしよう。

確か油系を鹼化させる事で石鹼ができるんだったか？

まあとにかく今は風呂である。

三人で体を洗ってから入ったわけだが。

「いやあ、労働後の風呂は最高だね。俺毎日入るわ」

「こりゃあ生き返るな。俺ん所でも作るう」

「確かに気持ちいいわい。ただわしはもう少し熱い方が好みだな」

一番風呂こそ至高、それは風呂好きにとって名言である。

誰が言ったかまでは知らないが。

自分は背が足りないので専用の椅子を持ち込んでいる。

後、さすがにミノさんはデカいだけあって胸までお湯が届かないが、自分のところで作る時は肩までつかれるものを作るだろう。

まあ後々の観察した結果から言うとなミノさんは風呂場を一から作ったため三か月もかかったが、ミノタウロスみたいなデカイ方々でも入れるようないい風呂ができていた。

長時間温めるためにむこうは炭を使っていたが、自分は長風呂はあんまり入らないので薪で問題ない。

水が漏れなければ鋳型に使う石でも問題なくできるだろうと言ったらお爺ちゃんも作るって言ってた。

まあU字型の部分は火にかける関係上金属がいいと言ったら俺が試作で作って放置してあるものを使うと言っていた。

いやあ、一個大きく作りすぎたんだよね、ステンレスだから再加工も無駄に難しいし。

まあ重要なのは水が漏れない事と過熱部分とお湯をかき回す事だからね。

後、加熱中にかぶせておく蓋、これが温める時に重要である。

「いつもの事ながらお前さん突拍子もない物を作るな。まあ便利だからいいが」

「まあいつも事じゃて。わしの所に来た時はいきなり土下座から始まったぞい？」

「それは言わない約束でというやつだよ。でも風呂はやっぱいいなあ、入るまでがメンドクサイけど」

まあ誰が誰の台詞かは想像するまでもないと思うので明記しない。口調が独特だしね？

ああそうそう、お爺さんはドワーフみたいな種族で体が無駄に丈夫で器用なため鍛冶とか力のいる職人系が良く出る種族らしい。

そんなこんなで男性陣には好評な風呂だが、女性陣には美容効果があるとわかってからは順番待ちが並ぶほどになった。

まあ準備する関係上一番風呂は自分だが。

温めなおすなら燃料費が自費である事を除けば利用料金も安いと思う。

後お湯を使うようになった関係上、屋根の上に通気口を付けたのだが覗きに来て屋根から落ちる男が続出するとは思わなかった。

無論除き対策で屋根にはよく滑る油をぬつといたからなんだがそこらへんは裏話である。

そもそもあの通気口は中を覗けるようにできていないんだが、覗きに行ったやつらは他のやつに教えてやらないんだろうか。

せいぜい中の会話が聞こえる程度だし、屋根に上ればさすがに足音でバレルので屋根に上る馬鹿は結構すぐいなくなった。

男性陣の一部は落ちる馬鹿をニヤニヤしながら見ていたが女性陣にボツコボコにされてからは退散して影も見えなくなった。

まあいつの時代も女性強いものだと思う。

ああそうそう、排水用の溝を除けば四畳半の大きさの風呂はちょっとデカく作りすぎたかもしれないと思わないでもない。

まあ多人数で使う以上作り始める時はこれぐらいが妥当だと思うのだ、入ってみるその時まで。

え？ 更衣室？ そんなもんはない。

基本馬鹿でかいバスタオルで体を覆おおって隣の尋問室で着替えているらしい。

その際尋問室に下着を盗みに入ろうものなら順番待ちの神官さんたちからそのまま尋問フルコースである。

たまに替えの服を忘れて手術着を借りに来るうっかりさんもいるがまた別の話である。

ただその手術着、少し透けるんだよなあ……。

自分は男だし自室が近いので特に気にしないがやはり女性は見られたくないのだろう、当たり前だが。

ちなみに浴槽の基礎部分を金属で作ったのは可能な限り全体の温度を均一にするためである。

まあそこそこの効果しかないんだが大きくなると端っこがいくらか冷たくなったりするし、そこは効果が認められてもいい部分だと思う。

正直現代のように燃料をバカス力使える時代ではないので女性陣

は燃料費を皆で出し合って入っているらしい。

まあ購入元は俺だが。

男性陣はお金を持っているやつらが入りに来る。

娼婦と一緒に入った馬鹿がいて神殿関係者に蹴り出されてた事もあったな、公共施設なので自重して下さいという話である。

まあ色々な人が入りに来るわけで一団体ごとにお湯が入れ替えられ掃除されていたためいつでもピッカピカなのは笑った。

なんか自分が磨いた後よりピッカピカなのは少し引いたが。

まあ公共施設としてこの四倍の広さを持つ風呂屋ができてからは利用客が神殿関係者で落ち着いたが。

公共施設の方が加熱に魔法使いを雇っているらしい。

基本的に魔法使いは研究職であり金欠なので結構な働き手がいるそつだ。

まあ男性側には男性、女性側には女性の魔法使いが個別に雇われるのには笑った。

正直透視魔法なんて音波探查を脳内で映像化するようなもので酷くボヤけた白黒映像しか見えないだろうにと思う。

いつの時代でも覗きは浪漫なのだろうか？　すくなくとも幼児化した今の俺にはわからん。

さらに笑ったのはお湯が汚れるので事前に体を洗ってこいという規則には本当に笑った。

風呂って体洗う施設だろうに、大爆笑である。

理由を話したら皆苦笑いしていたのは記憶に新しい。

どうにでもなーれって唱えて放置した自分は悪くないと思う。

まあそんなこんなでまたひと段落した。

この世界に来てからかなりの年月が経っている。

気がつけば童^{わらへ}の帝的意味^{みかど}で魔法使いになっていた。

まあ未だに子供作れる体になってないだけだな。

そもそも生前合わせればとっくの昔について話だがまあ体が変われば年月はリセットでいいだろう。

まあそれはそれでいいと思う。

正直今考えると二次成長期来なくていいよと思う。

もったいないじゃん？　そういう事にかかる時間とか処理する労力とか謎の疲労感とか。

後あの白いのって無駄に栄養価高らしく相手がいないと栄養捨ててるようなものだし。

まあそんな話はどうでもいいだろう。

問題なのは今更だが転職である。

闘技場でちょこつとモンスターぶつ殺してくればいいかなと思っただが、いきなり行っても迷惑だろうとやはりダンジョンにする事にした。

後に分かった事だが、いつのまにかブラックリストにのっていて闘技場は一度も行かぬまま出入り禁止を食らってしまっていた。

やるせない話である。

さて、ダンジョンについたわけだが、とりあえずもうゼリーでは経験値が入らない。

今更な話だが、どうやらレベルに応じてもらえる経験値が引かれていくらしい。

とりあえず採取だけは忘れないのがフィフイルクオリティである。何せ鉱石系はいくらあっても足りないのである。

まあ採取以外はせず敵も倒さず走り抜けボス部屋へ到着したわけだが、何の冗談か子龍がいた。

あえて言おう、龍とは非常に強く凶暴で会話ができて話を通じず基本気に入らなければ相手をぶつ殺す生き物である。

たとえ子龍であろうとだ。

あれ、これつんだ？　ゲームオーバーですか？　いやいやこんな所に子龍とはいえ龍がいるわけがない。

という事で頭にある核を破壊するべく瞬足で接近し角剣を突き出した。

そこからは記憶があやふやだが、古龍に見えていたものが崩れて

黒い影のようなものになったのをうつすら覚えている。

「最悪だ」

目が覚めて一言目がそれであった。

今回の敵は通称シャドーといい別名ドッペルゲンガーだ。

一時期乱獲騒ぎがあつたが遭遇そのものが難しく、何よりもうわさが眉唾物だ。

本人に合つた神具級のアイテムをドロップするらしい、という噂。そして、本人の姿を真似て変身すると思考までコピーする。

つまりあそこには本当に今の今まで子龍がいたのであつてその強さになったドッペルゲンガーに突っ込んだらしい。

相手が油断していたのかは知らないが一発で核になる部分を破壊できたのは最高と言える幸運だつた。

正直別の生き物の形をまねて変身するゼリーの亜種、メタモル物真似師かと思つてたので命拾ひしたと言わざる負えない。

ただ、ドッペルゲンガーの最大にして最高の、有名になるべくしてなつた特徴が存在する。

それは姿を真似る事でも強さが上下する事でもない、ダメージの反射だ。

大抵の上級者になればなるほどこれで死ぬといわれるほど厄介な能力である。

ここがボス部屋だつたから良い物の通常のマップだつたらと思うと震えが止まらない、確実に死んでいただろう。

しかも、倒すと何らかの呪いを受けると言われている。

幸いにして俺は最弱を誇る最下位職初心者であるため死ななかつた。

頭を一突きだったがダメージは昏倒するレベルだったらしい。
もうウサ耳とウサ尻尾サマサマである。

まあそれら二つがもたらすのは幸運であって悪運ではないがこの
際どうでもいい。

そしてここは……、神殿？

しかしなぜ誰もいないんだ？

それにまるで、世界に誰もいないかのように恐ろしく静かで風の
音すら聞こえない。

一体何があった？

とりあえず……、現状の確認か？

「こ、コールステータス」

自分の胸に手を当て魔法を唱える。

ちなみにターゲットの指定は昔から手のひらを向けるか指を向け
るか杖を向けるかであるらしい。

伝統なのでみんなそうするが、実際に集中力が増す効果があるた
め実用になっっている。

ただ、特にそんなことしなくても問題ない場合もある。

このコール系魔法もその一つではあるが、混乱している自分はつ
いくせでやってしまったのだろう。

そして頭の中に告げられる特殊魔法の成否判定。

——「成功」——

表示されるのは現在ステータスだ。

名称：ファイイル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、

術式使い「99」

LV・1/99 EXP・0% NEXT:50

称号一覧

「@*者」\$級# : システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破体現者」特級称号 : システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号 : システム権限により詳細閲覧不可

<< 特殊技能一覧

> 魔法 : ステータス閲覧

・LV・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・LV・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・LV・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42354

> 魔法 : 生命力回復補助

・LV18 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

> 魔法 : 肉体活性化

・LV37 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にとりまなう解毒速度の上昇。

> 魔法 : 終わりの裁き

・LV1 〓身及び一手の罪・重+によつてダメージが変わる対、

魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

える。

<< 祝福一覧

> 長命種の宿命

> 第一次限界突破者

> 自分殺しの宿命

> 呪い：シャドウハンド

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

・転職干涉「特殊職業解放」

・特殊干涉「レアドロップ率上昇」

・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」

・特殊干涉「固有スキル獲得」

・特殊干涉「肉体成長停止：十年」

・特殊干涉「再度ドッペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」

・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

……ステータスが一部文字化けしている。

たぶんこれがドッペルゲンガーの呪いとやらなのだろう。

確かシャドウハンドと言ったか、ステータスの大部分を隠すものらしい。

それにしても少ししか文字化けしていないが、なぜだ？

まあ現状に問題ないならこの表示でも問題ないだろう。

文字化け部分もどうにか読み取れるし読み取られちゃまずいところがちょうど文字化けしたのは幸いだった。

せめて変更ログみたいなものがあればいろいろ状況がわかるのだからそんな便利なものはこの世界に存在しない。

それに、普通は一生を通して不変と言われる祝福がなぜか増えている。

しかも固有スキル？ いや平穩に暮らしたいのでいりません。

正直ドッペルゲンガーなんて会おうと思って会える相手じゃないんですが。

それに増えた一つを除き尽くマイナス補正消えてないか？ 転職制限残ってるけど。

まあ体が成長しないのはいい、今までだってそこまで変わらんかったし正直成長期に入っただけに入っただけがやはりゆっくりとしか成長しないし。

十年と言えば純種の人類換算で一年前後の時間に相当する。

無論大体純種換算で二十歳ぐらいまででそこからは百年で一年換算ぐらいになるらしい。

なので正直何の問題もない。

今得るべき情報はこれぐらいだろうか？

民間称号が全部消えてしまったのは気になるが確かめようがないにしても終わりの裁きついていかにも聖書に出てきたりしそうな名前だな。

中二病臭くて嫌なんです。

まあ仕方ない、使わなければいいのだ。

ステータスを話すなんて結婚して下さいと告白するようなものらしいし問題ないだろう。

とりあえずまずは人を探すべきか。

確か神殿内では唯一人が一切いなくなることはない祭壇を目指す。ちなみに祭壇とは名ばかりで一番広い部屋の中央に机のようなものが置いてあり太陽と光を模した十字架のようなオブジェが飾られている場所だ。

基本的に教主や神官が祈りをささげる場所で、常に管理官として最低一人、最大で十人にも及ぶ人間が常時待機している。

元々は転職するための儀式場である地下への階段を隠しているのがこのテーブルで、転職を希望する物はここから地下へ降りるらしい……。

なのだが、開かなかった。

本当にどうなってるんだ。

最低でも五人で動かすものだからか？ まあ人がいないので一人

で動かすしかないのだが、レベルから言えば一人で動かせる程度の補正は受けてるはずなんだよな。

それがピクリとも動かない。

そもそも人がいないのもおかしい。

ここは常時人がいなければならないと神殿側とギルド側が定めているのに、なのに誰もいない。

「主よ、ここは一体どこなのですか？」

ここでこれを言うのはお約束というやつである。

元の世界で言う「ここは誰？ 私はどこ？」というやつである。

とりあえずやることやったし各部屋を回るが誰もいない。

しかもユラユラと湯気を立てる飲み物が放置してあったり食べかけの食事が放置してあったりまるで人が消えてしまったかのような風景が広がっている。

どこかの幽霊船で同じような話を聞いた覚えがあるが、あれの落ちはなんだったか、そして誰もいなくなるだっけか？

正直怖い。

本当に何が起こっているのだろうか？

こういう不思議な現象の対処は勇者の仕事だろ？ サボらず解決しに来て下さい本当に。

第三話 イベント発生（後書き）

三話終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイイル・ファウ・フォリア 職名：ファイー

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、
術式使い「99」

LV・1/99 EXP・0% NEXT:50

称号一覧

「@*者」\$級#：システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破体现者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・LV・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・LV・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・LV・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42354

>魔法：生命力回復補助

・LV18 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・LV37 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

>魔法：終わりの裁き

・Lv1 Ⅱ身及び一手の罪・重+によってダメージが変わる対魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

>第一次限界突破者

>自分殺しの宿命

>呪い：シャドウハンド

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

・転職干涉「特殊職業解放」

・特殊干涉「レアドロップ率上昇」

・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」

・特殊干涉「固有スキル獲得」

・特殊干涉「肉体成長停止：十年」

・特殊干涉「再度ドッペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」

・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

第四話 逃亡潜伏独り立ち（前書き）

ダンジョンの成長？ ダンジョン攻略？ すみませんもう少しだけ待って下さい。

大体独立が終わって神殿と仲直りしたあたりからやろうと思ってます。

だが最後に一言だけ言い訳を……。

ふははは、ファイルの技術は世界一いいいいいい！！！！

第四話 逃亡潜伏独り立ち

あれから十年に及ぶ年月が……、たたねーよ（笑）

そもそもそんな長持ちする食べ物がないわけで、どうにもならないなら早急に脱出しダンジョンやらどこやらで食糧を確保しなければならぬ。

そもそもなぜ誰もいない？

神殿内は何処を探しても人っ子一人いない。

外は外で、まるで切り取ったかのように真っ暗で何も見えない。外に出るのは危険そうなので一切出ていないが一体どうなっているのだろうか？

とりあえず探索して色々なものを集めたが初めて見るものは目の前にあるシンボルだけである。

神殿の壁にデカデカと彫刻されているあのシンボルである。

見つけたのはそう、全部屋をチェックし終わって祭壇に戻った時だ。

祭壇の上に置いてあるオブジェがキラキラと光の粉のようなものを纏っていたのだ。

なんというか、この部屋に最初に着た時も光ってた気がするけど太陽光に何かが反射してたんだろうと思っていた。

良く考えたら外は暗いの中は明るくどこが光源で光を取り入れているのかさっぱりわからない。

影すらできない。

そんな中で光を放つ？ シンボルのオブジェに疑問を抱いて調べてみれば首飾りのようなシンボルがかかっていた。

もうね、ちょうどアクセサリーじみた大きさの首飾りで、あれか

神官の忘れ物かと思つたほどだ。

しかしそれにしても教主や神官の人がこれをつけているのを見た事がない。

そもそも神殿のシンボルにひっかけておくなど絶対怒られてとられる。

ということとは、元々あつたものではないのかもしれない。

とりあえず持つて帰ろう、何かの手掛かりになるかもしれないしというのが今までの流れである。

本当に俺は何に巻き込まれたんだろう？

「転職イベント開催中？ 一体ここはどここの巻」

そういえば職業が初心者から職業訓練生に変わっていたな。

実際転職した覚えもないしバグでも発生したのだろうか？

そういえば「Error no. 001」という謎の黒い球体がアイテムとして追加されていた、背負っていたリュックに。

もしかして初心者が限界値に到達するのは想定外なのかもしれない。

この世界にこんなシステムを作ったのは誰か知らないがえらい手抜き具合である。

もしかして職業訓練生も……？

いや、限界レベルが転職条件にある職業があつたからそれは違つたろう。

そうなると初心者も違うのでは？

そういえばドッペルゲンガーの経験値って聞いた事ないな、攻撃した人って基本死んでるし。

まあ死んだ直後、大体五分以内で欠損が少なければ蘇生魔法で息を吹き返す事があるのでドッペルゲンガーの情報が出回っているわけだが。

もしかしてあれか、俺が死ななかったからバグったのか？

まさかバグのせいで呪いが正常作動していないからステータスのほとんどが見えるのか？

そもそもが死亡前提で全部組んであるって事なのか！！？

いやまて作成者、勝利イコール死亡で結ばれるモンスターってなんなのさ本当に。

そんなモンスターいたらそのゲームは間違いなくクソゲーに分類されるぞ、本当に間違いなく。

まあステータスが見れる分には問題あるまいと結論を出して考えるのをやめる。

正直考えたって何も変わらないのだから他のことをするべきだなにせ外に出る事が出来れば時間はできる、考えるのはそれからでも遅くない。

大体本当に今の状況は一体全体なんなんだろう？

とりあえず状況をまとめよう。

- ・ 謎のアイテム コール魔法で鑑定かけても詳細が表示されず。
- ・ 誰もいない神殿 一応気配もないので本当に人がいないのだろう。

- ・ 外の存在しないような闇に覆われた外界 本を投げてみたら音は帰ってきたので外がないわけではないらしい。

- ・ 謎のシンボル 詳細不明、コール魔法も反応なし
- ・ 不思議な強制転職 詳細不明、履歴がないので確認のしようがない

うん、一切共通点がないね♪

もう死ねばいいのに。

いつその事あの真っ黒い外へ突っ込んでみるか？

まあそれは最終手段だな。

さらに調べる。

部屋の隅々まで不審なものがないか調べ、新たに隠し通路や部屋が増えていないか調べ、そして手がかりがあるかもしれない書籍を……。

なんだこれは！？

なんというか、普通の文字から記号、挿絵にいたるまで全部鏡文字、左右反対になっていた。

一つ見つければ出るわ出るわ不審な点。

良く調べれば本来の配置とは左右反対になった小物や部屋の間取りに家具の配置。

神殿が中央から左右対称になっていたので気づくのが遅れたがほぼすべてが左右反対になっていた。

本当にここは何処だ？

少なくとも俺の知っている神殿ではない事、それが確かな事だ。

まるで、自分の知っている神殿を鏡の世界に写し取ったような場所だ。

ただ怖い。

無音で怖い。

生命がなく怖い。

ここに居るのが怖い。

何よりも未知の恐怖が怖い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
ワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ。

外に出よう。

ここはヤバイ。

現実世界でありながら別世界だ。

このままここにいれば精神が壊れる。

危険、本能が恐怖という形で警告を送る。

ここはどこだ？ 知っているようで知らば居場所だ。

おれはだれだ？ おれはおれ、フィフィルである。
なぜここにいる？ わからない。
だれがつれてきた？ わからない。
なんのもくてきで？ わからない。
どうするつもりだ？ わからない。
わからないわからないわからない。
とにかく逃げ出そう、ここにいてはいけない。
とりあえず神殿の出口付近まで走る。
そこからはさっき拾った棒で外に地面がある事を確認し。

「セーのっ！」

目をつぶって飛び出した。

背後で、何かが割れて、崩れ落ちる音がした。

目を開ければいつもの宝箱の間だった。

そういえば気を失う前はボス部屋で室内にタダー一匹のモンスターを倒したんだからここに出るのが正常である。

帰ってきた。

安心して力が抜けて座り込んでしまっ。

とりあえず、もう安心だ。

地上に帰って美味しい物でも食べよう。

とりあえず宝箱をあける。

今回は言っていたのは前回と同じ一角獣の角だった。

外に転送されると町が騒がしい。

正確にはすぐ近くにある神殿が騒がしいのだろう。

教主が走り神官が走り巫女さんが走り……、巫女さん？

いや気のせいだったみたいだ。

冒険者が走りお祈りに来ていた町の住人が走りペットだろうか？
犬が走り虎が走りせわしく出入りしている。

……？ なんか違和感があったが問題ない、気にしたら負けだ。

まあ自分は自宅に——ガシッと音がするほどしつかりつかまれた。

「探していましたよフィー殿。少しお時間をいただきますね？」

それは最早お願いではなく通告だった。

「今度は一体何してくれやがったんでしょうか？ いい加減落ち着いて下さいませんか？」

大神官どころか周囲の神官たちの笑顔ですら怖い。

目が笑ってない、目が笑ってない！

女の笑顔が怖いなんて嫁の貰い手が——

「何か？」

「イイエナニモ」

なんで女性ってこんな時に限って鋭いんだろうね？

そしてドナドナのごとく引きずられていくのだった。

放り込まれた尋問室は真っ暗で光一つない。

覗き対策のために神官のみなさんが頑張った結果である。

しかしなぜランプを付けないのだろうか？

目の前に小さい赤い光が見える。

甘い匂いつて事は香でも焚かれているのか？

ドンと、机を叩く音がした。

「では、話してもらいましょう。今まであなたは何処で何をしていますか？」

「ダンジョンに潜ってましたですハイもう本当に！」

「何か、変わった事はありませんでしたか？」

「固有モンスターのシャドーがボスだった事ぐらいで特には」

「倒したのですか？」

「核を一撃で破壊し倒しましたですハイ」

「それだけですか？」

「いやあの――」

そこからは記憶が曖昧だ。

色々な事を聞かれた気がするがほとんど覚えていない。

何か甘い香りを嗅いだような気がした。

確か判断力を低下させる自白剤系の薬の匂いだった気がするが良く覚えていないので判断のしようがない。

まあここらへんで作れる自白剤系っていったら一つしかないものであれで間違いないだろう。

あれには弱点があつて、絶対に話したくない事はどう頑張っても効きだせないのだ。

話したくない事があるかどうかは分かっても中身を聞き出せなければ自白剤として意味ないと思うのだが、そこらへんは質問する側の技量だろう。

まあ自分の場合話と命に係わる事が結構あるのでダメなものはダメと言っただろうと思う。

そもそも、そんなものまで使って何を聞き出そうというのだろうかと言うのが俺の感想である。

一体全体マジで本当に何があっただろう？

気がつけば自分の部屋で寝ていてドロップ品の仕分けも終わっていた。

結論から言えば、いつもの如くオババサマもとい大神官は怖い、という事だろう。

二三日部屋を出ずにひきこもろう、そうしようそうしよう。

食料も水も十分あるので問題ない。

ちよっと人間不信になりつつあるしちょうどいいガス抜きになるだろう。

とりあえず窓をふさいで換気口をあけてランプをつける。
無論扉もあかないようにしておく。
ちようと作りたいものもあつたので問題ない。

一日目前半は腐るほどあつた角兎の角を削つてお箸を三つ作る。
一日目後半は同じ材料で箸置きを三つ作る。

二日目前半は同じ材料でスプーンを三つ作る。
二日目後半は同じ材料でフォークを三つ作る。

三日目前半は同じ材料でナイフを三つ作る。
三日目後半は同じ材料で必死こいて一本ストローを作つてみた。
ちなみに三つ作つたものうち一つはミノさんようにデカく作つてある。

四日目に入つて寝た。
もう二十四時間ほど。

五日目に入つてそういえば熟成がそろそろ終わるなと確認と調合を行う。

正直麻酔薬系は調合に神経を使うので丸々一日かかった。

六日目に入つてほとんど食事をとっていない事に気づいた。
とりあえず干し肉と果実水（ただし冷凍済み）でお腹を満たした。
確か魔法薬系も出来上がったはずなので濃度別に刻印を掘る作業を行った。

七日目、一日怠けていた。
八日目、一日怠けていた。
九日目、一日怠けていた。

十日目になって充電が終わった、さあ掃除でもしようかと思っただけで水道が出なかった。

メンテナンスしてなかったからポンプが凍りついたんだろうな。まあ貯め水があるので何の問題もない。

実はこの部屋だけ秘密の地下倉庫があり実は籠城戦の備えが終わっていたりする。

この部屋そこかしこに触った痕跡が残っていたが地下倉庫はばれなかったようだ。

まあわざわざ床板剥がすような馬鹿がいなかったただけだろう。

ついでだから地下倉庫も整理してしまおう。

まあほとんど保存食と魔法で凍らせた果実水とか水とかなんだけどね。

大きい物が入らないから困る。

十一日目、誰かが物凄い勢いでノックしていたようだが無視した。籠城戦の備えは伊達ではない。

実はこの自室だけ壁やら柱やら枠やらに金属がこっさり使われており破壊するのはちよつとやさつとじゃ難しいのだ。

疑似鉄筋コンクリートと言っても過言ではない。

さらに防音も行っている。

時々薬の調合で魔法薬系は爆発したりするし。

まあいいや。

そういえば地下倉庫も狭くなってきたし地下二階の倉庫を作るか。ああ、ちなみに壁は魔法薬で固めてあるのでちよつとやさつとじゃ崩れないのだ。

それこそ百人乗ってもうんたらという話である。

二十日目にして地下倉庫第二室ができあがった。

さすがに梯子は用意してなかったのでヒモで上り下りしなければ

ならないが。

地下二層は水分系を補完する事にしよう。

んー、むしろこのまま井戸を掘るべきか？

よし掘ろうそうしよう。

ちなみに掘った土は魔法薬モドキで溶かして壁の補強材になっている。

なお、この素材は本当に危険なので公開していない。

元はセメントを作ろうと思って頑張っていたのだが、某アニメの硬化なんちゃらかいいうのに似たものができた。

地下倉庫行きの見せてはいけない謎技術作品第一号がこれである。これを硬化剤と名付けたが、これって正直瞬間接着剤の速乾性とセメント並みの汎用性があるチートアイテムな気がするんだ。

保存用のしつかり蓋をした瓶に入れている間は液体なのだが、三分ほど空気に触れるとその部分から徐々に固まり鋼鉄並みの強度になるのだ。

正直割れやすい瓶に入れ投げつければ場合によっては相手を殺せるし油みたいに水の上を広がるので水源をふさいでしまう事すらできるのだ。

量さえ揃えればあまりに危険な戦略兵器である。

まあ一応溶解剤はあるのだが、専用の溶解剤でもない限りなぜか溶けないし失敗した時が一番困る。

まあ食べても体に害がない事がせめてもの救いだろう。

便秘になるだろうが。

原液がぶ飲みなんて馬鹿な真似をした場合は保証できないがそんな馬鹿はまずいないだろうし。

そういえば控えめのノックが何回かあったが忙しかったせいで無視しちゃったな、まあいいか。

ふとステータスを見たらレベルが上がっていた。

そういえば職業訓練生は何か仕事をしていると経験値が入るんだっけか、スズメの涙ほだけ。

それでレベルが十上がるとか馬鹿じゃないのと言われるかもしれないが、初期レベルなんてそんなもんである。

井戸が完成してからは三日ほどダレていた。

そついや三日のつもりで一ヶ月ほど引きこもってるな。

まあどうでもいいか、引きこもりマンセー。

いつそ地下帝国でも作るか？　どこかの髭親父的土管帝国な感じで。

いやどこの忍者屋敷だよそれ。

……忍者屋敷？　それいいな！

よし隠し通路と隠し扉作ろう！

確か家の裏手は三十センチほど間をあけてあるから出られるようにできるはずだ。

隠し通路はどうしようかな？　地下通路なのは決定としてどこまで伸ばすべきか。

まあとりあえず隠し扉の方である。

とりあえず地上に戻って疑似ウォーターベッドを立ててどかし壁にこつそり静かに穴をあけ一番外層の木の壁を隠し扉に改造し普段は見つからないように硬化剤で石のふたを作った。

外から見てもばれないだろうしわざわざこんな場所を見に来るやつもないだろう、隠し扉としては合格の域なんじゃないだろうか？

まあ次は隠し通路だがさすがにお腹減ったなあ。

まあまた干し肉でいいか。

ゆでて冷凍していた野菜に凍らせておいたドレッシングかけて食べたが、結構時間がたってもいけるな。

ちなみに冷蔵庫は存在しない。

存在しないが似たような魔法で室内を疑似冷凍庫にできるので問題ない。

まあ結構小さな範囲だけなのだが、まあこんな事はどうでもいい

だろう。

地下二階の壁を掘り進めながら硬化剤にしていく。

そろそろため込んだ液体魔力が半分を切るのだから大丈夫だろうか？

まあ硬化剤を作るのに液体魔力ーに対し必要な土が千ぐらい必要だから問題ないのだが。

というか質量保存の法則どこ行つた？ ファンタジーすぎるよさすがに。

そんなこんなで掘る事自体が楽しくなってきた頃ふと思い出した。何処につなげるんだっけか？

そろそろ地上へ向けて斜めに掘ろう。

そういえば何気なく干し肉食いまくってたけどそろそ備蓄がヤバいな、地上に出たら買い出しに出るか。

そんなこんなで掘つては掘って掘りまくるゝ

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘つては掘って掘りまくるゝ

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘つては掘って掘りまくるゝ

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。

掘つては掘って掘りまく……、おや外だ。

うぬ？ 森の中？

なんか見た覚えが……、ってここは元々小屋を建てる予定だった建設予定地じゃん。

という事は町の外なのかこつて、無駄に掘つたなあ。

まあいいや、水が降り込んでも困るから小さな小屋作っておこう。

なんかちよつと臭ったので久しぶりに川へ体を洗いに行った。

とりあえず買い出しだ。

そのまえにちよつと神殿を覗いてくるか。

どうせだからこつそり町の中に戻りこつそり移動する。

さて、よくわかんないけどどうなってるか……。

——何これ？

なんで仮眠室がデカくなって二階建てになってるのさ。
しかもなんか俺の部屋の前に見張りが立ってるんですが。
俺って何かしたっけ？

引きこもってただけだよな？

なぜか見つかったらヤバい気がする。

とりあえず逃げよう。

もう少し籠城戦を続けよう、よろしいならば食料だ！

商店まで移動した。

たぶん見つかってないと思う。

だから、こっそり背後に近づいて元気に声をかけるだ。

「おっちゃん肉くれー！」

「うお！？ なんだお前さんか。一ヶ月音沙汰がないから心配したぞ」

「いやあ小屋の改造に夢中になって気がついたら一ヶ月たってたんだよね。時計がなかったら時間にも気づかなかったぐらいだよ」

「なんつつか、いつもの通りぶつとんでやがんなあ。ああそうだった最近こっちでも湯船つつたか？ 出来上がったんで見てくれよ」

「ほほう、俺の裁定は厳しいですぞ？」

「いやそれ誰キャラだよお前さん、まあこっちだ」

「ういいういよー」

結論から言おう。

湯船が無駄にデカかった。

まあミノなのでスケールがデカいのはしょうがない。

なんと更衣室完備であった。

まあ俺が愚痴漏らしてたから必要なものなんだと認識したんだろ。
氷で冷やした湯上りのコーヒー牛乳も完備であった。

正直言おう、負けた。

「き、貴様あああああ！ わかってんじゃねえか。さすがだぜ百点満点だよっさん」

「おうよ、食品系ならお前さんにも負けないぜ！ もうこれが出来上がってからエミイのサービスが過激になっただけ」

判明する嫁さんの名前。

これまでは「うちの嫁がな」って言うから名前知らなかったんだよな、そういえば。

「はいはい惚気惚気」

「まあ凄く感謝してたよ。ミノタウロスの女なら誰でも悩む慢性的な肩こりがかなり楽になったらしいんだよ」

それはチチが無駄にでかいからです、重いから仕方ないです。

「ああそういえばお風呂の効果って言ってなかったつけ。他にも疲れが取れたり毛穴の老廃物が取れたり色々健康にいいんだよ？」

「おう、ますます綺麗になっちまって仲間内で呪い殺されるかと思っただよ」

「リア充のおっちゃんも苦労してるなあ」

「そのりあじゅうつてのが良くわからんが、良いのは良いなりの悪いのは悪いなりの苦労があるからな」

まあ世の中そんなもんである。

「そこまでわかってて人とミノのハーフがあんなモテモテな理由も理解できないのか」

「そこらへんはさっぱりだ。俺らミノタウロスは外見じゃなくて中

身で相手を選ぶからな、人間とは判断基準が違っただろうよ。まあ男にその権利がないのは少しさみしいが」

つまり彼、ミノのおやつさんは勝ち組である。

綺麗な嫁さんを惚れさせた勝ち組である。

惚れたが負け、惚れた側は一方的に譲歩するしかないのである。

なんで趣味人のおっちゃんが村一番綺麗と言われている人を嫁さんにできたかね？

本当に不思議だ。

まあいいや。

「それで肉はどれくらい入荷したのさ？」

「いきなり話題変えたな。まあ七十ぐらいか？ 干し肉は日持ちするし冷蔵すればさらに持つしな」

「そりゃあね。じゃあ五十ほどもらうよ。こもってるうちにかなり食べちゃってさ」

「なら冷凍野菜ももってくか？ あれはあんまり人気ないんだが冬でも夏の野菜が食べられるところがいいな」

「じゃあそれも頼むー。全部でいくら？」

「大体七百八十四エクってところか？ 八百エクでいいですぜゲヘ」

「いや誰だよしかも増えてんじゃん。どうせ九百前後っしょ？ はい八百エク」

「お前さんもだいたい商品の値段覚えてきたな」

「知らん奴に詐欺られたくないからね。ああさすがに量が量だから台車借りてくね」

「おうよ、明日の朝には返しに来いよ？」

「わかってるって」

かなりの量の荷物が台車に積まれ町の外に運び出された。

きつと噂になつてゐるに違いない。

認識障害もとい白霧のヴェールという魔法（ただしその魔法を使えるアイテム）を使ったので誰かまではばれてないだろう。

まあ必死に運び込んでたら夜になってました。

まあ特に予定もないし問題ないだろうな。

なんか監視されてるし出にくくなっちゃったなあ、どうしようか？
いつそ森の方に別宅ならぬ本宅作ってそっちに移住するか？

なんか裏切ったから裏切ったんだ臭くするために色を反転させた
ような神官服作るか？

俺が怒られてばっかだけどたまにはあっちにも反省してもらおう。
何せ今まで何か作ってる最中怒られることはあつても褒められる
ことはなかったし、完成してから感謝されても褒められた覚えな
い。

いくら子供っぽくないとはいえ一応子供なのになあ、子育ての方
法間違つてる臭いよ！

よしそうしようそうしよう。

くそんなわけで移住中の日々く

一日目、まず地下への穴を広げて必死こいて部屋の中の道具やら
アイテムを退避する。

二日目、穴を硬化剤で念入りに塞いで地下への通路を閉じる。

三日目、森の方にまともな小屋を建てよう。

嗚呼いつそ鉄筋コンクリートにするか！　まあ実質鉄筋硬化剤な
んだが、ってことは材料が足りないなあ。

四日目、こつそりダンジョンに侵入し材料を必死こいて集める。

最早時間との闘いである。

五日目、こつそりお爺ちゃんところに鉄筋の作成を依頼する。

六日目、建設用に板材を用意し家の骨組み部分を作る。

ミノさんたちが遊びに来るかもしれないので大きめに。

七日目、鉄筋が届いたがまだ足りない、とりあえず硬化剤を量産するがどこから土をとるか。

まあばれないように地下から取るしかなく、崩落しないように硬化剤を使わなければいけない悪循環。

しかし少しずつ溜まってきた。

八日目、一日硬化剤を作っていた。

九日目、一日硬化剤を作っていた。

十日目、気づくと地下に巨大な倉庫が出来ていた。

硬化剤はこれぐらいで十分だろう。

十一日目、鉄筋が必要量届いた、必死こいて網目状にして壁になる部分に設置していく。

十二日目、よく考えたら天井の敷板を支える棒を用意していなかった。森の奥へ必死に切り出しに行く。

十三日目、ようやく建物の形になってきた。

ふと思ったが強度十分だから二階建てでもよくねえ？

十四日目、天井まで完成して硬化剤を流し込む。

さすがに一気には固まらないだろうから一階部分の完成には一ヶ

月ほどかかるとみている。

十五日目、さらに鉄筋を注文する。
食料を買い足したがそろそろ白霧が足りなくなってきた。
後町にお化けのうわさが立ち始めたが気にしない気にしない。

十六日目、一応家具を作り始めた。
ベッドは組み立てるだけだったが結構かかるんだねえ。

十七日目、浴槽も硬化剤で作ったが想像以上に保温効果があるので一人用ならこれで十分だろう。
とりあえず硬化剤で全部作る事にした。
問題は今まで使っていた洗面器やらが全部むこうにあるので回収が不可能という事だろう。

十八日目、硬化剤がさすがに足りなくなった、しかしこれ以上の地下からは取りたくない……。

そうだ地下道を掘ろう！
確かおやつさんが倉庫欲しい倉庫欲しいってばやいてたな。
掘って掘りまくる♪

えいさ、ほいさ、どっこいしょ。
掘っては掘って掘りまくる♪
えいさ、ほいさ、どっこいしょ。
掘っては掘って掘りまくる♪
えいさ、ほいさ、どっこいしょ。
掘って……、そろそろ目的地か？

「コールヴィジョン」

——「成功」——

使ったのは透視魔法。

まあこんな地下からじゃうつすらとしか見えないが位置を確認する分にはこれで十分だ。

よし、ちょうど商店の隣の空き地まで掘れた。

ここなら崩落しても商店に被害は出ない。

まあ崩落させる気なんてないが。

十九日目、一日中硬化剤を作る。

二十日目、さすがに硬化剤の材料が切れた。

こつそりダンジョンに潜ったが危うく見つかるところだった。材料の確保成功、でもってやはり残りの時間硬化剤を作る。

二十一日目、硬化剤を作る。

二十二日目、硬化剤を作る。

二十三日目、地下倉庫が完成したので硬化剤を作りつつ商店側へ階段を掘る。

二十四日目、階段を掘る。

二十五日目、階段を抜けて床板が見えた。

後はミノさんたちの大きさに合わせて穴を大きくし固めるだけである。

なお天井はすでに固めてあるので横長の穴になってしまっているが、まあ後は背の高さまで掘って階段の形にするだけなので問題ない。

二十六日目、さすがに食料が尽きたので買い出しに。

床下から戻ってまた商店に行くってなんか間抜けだな。

二十七日目、階段が完成したのと同じくして硬化剤も必要量確保できた。

そういえばこの硬化剤、作った当時は片腕が固まって酷い目に合ったんだよな、溶解剤は溶かす時に熱を出すから大火傷したし本当にあの時は痛かった。

あれ、組み合わせたらホットカイロ作れるんじゃない？

まあ今度作ってみよう。

そして、夜中にこっそり分厚い床に穴をあける。

翌日起きたら床がなくなっただけ謎の階段が！ その先には巨大な空間がアーラ不思議で一発で俺だつてばれますね。

まあ一月ぐらいいはしばっくれよう。

ここまで掘った地下道の入口をしっかりと塞ぐ。

二十八日目、食べ物を買に行きました。

え？ 資金は尽きないのだった？ 自分回収速度が半端ないので昔こそ貧乏だったけど結構な貯金があるのですよ。

そんなわけで商店です。

「お前さんだろ」

「……いや、何が？」

「絶対お前さんだろ」

「だから何がさ」

「お前さん以外にあんなことできる奴いねえから」

「だから本当に何がさ」

暫くエンドレスのためキャッキャウフフなベリーゼリーダンスをご想像下さい。

ループ中です。
ループ中です。

ループ中です。
ループが終わりました。

「とりあえずいつものお肉とお野菜で」
「十五エクでいい。やっぱお前さんだろ」
「だから何がだよ、いい加減怒るよ？」
「もういい、どうせお前さんだからな」

……バレバレですねわかります。
そんなこんなで食料を確保しました。
さあ改築だやれ改築だそれ改築だ二階建設セットアップ♪

二十八日目、うん、昨日は徹夜明けのハイテンションだったんだ。
決して普段の俺があんな壊れているわけじゃないんだ。
お願いだから信じてほしい。

まあとにかく二階の骨組みを作り届いた鉄筋の代金を払い硬化剤
を流し込む。

構造の関係上屋根は最後に作らなければならないのがメンドクサ
イ。

ちなみに今回はドアから門かんぬきにいたるまで全て鉄筋硬化剤製だ。
それこそ元の世界の対戦車ミサイルでも打ち込まれない限り壊れ
る事は無いだろう。

二十九日目、固まるのを待っている間ダンジョン攻略にいそしみ
ます。

足りなくなった材料を補充中。

三十日目、足りなくなった材料をダンジョンで補充中。

三十一日目、どうやら俺幽霊になっているらしい。

無論噂の上でだが。

そりゃあビビるよね、あまりに出てこないのて突入したら部屋の中に何も無いんだから。

ついには泣いちゃう人まで出たらしい。

そして、ふと思いついたんだ。

地底湖って浪漫があるよね♪

三十二日目、硬化剤で鍾乳石の作り方を研究中。

三十三日目、硬化剤で鍾乳洞の作り方を研究中。

三十四日目、硬化剤で地上へのルートを作成中です。

三十五日目、硬化剤で地上へのルートを作成完了。

荒野に地下への洞窟が出来上がりました。

三十六日目、馬鹿でかい空間を作るべく掘削中です。

三十七日目、馬鹿でかい空間を作るべく掘削中です。

三十八日目、馬鹿でかい空間を作るべく掘削中です。

三十九日目、馬鹿でかい空間を作るべく掘削中です。

四十日目、大失策です、天井から水がしみ出してきています。

どうやら鍾乳系の作り方は小さな隙間がいっぱいあくらしく雨が降ることに中でも雨が降るようになってしまった。

まあそんなの目じゃないくらい空間は広くなっただが……、なんで俺こんなことしてるんだろう？

四十一日目、大体東京ドーム？ とやらと比較できるぐらいの地底湖が完成した。

正直使い道がない。

第四話 逃亡潜伏独り立ち（後書き）

四話終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイイル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、
術式使い「99」

LV・45/99 EXP・22・01% NEXT：85367
称号一覧

「@*者」\$級#：システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破体现者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・LV・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・LV・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・LV・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42350

>魔法：生命力回復補助

・LV18 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・LV37 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

>魔法：終わりの裁き

・Lv1 Ⅱ身及び一手の罪・重+によってダメージが変わる対魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

>第一次限界突破者

>自分殺しの宿命

>呪い：シャドウハンド

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

・転職干涉「特殊職業解放」

・特殊干涉「レアドロップ率上昇」

・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」

・特殊干涉「固有スキル獲得」

・特殊干涉「肉体成長停止：十年」

・特殊干涉「再度ドッペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」

・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

第五話 別れは静かに（前書き）

なんか予測していた方向と百八十度ほどずれてしまった感じである。まあ一人で生活していれば好き勝手出来るから書きやすく……、なるといいなあ。

とりあえず旧ダンジョン物でいう強制転職の乱はこれにて終了。次回からは……、どうしようかな？

第五話 別れは静かに

裏切ったな僕の気持ちを裏切ったんだ皆皆裏切ったんだ！

はい、絶賛防衛中のフイーでございます。

現在情報戦を行っています。

変装中です。

見た目女の子になっています。

どこどこで自分を見たという情報をちらつと流してちょっと離れたところのを流してあのお兄ちゃん見つかったの？ って無垢な笑顔で聞いたりして疑われる要素をまず潰しました。

髪の毛を黒く染め同じ色の付け耳で半獣ワイルドハーフに化けております。

いやあ、自分結構雑貨とか材料とかの供給元として活動してたもんだから二月も引き籠ってると怖いお姉さんもと各店舗の仕入れ担当さんが血眼になって探しているわけで、いつの間にか自分が逃げ出した原因にされていた神殿の関係者も草の根わかるように探し回っているわけで。

いやね、出てきている事はどうやらおっちゃんが教えてしまったようなのですよ。

しかも地下倉庫公開付きで。

隣の空き地を買わされたとボヤいているのを変装した姿でこっそり聞いていたから間違いない。

今はカツラも用意したし魔法で動く付け耳と尻尾を装備して女の子の服を着て軽く化粧をし裏声で女の子として振る舞っているのでおやつさんすら気づきませんとも。

正直困ったなあ。

見つかったら確実に大目玉食らうよね、俺が悪いわけじゃないのに。

なぜこうなった？

どうしてこうなった？

そもそもなんで指名手配されてるの？

意味が分からん。

しかもこの金額何さ、十万エクだと？ 日本円換算で一千万だぞ
おい！？

この世界の物価って安いんだぞ！ 馬鹿にするなよ一千万を！
何さ何さ、俺が一体何をしたって言うのさ！

いきなり自白剤嗅がせといて、しまいにはこれが。

もうなんかね、さすがに裏切られた気持ちでいっぱいですよ。

俺が悪いのか？

俺が悪かったんだろうか？

そんな事は無いはずだ、ノック無視したけど。

傷心の自分は引きこもっても問題ないはずだ、突入されたい
けど。

もう誰も信用できないかもしれない。

悪意は無くても情報は漏れるのだ、現代社会での生活経験のある
俺が言うのだから間違いない。

情報化社会なめるなよ！

顔と住所がネットにバレルだけである種の祭りが起きるほど祭り
好きなんだぞ！

なんか違うとはこの際言わせない。

それだけ情報は怖いのだ。

何処に隠れるべきか？ どう逃げ出すべきか？ どこに逃げるべ
きか？

簡単である。

何のためにあんなに苦勞して要塞を建設したと思ってるのさ。

極小さな要塞、極大きな防御力、補給は地下道からこっそりダン

ジョンへ。

なんだ、無敵じゃないか。

ファイフィルの技術はせかいちいいいいいい！

まあ異世界の職人様方が開発した技術なんだけどね。

森のもつと奥に日本家屋でも作ってまったり暮らそうかな？
で
きそうもないけど。

とりあえず偵察偵察つと。

なぬ。

どうした事だ。

神殿に、子供が、増えている、だと！？

俺用済み！？

いやいや、元々神殿は税金払ってないし特定個人が住んでいるわけじゃないからその考え方は間違いか。

そんな理由で今まで一度も使った事のない望遠鏡を引っ張り出して町の外壁の上から孤児院を観察していたら吹いてしまった。

無論壁と同じ汚れた白い色の布をかぶりカモフラージュしております。

さて、もつと良く調べよう。

…… おや、なんかけが人が多いし見た事もない顔がいっぱいいるじゃないか。

外から傭兵でも呼び寄せたのか？

それにしても特に何も無いはずなのに怪我人が多いな。

何かあったんだろうか？

…… ん？ 今子供が長屋に入らなかったか？

あそこって仮眠室って言っても対外的には孤児院だよな、そもそもなんで改築と増設がされたのか推測するべきか。

まあ考えるまでもないか。

あそこは孤児院で、子供が入って行って、かつ怪我人が多い。

どこかの村が山賊にでも潰されたか？

どちらかと言えばモンスターの襲撃の方を考えるべきか。

とにかくあいつらは孤児で怪我人はよそ者と考えた方がよさそう
だ。

確か薬はおやつさんに結構分けたのがあるはずだから足りてるは
ず。

なら単純に在庫が不足してきているから生産者^{おれ}を呼び戻したいの
か？

いやそれだけなら人伝に伝えればいいだけだ、生産なら関わらな
くてもできるからな。

推測だけじゃ現状がつかめない。

現状がわからないまま手遅れになったら目も当てられない。

しかたない、話を聞きに行くか。

とりあえず自宅だな。

撤収！

く世界が激震し始めてからの巻く

目指すのは商店の地下倉庫。

実は塞ぐときに、内側からなら門を外せば簡単に開けられるよう
にしておいたのさ！

何やらいろいろ商品が置いてあるところ見るとちゃんと倉庫とし
て使ってるみたいだな、関心関心。

これなら待つてれば降りてくるか。

さて、おっちゃんが降りてくるのを……、って奥さんが降りてき
た。

まあ奥さんでもいいか。

「ちよつとすみ」

「キヤア!？」

「すみませんよ。逸れ二ートのフィーでございます」

「あ、うん。こんなところでどうしたのかしら？ みんな探しているわよ？」

彼の奥さん、すごくかわいい声でした。

あのリア充め。

「なぜ自分が探されているのかと、今町で起こっている事をお聞きしたいのですがよろしいでしょうか？」

「そんなにかしこまらなくてもいいのに。えっとね、貴方を探しているのは薬が足りないからで」

やはりか。

「町は今大変な事になっているの。ダンジョンに成長の兆しが見られるみたいで地上のモンスターが凶暴化してて」

「村が一つ襲われ壊滅したと。ついでに村人は戦うより逃げる事を優先したから全員無事だと」

「え？ その通りなんだけど良く知ってるわね」

そりやなんとなく予測付けてましたから。

見た感じ重傷者はいなかったし、疲れている人はいても誰か死んだような感じはなかったからそうじゃないかと思ったんだ。

孤児もあんまり寂しがってないところを見るに孤児院は臨時の避難所になっているんだろう。

地下にいたから改築しているのに全然気づかなかったんだぜ！

まあすみません嘘です予想の斜め上でした。

「それで貴方に村を取り戻す事を依頼したかったみたいだけど貴方

「がちょうど雲隠れしちゃって皆困ってたの」

「そーなんですかー。俺が困ってる時にいきなり自白剤食らわせてくれる人たちが困ってるんですかー」

きつと今自分の笑顔は黒い笑顔に違いない。

「そうなのよー。もう町の住人からも秘蔵っ子を出せってせつつかれてるみたいで皆疲れ切ってるわ」

おっちゃんの奥さん、肝っ玉が太いというよりは天然だ。

ド天然だ、たぶん神殿への嫌味なの気づいてないだろうねこれは。そういう意味ではどこかすつとぼけたおっちゃんに似た者夫婦でお似合いなのだろう。

「ああ、じゃあこの滋養強壮薬わたしで馬車馬の如くはたらくがいよって伝言してもらえますかね。ああこっちは旦那さんと使って下さい」

「ありがと。皆もそろそろしつかり反省したころだから頃合いを見て許してあげてね」

「!？」

なん、だと？

まさか気づかないふりは演技だったというのか！

この奥さん、できる!!

「まあ気が向いたら。薬は今日中にここに持ってきますけど、告げ口は禁止だよ？」

「夫の恩人だもの、告げ口なんてしないわ。これからも仲良くしてあげてね」

できた奥さんだ。

なんてできた奥さんだ。

おやつさんにはもつたいない、本当にもつたいない！

俺も奥さん貰うならこんな夫を立てるしっかりした人がいいなあ。

「ではまた後で薬を持ってきますね。ここに置いておけばいいですかね？」

「そうしてくれると助かるわ、わざわざ女の子の恰好するぐらいなもの、まだ人前に出たくないんでしょ？」

「……あ」

忘れてました。

まあ体がまだ子供なんで女装してもほほえましいしカツラかぶれば完全に女の子に見えるから問題ないんだけどね。

「で、ではさようならー！」

ピューっと思が鳴るほどの速度で逃げ出した。

まあ、流石に恥ずかしいわけで、問題なくても恥ずかしい物は恥ずかしいのだ。

まあとりあえず現状はわかった。

薬はすぐにもっていったがやはり奥さんもおやつさんもいなかったところを見ると気を使ってもらったんだろ。

隠し通路を元に戻しつつ考える。

俺はどうしたらいいだろうか？

よくわからない。

それにさ、ぶつちやけみんなが思っているほど俺は強くない。

ゲームで言うAGI^{ひやほう}特化型なので魔物をバンバンぶっ殺してるように見えるだろうが、核を外れれば手数は普通の冒険者よりもはるかに多くならざるをえないのだ。

つまり、攻撃力が弱い。
持っている武器も見ればわかると思う。

- ・精霊獣の角剣 丈夫さが取り柄で最上級初心者装備。
- ・十五代目スライム殺しの小槍 アイスピックの流用品です本当にありがたいございました。

- ・投擲用毒短剣 毎回回収する採算度外視装備で毒の追加効果付き。

- ・自宅用ブラッティシザーズ 草刈り用の大鎌です、本当にありがとうございます。

全部初心者武器もとい低レベル武装です本当にありがとうございました。

ちなみに最後のやつはもともと武器を草刈り鎌に改造したもので名前が痛いのだ。

文句は無駄に大きな刀をつけた武器の作成者に言ってくれ。

そもそも最後のは武器ですらねえよ！

まあ防具は死にたくないので魔具がずらりずらりだけだね。

- ・幸運兔の耳（兜モドキ、ウサ耳ヘアバンドともいう・幸運効果）
ヴァルドラ はちがね
- ・抗魔銀の鉢金（鉢巻で額に当てる金属の防具・魔法ダメージ軽減効果）

- ・幸運兎の尻尾（首飾り・幸運効果）

- ・祝福の法衣・改（防御魔法式を織り込み済み・致命的攻撃に対し一度のみ発動）

- ・魔法銀の鎖帷子（物理干涉型衝撃軽減効果）
ミスリル くさりかたびら

- ・守護の手袋×2 両手のため二つ（上記と同様）
- ・守りの籠手×2 両手のため二つ（上記と同様）
- ・守護の腕輪×2 両手のため二つ（上記と同様）
- ・守護の足輪×2 両足のため二つ（上記と同様）

- ・風の草足袋靴くさたび下と同じ一セット（靴下モドキ・速度強化効果）
- ・瞬足の草踏靴くさふみと同じ一セット（この世界特有の草履モドキ・速度強化効果）

正直ここまで装備してたら相手がとんでもない人外でもない限り殺されないと思うんだ。

ちなみに兎シリーズは効果が高い順に尻尾、耳、前足、後足だと言われている。

ただし、幸運値とも言えるものに対し最も効果が高い物が適応されるのがこの世界のシステムである。

まあ統計取って調べてみました、まあ二つだけだったので確実にやないが七割がたそうだろうと思っている。

なお、鉢金は作成者にあやかって三尾の狐を彫り込んでいる。

鎖帷子は見えないし法衣も見えな目にそれほどの違いは無い。

腕輪と足環は透明だし普段は鉢金を外しているのでそれほどおかしな姿には見えない、はず。

手袋も指が出るようになってるし籠手だって謎の肌色の金属なので目立たないはずである。

指輪系の魔具がごてごてしいから一切付けてないし、まだファッションの域だと思うんだけどやっぱり変かなあ？

草足袋と草踏は結構誰でも使ってるし、こつちの世界だと靴の方が少なかつたりするよななぜか。

まあ全部歩きな関係上修繕しやすい物が流行った結果だろう。

まあこんな装備なのでやたらめったら物理攻撃に強く俺の種族特性から魔法もあんまり効かないというチート装備である。

結果、超機動要塞ファイイルが完成しているわけだ。

まあ、さすがにお風呂とかでは脱ぐがお風呂に持って入って洗うぐらい念入りにそばから離さないようにしている。

その関係上ウサ耳と服は結構ダメになるのが早いのが悩みだが、耳は結構ドロップするし服は買えばいいので問題ない。

まあ買わずに修繕して使っているが。

草足袋と草踏は足が速くなる薬草を編んで作ったものを魔具化したら出来上がったものだ。

ただしこれが一番コストがかかっていて、足が速くなる薬草一つ一つが高いせいか片方を一回取り換えるのに一千エク（約十万円）近くかかるので普段は普通のやつを使っている。

まあ材料も自分で調達しているので何の問題もないがやはりもったいない物はもったいない。

さて、気づいただろうか。

装備の効果の中に回復力増強は存在しないのだ。

つまりは元々瞬殺用の短期戦用装備なのである。

やはり攻撃力増強は急務である。

刀が欲しいなあ。

ちょっと無駄な話をしよう。

ダマスカスカスプリング刀のどちらにするか悩むが、どちらも特性があるからな。

ちなみに説明するとスプリング刀とは自動車で使われるリーフスプリングという板バネを刀の形にでっち上げたものである。

元がバネなので剛性と切れ味を維持しながら折れず曲がらず柔軟な刀身を作る事が出来るのである。

ただし刀の美しさがそれなりに失われており美術品としての刀とは別物の実戦刀となっている。

また材料の入手性から言ってもコストが安いいため、それが一番の特徴とも言え使い捨てにできなくもないのが魅力と言えは魅力か。

西洋融合の鋼鉄木刀モドキとして作った場合凶悪な鈍器にもなるただけ言っておく。

スプリング刀の特徴として質が悪いと予想以上にしなる、かつその際刃を痛めるため防御にはあまり向いていない。

また雑に扱っても刃は欠けるが元がバネなので結構壊れないという素人向きの刀と言える。

まあ一度曲がると元が工業用のバネなため人力ではほぼ確実に戻せず戻せたとしてもその部分の強度が著しく低下するため廃棄するしかないという弱点を持つ。

まさに俺のような素人向け使い捨て刀なのである。

十本ぐらい作ったがならしで速駄目にしたのはいい思い出である。だがあえて言おう、瞬天殺は男のロマンである。

逆にダマスカス刀とはダマスカス鉋、別名ウーツ鉋と呼ばれる多重三次元層構造を持つ合金で作られた刀の事で、樹木のような波紋を持ち美術品としても価値の高い刀である。

そして美術性に比例するかのように製造コストが恐ろしく高く材料の入手難度も最高である。（俺が製造した場合の話である）

ただし現状の技術で製造できる刀としては最高のものがこれだ。

（現代技術がふんだんに使われているので俺が最先端である）

ダマスカス刀もスプリング刀と同じように剛性と柔軟性が同居した刀ではあるが一方からの圧力に対し弱いという特性がある。それはダマスカス特有の層構造を俺が作る際、材料の段階で技術力不足から二次元層構造で作るための技術上の問題で、層構造に対して平衡の圧力に弱い。

技術が拙いため金属同士の接着が甘く、酷い時は剥がれるのだ。

層構造を縦方向に向けて作り、縦方向から見た際の厚さで強度を補うため突きには向かなくなるのだ。

そのためダマスカス二次元構造刀は質が悪いと突きを行った時、剥がれるようなおかしいな割れ方をする。

技量も低いくせに核を一突きにして破壊する関係上自分に向いていないと言えるだろう。

かと言って本来の三次元層は必要な技術レベルが高すぎて自分では製造できないしできたとしても適切な加工が無理と言わざる負えない。

材料をぶち込んで自然生成するダマスカス鉋は品質が不安定すぎるため再調達時に同質の刀を用意できないため断念したので存在しない。

三次元構造刀の可能性としては、いきなり刀の形で構造と金属配分を意識して作り刃の部分を鍛え刃を付けるしかないわけで、もうその時点でムリゲーである。

たとえるなら有効射程三百メートルのマシンガンに残弾一発の状態で一キロ先のリングに刺さった縫い針の穴を正確にねえ、と言われているのと同義である。

そしてそもそもダマスカス刀自体が玄人向きの刀で、この世界では刀術が存在しない以上作っても宝の持ち腐れになる可能性が非常に高い。

更に言えばダマスカス鉋は二次元構造でも製造そのものが難しく、ダマスカス鉋自体も扱いが非常に難しい金属であり、使い方を間違えるとゴミに成り下がるのも特徴の一つである。

最後だが、さすがのダマスカス刀も漫画のようにグニャグニャ曲がるほどの柔軟性はもっていない。

仮にあつたとしてもそれは絶対魔法が何かファンタジーの力を借りているのである。

まあ両方共に生粋の平和ボケの国では触れる機会すらなかったのが実際にどうなのかまではわからないが、まあ知識の面から研究した結果だしほとんど間違っていないだろう。

ただし、ダマスカス刀はこちらで研究した結果が全てだ。

生前の世界ではそろそろ再現できたのかな？

まあ実戦刀として一番優秀なのはステンレス刀であるが……、あれは重さと切れ味がなあという話である。

ただしほぼ一切の手入れ不要というのはのどから手が出るほど欲しい効果ではあるが。

まあステンレス材質の板バネ材を用意すればいいのだが硬く脆くなるんだよなあ、まあそれで今度作ろう。

魔導鉱物はここいらのダンジョンじゃ生成されてないから刀一本分で国が買えるほどの値段になりそうだし無理だ。

まあ鋼材が一番奥深いがやはり元素の再配列加工で作る元素設計刀が最強だよなあ、材料の入手難度考えなければ。

材質の外から中央に向けて計画的変更と配置、それに加え原子配列そのものに干渉して原子配列レベルの三次元構造を持つ刀を作ればそれだけで斬鉄剣ができる。

まあ自力でその域に手をかけるのが神業を持つ職人なんだが俺の能力と技術では不可能である。

我が刀に切れぬものなし！ とか言ってみたい。

ちなみにだが、原子の再配列なんてできれば焼き入れや焼き戻しの状態すら再現できるのでそもそも鍛冶ではなく製造というなんとも味気ない物に成り下がる。

しかしそんな微細な配置換え技術なんて魔法でも見た事ねえよと言う話。

そういえば何の話だったか？

そうだ、今後の事だった。

まあ刀の材料はあるし後でって、また話がそれている。今問題なのはこれからどうするかである。

しかたない、俺自身混乱してるみたいだし一度家に帰って寝てから考えよう。

く呼びかけられてからの巻く

目が覚めるとそこは生前の世界だった。

誰もいません。

恐怖。

そしてぱつと目が覚める。

はい、夢落ちです、分かっててもああいうのは怖いですね。
ガクブルものです、誰か助けてー。

……しかし不思議だ。

あんな夢を見るほど心にダメージ受けてないはずだけだなあ。

何よりもこの世界でやってる物作りが楽しいし、別に提供する相手がいなくても一人で作ればいいんじゃないかなと思えるほどにはこの世界を気に入っている。

ホームシックではないから安心できる場所に帰りたかったのだらう。

まあ自宅は一人に馴れる場所だったからなあ。

今だから思うが、本とパソコン以外は何もない部屋だなあと。

エロ本の一冊でもあればまだ可愛げがあったのかもしれないが、あつたのは一昔前の小説やらレンタルしてきたDVDアニメぐらいである。

後は知識欲を満たすためにネットが繋がった旧式PCぐらいだ。さすがにDVDは借り物だったので愛着は無いが、他の物は本当に大切にしていた。

PCなんてわざわざ基盤のダメになった部品を交換して使ってたほどだ。

昔の基盤は集積率が低いので交換しやすかったつてのもあるが。もちろん買い替えるお金がなかったというのもあるが。

でも少ないから、長く使ったからこそどれにも不思議と愛着があったしとても大事にしていた。

だからだろうか。

遺志を残され年を経た器物には意思が宿ると言われている。

いわゆるつくもがみ
所謂付喪神である。

なんとなく近くを感じる。

決して届かない、薄皮一枚の向こう側に。

これが哀愁なのかオカルトなのかは判断できないが、意思のようなものを感じた。

お前らは今を思い返せって言うのか？

確かに生前に比べたら生活は充実しているし現代知識のおかげで優越感にも浸れる。

周りのみんなの役にも立てるし一人で生活できるほどにもなった。仲直りしろとも言うのか？

確かに、一方的に引き籠ったのは事実だけど仲たがいなんてした覚えはない。

むしろ向こうが犯罪者みたいに賞金かけるなんてことをしたのだ。

……生前合わせればすでに六十近く、大抵の相手に年上な自分が譲歩しろって事が。

まあこの変な感じだけど核心みたいのに従って仲直り……、仲直りなのか？

たとえ頼まれたつてもうあそこで生活はしないけどね。

とりあえず尋ねてみる事にしよう。

しかしどう会えばいいものか。

きつと今俺の歩く姿を見ればとぼとぼという擬音が恐ろしく似合う事だろう。

まあそんなこんなで神殿前まで来ました。

ああ、もちろん着替えてますよ？　ちゃんと男の子ですよ？

「おい大変だ！　問題児が帰ってきたぞ！」

「問題児？」

「大神官を呼び出せ！　神殿が崩壊する前に！！」

「崩壊？」

「嗚呼、今度は何が壊れるんだ。水の次は火か？　食べ物か！？」

「一体俺が何をした！」

切れてもいいよね、切れてもいいはず。

あれか、たぶんポンプが凍ってるのに無理して動かして壊したんだな。

もう帰ろう、きつと場違いだったんだ。

あれだね、オーバーテクノロジーを導入しすぎたんだね、便利だけど。

きつとあれに馴れてるくせに保全保守の概念が理解できなかったんだが、便利だけど。

管理できないやつは使う権利ないよな、便利だけど。

しかも壊したのが俺になってる件。

あれか、これがかの有名な「いじめカッコ悪い」ってやつか。

「帰ろう、帰って寝よう」

「ワーワーワー！ ちょっと待って、待って下さい！」

腰をがっしりつかまれた。

誰かと思えば猫神官さんではないか。

いや、子供で小っちゃい俺の腰に抱き着くとかほぼ寝そべらないといけないわけで飛び込んできたわけですか。

そして会話が途切れる。

正直気まずい。

「離してもらえませんか？」

「あ、ごめんなさい」

「じゃあさよなら」

「だから待って下さい！」

まだ何か用事があるのだろうか？

いや、引き止められてるから有るのはわかってるんだけどね、この状況っつかこんな状態で頼みごととか正気を疑うよ？

「何なのさ」

「……その、すみませんでした」

「何の事？」

「帰ってきて、もらえませんか？」

「嫌だよ、四六時中身の危険を感じるところで生活できるわけないだろ。しかもあの手配書は何さ？ 俺いつから犯罪者になったの？」

「申し訳ありません、連絡の過程で行き違いがありまして、いつの間にか搜索願が手配書に変わっていたのです」

間違いでしたすみませんでなんでも済ませられると思わないでほしい。

手配書って全世界の神殿で発行されるからもう自分どこ行っても犯罪者扱いですよ？

たとえそれが間違いだったとしても最早手遅れ、世間一般に「一千万円の元賞金首」として認識されるわけですよ。

一千万とかそれこそ邪神の復活とか世界の滅亡とか神殿への連続爆破テロ行為とかしないとかからないレベルの賞金ですよ？

可能な限り考えないようにしてたけどさ、いくら何でも酷いんじゃないだろうか。

「何を言われようと戻る気はないからね、もちろんわかってるよね？」

「本当に申し訳ありませんでした。どうすれば許していただけるでしょうか」

「状況はわからんけどそうせざるを得なかったんだろ？ 許す許さないで言えばすでに許してるよ。ただもう戻る気はないだけだよ」

「どうしても、だめですか」

あれだね、事ある事ことに自白剤モドキ嗅がせたり家に突入されちゃ

気の休まる時がないよ。

流石に怖くて住み続けるとか無理でしょ。

「もう一度言いますがもう戻る気は欠片もありません。怖くてもう街中じゃすめないですよ。取り下げたって元賞金首なのは変わりませんしね」

「……その、全ての神殿で間違いだったむねを掲示してもらったのですが、ダメですか」

「余計勘ぐる人が出るだろうね。もしかしたら神殿の弱みを握ったんじゃないかって。そう言いついわれなき理由で狙われるわけですよ」
「本当に申し訳ありません」

いや、土下座されても困るだけなんです、なんでわからないんだろうね。

そもそも技術力で言えばこの世界の誰よりも広い知識があるわけで、それが全国的にばれれば狙われるのはどうしようと必然なわけですよ。

今回の事でいろいろ調べられるだろうから勘のいい奴とかは察してしまっわけなのですよ？ わかれよ馬鹿共が。

なんかイライラしてきたな、本当に帰ってしまおうか。

あ、大神官が走ってきた。

相変わらず連絡が遅いなあ、連絡経路どうなってるんだらうか？

「戻ってきて、くれますね？」
「嫌です」

いきなりそれが。

「戻ってきて、くれますよね？」
「嫌です」

あれか、ループとかインフィニティなのか。

「住む所はどうするのですか？」

「すでに建てました」

トップだから軽々しく謝罪できないのはわかるけど、そんな泣きそうな顔されながら言われても困るんだけどな。

「生活は、どうするのですか？」

「ダンジョン潜ってればどうにでもなります」

「一人暮らしをすると税金も払わなければいけませんよ？」

「貯金があるので人頭税程度余裕です」

ちなみに税金はその人の職種によって変わる。

冒険者は人頭税、年齢に応じた税金を頭数に応じて払わなければならない。

これで大嫌いな中央政府にも顔を出さなければいけなくなったが、まあその程度は白霧使えば問題ない。

中央政府って処理がとにかく遅いんだよな。

もしかしたら連絡は行っても手配書の取り下げまだなんじゃないかな。

「どこに、住むのですか？」

「答えると思います？ 本気で？」

「病気なわけではなかったんですね」

「今までだって引き籠って研究した事の一度や二度あったでしょう」

「そうですね、出ていくんですね」

「ええ、出ていきます。今までお世話になりました」

「たまには、遊びに来て下さいね」

「転職時にはお世話になると思います、ではさようなら」

いや猫神官さん、口パクパクさせながら俺と大神官の顔を交互に見ても可愛くないですよ？

むしろ間抜けです。

もしかして大神官が引き止めるとでも思ってたんだろうか？
神殿の弱点になりえる自分を？

ありえないのをなぜ気づかないんでしょうか。

一度教育しなおすべきだと思います。

そうして俺は独り立ちしたのだった。

第五話 別れは静かに（後書き）

神殿の攻撃。

主人公は人付き合いに馴れていない、主人公の心に120のダメージ、効果は抜群だ。

主人公は勘違いをしている。

ミリイ夫人の攻撃。

主人公は優しさに馴れていない、主人公の心に80のダメージ、効果は抜群だ。

ミリイさんの高感度が20上がった。

主人公は刀好き（知識のみ）

刀は日本人の魂である。

今住んでいる地方は水脈が豊富で結構どこを掘っても水が出る。代わりに雨が降ると鉄砲水が多く川が簡単に氾濫する。

また地層に砂の層が多い事も特徴と言えば特徴。

五話終了時点での主人公ステータス。

スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。

なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、術式使い「99」

Lv. 45/99 EXP. 22.01% NEXT: 85367
称号一覧

「@*者」\$級# : システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破体现者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可
「先を歩む者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・Lv.1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・Lv.2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・Lv.3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42350

>魔法：生命力回復補助

・Lv20 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・Lv40 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

>魔法：終わりの裁き

・Lv1 〓身及び一手の罪・重+によってダメージが変わる対

魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを

与える。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

>第一次限界突破者

>自分殺しの宿命

>呪い：シャドウハンド

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

- ・ 転職干涉「特殊職業解放」
- ・ 特殊干涉「レアドロップ率上昇」
- ・ 特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」
- ・ 特殊干涉「固有スキル獲得」
- ・ 特殊干涉「肉体成長停止：十年」
- ・ 特殊干涉「再度ドッペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍までは二分の一」
- ・ 特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

閑話 大神官の憂鬱（前書き）

閑話を書こうと思ったのだが、書き終わって思った。

ちよつと失敗したかもしれん。

まあこの世界の、彼以外から見たい側面が見えるかもしれない。

ちなみに誤字脱字チェックをしていない手抜きを行っているが許してほしい、眠いのだ。

閑話 大神官の憂鬱

—The 大神官 side story—
ある日、ちよつとした噂を聞いた。

思えばこれが始まりだったのかもしれない。

なんとこの町に浮浪者がいるらしい。

しかもそれは年端もいかないうな子供で外壁による守りもない町の外で生活しているという眉唾物の話である。

正直そんな子供がいたら奇跡である。

それなりに体の出来た大人ならともかく年端もいかないうな子供なら角兎に殺されてしまうのが落ちである。

事実、毎年外へ遊びに行く子供から少なからず怪我人や死人が出るのだ。

とてつもない田舎でもない限りこの世界では子供は労働力として考えない。

そもそも子供を放り出す親がいるのだろうか？ 法律で罰せられるのに？

少し調べてみる事にしましょう。

本当に外で生活している子供がいるらしい。

しかもダンジョンに潜っているというのだ。

子供が？ 大人でも生死をかけなければ生きていけない世界に？

なんて笑えない冗談、そもそも十五歳になるまで上位職への転職は許可されない。

それは子供を労働力として使い潰さないための処置なのだがどうにかして上位職についた子供なのだろうか？

まさか未調査の神殿でも見つけたのだろうか？ しかし神官職の助

けがなければ本来転職はできないはずなのだ。

調査するべきか否か、無理に聞き出すのは不味い気がするが神殿の管理は神官の務めである。

仮に調査するとしても簡単に教えてくれるとは思えない。

何せ上位職は下級、中級、上級とあるのだ。

これ以上転職できなくなる愚を誰が侵すだろうか？

やはり要調査には変わらない。

実際に調査して分かった事だが、この子供の生活は本当にギリギリだ。

なぜ生きていられるのかわからない。

食べ物ほとんど買っている形跡がない。

収入のほとんどは町の中で借りた倉庫の維持となぜか大工道具を買っているらしい。

まさか町の外に家を建てる気なのか？ 木製の建物では間違いなく

モンスターに破壊されるだろう。

そうなると子供は巻き込まれて死んでしまうかもしれない。

それは不味い、神殿の威信にかかわる。

ここ百年近く使われていない孤児院制度を使う事にしよう。

審問官の彼女に言えば問題ない、彼女を呼んですべて任せた。

そういえば彼の親はいつたい誰なのだろう？

見た感じ純種の人類のように見えるのだが、それにしても大人びている。

長命種は里から出てくるわけがないし別の村がその子を残して壊滅でもしたのか？

いくら子供相手でも直接聞くのはマナー違反だ、どうしたものか。

それからしばらく経って報告が上がってきた。
どうやら彼女は手抜きを行っただけらしい。

神殿の予算で建物でも立てるかと思えばあの孤児自身が拙い手つきで小屋を建てていた。

呼び出して叱ったのだが改める気な無いように見えた。

他の神官の知らせを受けてあわてて外に出ればあの孤児が今度は小屋を解体しているではないか。

まさか審問官がへまをして怒らせてしまったのだろうか？

保護者を選ぶ権利は孤児にあるため仮に出ていくのなら私たちに口を出す権利は無い。

困ったものだ、一応監視を付けておいた方がいいだろう。

そのすぐ後監視から報告が来てさらに驚いたが、どうやら気に入らなかつたので立て直しているらしい。

それなりの小屋が出来ていたと思うのだが何が気に入らなかつたのだろうか？

あれからしばらく、あの孤児は小屋を建てたり解体したりを繰り返しているらしい。

また小屋もだんだんと大きくなり部屋が増えているとか。

そもそもあの孤児は一体いつ休んでいるのだろうか？

さらに言えばどうやればこの短期間に建築技術を上げる事が出来るのだろうか。

あの孤児に対する疑問は尽きない。

そして神殿外でも彼は有名になり始めたらしい。

引き取ったのは失敗だっただろうか？

いやしかし引き取らなければ神殿の調和という意義を乱してしまう。
問題も、神殿の書類仕事も尽きないのだから困ったものだ。

私も一体いつ休めるのやら。
とにかく書類と格闘する日々だ。

孤児がまたわけのわからない事を始めたようだ。
今度は穴を掘っているらしい、それも相当深く。

もしかして気狂いだから村から追い出された忌み子なのだろうか。
まあ引き取ってしまった以上今更追い出せないしまだ追い出す理由もないだろう。

周りに支障が出なければ好きにやらせておけばいい。
それからしばらくは報告もなく平和な日々だった。

どうやら井戸と言うものを作っていたらしい。

地面の下を流れる川を掘り当てたのが井戸だとか。

神官見習いの水汲み担当は相当感謝していたようだ。

そういえば彼は神殿側の建物に來ない、あの窓のないほったて小屋は暗いだろうに。

もしかして普段は別の場所にいるのだろうか？

念のために確認する必要があるだろう。

なぜこうも子供は問題ばかり起こすのか。

今でこそ成人したが息子が子供の頃も相当苦労したからわかるが、
子供の行動に予測を付けるのは難しい。

だが、それにもまして彼の行動に予測がつかない。
そしてふと気づく。

彼が来てから数年がたっているが、成長していない気がする。
少し聞いてみると彼は長命種なので成長が極端に遅いらしい。
確か長命種はその特性上精神の成長も遅いはずなのだが、

そんな簡単に情報を明かしてはいけないと注意するが何か不満なようだった。

確かに私から聞いたのだが、何故そんな事を聞くのか聞き返すぐらいするべきだ。

彼が頻繁に外出するようになった。

今までもそれなりに外出していたが、泊まり込みで外出する事は無かったのだが一体どうしたのだろうか？

少し調べさせるとどうやら鉾明種の鍛冶屋に弟子入りしているらしい。

最初は戸惑っていたらしく一度謝罪とあいさつに行こうかと思っていたが意外な報告が上がってきた。

彼もきつと孫ができたようで嬉しいのだろう、色々教え始めたらしい。

これならほつといても問題ないだろう。

しかし鍛冶屋に弟子入りなどして何を作るつもりなのだろうか？

もしかして釘を自分で作るつもりなのかもしれない。

彼は大工にでもなりたいのだろうか？

聞く所によると自分の部屋だけでなく、神殿関係者用に残りの部屋を仮眠室として開放するというのだ。

正直そこまでされる理由がわからないが、便利なので今度私も利用しようと思う。

しかし色々な事に手を出しすぎたと思う。

聞く所によると商人のまねごともしているらしい。

そのせいで前住んでいたところを追い出されたんじゃないだろうか？

しかし子供をとても大事にする長命種が村から追い出すはずがない。まさか逃げ出てきた？ でもそれだと何から？

やはり、彼の事はわからないことだらけだ。

また彼が騒ぎを起こしたらしい。

今度はガラスをどこからか持ってきたようだ。

自分で作ったという話らしいがガラスの製法は製造ギルドの秘伝である、子供が知っているわけがない。

呼び出して叱ったが逆にガラスの製法を説かれてしまった。

実際に作ったのだろう、王族が使うような鏡を作ったのだから。

なんでこうも問題になる事ばかりするのだろうか？

しかもそれが害だけでなく益ももたらしめているのだから頭が痛い、これでは頭ごなしにやめさせる事もできない。

そして、彼の家には窓ガラスがつく事になった。

各仮眠室にも窓ガラスがついた。

利用中かどうかこれで確かめやすくなったのだが、正直こんなほったて小屋にガラス窓とか場違いすぎて寒気がする。

見る人が見れば貧乏人の家に見えるだろうし、窓を見れば逆に貴族の道楽に見えるだろう。

この子供は本当に何がしたいのだろうか？

神殿だから放置されているが町で同じ事をしたら間違いなく貴族に睨まれるだろう。

もしかしたら彼個人は危険人物として注目されているかもしれない。一応忠告しておくべきだろうか？

また彼だ。

今度は自分で作った井戸を塞いでしまったんだとか。

凝り性なのだろうか？ 何もどこまでも完ぺきを求める事は無いだろうに。

またすぐ報告が上がってきた。

どうやら不思議な道具で水をくみ上げられるようにしたらしい。

しかも水道なる道具で、くみ上げた水を必要な分だけ使える装置を作っただけらしい。

なんでこう彼の話題が尽きないのだろうか。

まあ、いつも苦勞させられているんだ、便利だから神殿側にも作らせよう。

更に報告が上がってきた。

シャワーなる行水を行うための施設を作っただけらしい。

こんな街中で行水を行えば、男性はともかく女性は覗かれ放題だろうに、子供だからこそ分からなかったのだろうか？

詳しく読んでいくとそこいらの事は配慮されているようだ。

今までにない不透明のガラスを作り光を取り入れているのだとか。

屋根にも油を塗って登れないようにしたとの事だが、そこまでするという事はそれなりにわかっていいるのだろうか？

ませていると言わざる負えない。

また報告が上がってきた。

しかし今回は彼ではなく彼の担当にした尋問官からの報告書だった。

彼が作った小屋の用具室を尋問用に使用する旨が書かれていた。

彼の許可もとつたらしいがこの頃本当に好き勝手している。

まあそれぐらいでないと彼の監視なんてやってられないのだろう。

簡易倉庫の予定だと聞いたが問題ないのだろうか？

まあ私が気にする事ではないので放置する事にしよう。

なんとも手のかかる孫ができたような感覚が嫌すぎる。

主よ、これは何かの試練なのでしょうか？

可能なら平和な日々を返して下さい。

町の見回りをしている神官から報告が上がってきた。
どうやら彼がまた噂になっっているらしい。

聞く所によるとダンジョン内で特定の魔獣をとんでもない速度で狩
つて回っているとか。

まあ誰かの迷惑にはなっていないようなので問題ないといえば問題
ないだろう。

そういえばこの頃とても安くプニョ粉が出回るようになっていた。

誰かがため込んだものを放出でもしたのだろうか？

あれはお肌にいらいらいなので私も少し買ってこよう。

なんだかこの頃ダンジョンの出土品が安くなってきた気がする
が、この町の冒険者が増えた報告は無い。

冒険者が減っていくのはいつもの事だが、定住している冒険者が移
住を考えているのだろうか？

そうすると正直出土品が高くなるので困るのだが、神殿に呼びかけ
て冒険初心者を回してもらえばいいだろうか？

事件が起きた。

私自身も目撃している。

まるで誰かを祝福するように神殿のシンボルが光ったのだ。

調べて回るとこの町に駆け出し勇者が来ているらしい。

ダンジョンの出土品が安くなったのもそのせいだろう。

という事は安くなっているのは一時的なものなので今のうちに買い
込むのが賢いか。

しかし安物買いの銭失いという言葉もあるので安易な買いだめは失
敗の元だろう。

まあ、今回彼がかかわっていないか調べるよう尋問官には言ってお

こう。

そういえば彼が血だらけで戻ってきたらしい。

急いで医者を手配したが、どうやらダンジョンに潜ったらしい。危険なので一応注意しておくが、たぶんこれで懲りただろう。

彼が図書館に通っているらしい。

初心者指南書を読んでいるとか。

この前のあれで懲りなかったのだろうか？

まあ冒険者が増えるのは歓迎なので今のうちに予備知識を試させておくのもいいだろう。

それよりも問題は今の頃処理しなければいけない書類が増えた。

傾向を見る限りダンジョンの活性化が近いうち、ここ四五年中に始まりそうなのだ。

これは神殿ネットワークを通じて冒険者を回してもらうべきだろうか？

一つ聞き慣れない報告書が上がってきていた。

彼は薬を調合する知識があるらしい。

どうやらかなりの量の薬と材料をため込んでいるとの事。

どうやら自分の部屋の半分は倉庫として使っているようだ。

今更判明したのは近所の子供を使って薬の調合を手伝わせていたからだとか。

なぜ今まで気づかなかったのか問い詰めたが、どうやら彼のせいらしい。

彼は自分の部屋に他人が入る事に対してかなりの拒絶反応を起こすらしい。

なので外から除く程度しかできず、何か作っていても子供の事だからと気づかなかつたらしいのだ。

まあ私が監視していたとしても気づかなかつただろう。

何せ薬の調査は普通薬師と呼ばれる専門の集団が自らの秘伝を用いて調査を行い作り出すからだ。

どうやら図書館に恐ろしく難しい専門書を置いて適性のあるものを見極めているらしいが、どうやら彼はそれを丸々理解してしまったらしい。

正直本当に何をするかわからない子供だ。

もう勘弁してほしいと思う。

また彼が活発に動き出した。

今度は鍛冶屋と商店の主を巻き込んで何かを作っているらしい。出来上がったのは平たく大きな箱状のもので行水を行うための部屋に設置するらしい。

壁を壊して神官に白い目で見られていたが気にしていないようだ。確かにあそこが使えない間川に行水に行くか布で拭うしかないので面倒と言えば面倒だ。

そしてお風呂なるものを彼が設置し終わった。

どうやら王族や貴族が行う湯につかる行為をもっと小規模にして個々人で行えるようにする施設らしい。

後から後から上がってくる報告書によるとすごく気持ちよく健康にも配慮された施設で美容にもいいらしい。

神殿外から使用者も増えるほど盛況らしいのだが裸で長時間いるため覗こうとする馬鹿が増えたようだ。

やはり覗きはできないようになっていいるらしいが。

ただ燃料費がかなりかかるようで一人で払うには少々ためらう者らしく、数人でまとまって入るようになったようだ。

そして彼がダンジョンに潜ったという報告を最後に二三日彼に対する報告が途絶えた。
死んでしまったかと心配したがもつと大変な事が起こったのだ。

大変な事件が起こった。

神殿全体が活性化したのだ。

通常、誰かの転職時に勇者の祝福事件同様シンボルが活性化することがあるが神殿全体が活性化する事はまずない。

そもそも神殿の活性化具合は魔物の凶暴化を示す一つの目安なので非常に大きな混乱が起きた。

それこそ世界が終わると泣き叫ぶものが出たほどだ。

ダンジョンの活性化も近いのにこれではかなり面倒な事になると言わざる負えない。

困ったものだ。

とりあえず処理しなければいけない書類が五倍に増えた。

原因の調査を命令するが延々と調査は進まない。

まさに原因不明である。

神殿は活性化したままで夜でも明るく眠らない神殿と言われるほどに明るい。

仮眠室利用者が急激に増え原因究明に皆走り回っている。

幸いモンスター活性化現象は起こっておらず魔獣はいつものようにそれなりのおとなしさを見せている。

しかし、なぜ神殿が活性化しっぱなしなのかは気になるところだ。

正直夕方近くでも書類の処理ができるのが嬉しくもあるが、それ以上に書類が増えるのがいただけない。

ここ二日はある程度落ち着いてきて神の祝福として扱われているようだ。

しかしまだ油断はできない。

問題ばかり作る彼が帰還していない。

それは、今後大きな問題に発展する可能性が多大だと言えるだろう。

神殿が活性化してから一週間ほどが経った。

また問題が発生した。

急に神殿の活性化が終わったのだ。

なぜこの神殿ばかりと思わないでもない。

そして、それと時を同じくして彼が帰還した。

間違いない、彼が事の原因である。

尋問官に彼から事情を聞き出すべくかの尋問室に呼び出すよう命じた。

さらに誰が気を利かせたつもりかは知らないが、自白剤系の香が焚かれていた。

神官には基本的に精神干渉系の薬剤は効かないので問題ないが彼はそれをモロに吸ってしまったたらしくすぐに消したが無駄だったようだ。

まあこの件は後で謝罪すれば問題ないだろう。

そして聞き出した事柄で周囲が騒然とした。

何せ、彼はすでにダンジョン攻略を終わらせていたのだ。

そればかりではなく彼は一人でダンジョンを攻略していた。

大抵の冒険者は危険なのでそのような無謀を行わないのに彼はそれすら知らずに潜っていたのだ。

しかもそれも一回二回ではなく数えきれないほど潜っているらしい。しかも今回最大警戒対象であるシャドウに遭遇したばかりかそれを死亡せずに撃破し見た事もない神殿に転送されたらしい。

しかも驚くことに彼は初期転職すら行っていなかった。

そう、初期職業である初心者だったのだ。

その状態でダンジョンに潜るなど狂気の沙汰である。

なぜ誰も彼に忠告しなかったのだろうか？

そもそも職業訓練生にすらなっていない彼がなぜダンジョンに潜れたのかが不思議だ。

普通はその状態で潜れば浅い階層でならともかく深い階層ともなると確実に殺される。

現在ではなぜか職業訓練生に強制転職されたく、たぶんシャドウの呪いも解除されているのだろう。

聞くべきことはもう聞いたので、とりあえず今回の尋問はこのぐらいにしておこう。

報告が上がってきた。

彼が部屋から一切出てこなくなっただけらしい。

窓もふさがれて中の様子を見る事も出来ない。

なぜ、などとは考えるまでもなく昨日のあれだろう。

なにせ、ダンジョンから命からがら帰ってきたらいきなり真っ暗な部屋に放り込まれ自白剤を嗅がされたのだから。

私でも人間不信になる。

さて、どうしたものか。

教主や神官の中には彼を息子や弟として見ている者がかなりいる。

ここで放置しようものなら問題になるのは確実だろう。

とりあえずそれとなく気にするように通達を出す。

尋問官が乗り込もうとしたようだ。が門前払いを食らったらしい。

なぜか、ドアが開かない。

木でできているはずのそれは不思議なほどの強度をもって審問官を拒絶したらしい。

必死に開けようと頑張ったようだが、あの部屋は報告書によると内鍵である。

内側からしか開けられないし閉められない、そういうカギだ。

最早でてくるまで待つしかない。

本日の報告書が届く。

あれから一週間、一切出てきていないそうだ。

少々心配だが、水道の水も補給しているし食料もそれなりにため込んでいるようなので死んではないはずである。

町は平和なものである。

あれから事件と言う事件は起きていない。

ただ、経済が活性化しているようで商人の出入りが増えているようだ。

この町は元々目立つ生産物があまりないので田舎なのだがそれなりに人口が増え始めているようだ。

もつと発展してくれば補佐官が置けるようになるので仕事が楽になるのだが。

まあ今はそんな事を考えている暇はない。

あれからさらに一週間ほどたった。

審問官が突入しようとして失敗した旨の報告書があがっている。

彼の人間不信をこれ以上悪化させるつもりなのだろうか？

呼び出してしっかり叱っておいた。

ただ、彼女をもつてしても破れない木製の扉はいったいどんな木を使えばいいのか見当もつかない。

一体どんな仕掛けになっているのだろうか？

それからさらに一週間ほどがたった。

彼は小屋から出てこない。

そろそろ不味いかもしれない。

透視の魔法を使って確認したが、何か薬を作っているようだった。

まだ大丈夫なのだろう。

後々必要になると忠告があったので、彼の仮眠室を改装し大きなものに現在改築している。

彼に一切の確認を取っていないが、一切返事をしてくれないので仕方ない。

彼は一ヶ月もかけて何を調査しているのだろうか？

そして薬師ギルドが彼を出せとせつついてくる。

何をいまさらと言う話であるが神殿が隠していたことになっているらしい。

突っぱねているがそろそろうるさくなってきた。

さらに十日が立ち、それでも彼は出てこない。

これで一ヶ月出てきていない。

本当に心配だ。

それ以上に彼への問い合わせの多さに驚く。

商人から鍛冶屋、飯屋に服屋、ありとあらゆる商売人から彼に連絡を付けろとせつつかれている。

彼の人間関係は一体どれだけ広いのだろうか？

貴族からも問い合わせが入っている。

保護者なので連絡が取れませんとはいえず、とりあえず風邪で寝込んでいる事になっている。

まあそれもここ二三日の話でそろそろ別の理由を用意しなければならぬ。

そして貴族から風邪薬が届いたのにも驚いた。

基本的に高慢な貴族が一般市民であり孤児でもある彼に風邪薬を届けたのだ。

それこそ雇用主が使用人に頭を下げるぐらいありえない事である。

さらに十日がたった。

信じられない事だが彼はかなりの量の出土品を各店舗に卸していたらしい。

なんでも自分は仕入れ業者であると言って注文を取り必要なアイテムをダンジョンから必要なだけ引き上げてくるんだとか。

後、安くするからと言って在庫を持たせ急な注文にも対応できるようにしたりと色々頑張っているらしい。

そして、そろそろ各店舗ともに在庫の数が少なくなり注文を受けずらくなってきたているらしい。

何せ材料が入ってこないのだ、彼らが焦るのもわからないでもない。そして、彼の反応は無い。

さらに十日がたった。

彼の反応は無い。

各店舗へは冒険者を雇って材料の供給をしている。

やはり集団でしかアイテムを収集しない冒険者に頼むと割高になってしまいうらしく彼への問い合わせは終わらない。

そろそろどうにかしなければならぬ。

しかしどうしたものか。

尋問官を呼んでどうにか彼を連れ出してくれと頼んだ。

そしてさらに大問題が発生した。

村が一つ潰れたのだ。

ダンジョンの活性化が起きていたのは三日ほど前に告知を受けていたが油断した。

犠牲者こそいないものの彼の立てた孤児院がなければみな路頭に迷っていた事だろう。

現在は仮宿舎として機能している。

そしてその住人達からも彼に村を取り返してほしいという依頼が舞い込んでいる。

彼は知らないうちにとてつもなく大きな信頼を気づいていたようである。

子供だと思つて我々は大きな失敗をしてしまっていたらしい。

あれから十日が立ち、結果として尋問官は攻城兵器を持ち出した。

極太パイルバンカーこと城壁崩しである。

本来ならば絶対に許可しないがもう対外的にどうしても彼を出すほかなく非常手段だ。

どうやら扉に不思議な石が張り付き強度を上げていたようで真っ白な何かが砕けた後が残っていた。

そして結論から言えばもぬけの殻だった。

何もない。

それが部屋の中に突入した結論である。

調べると隠し扉が見つかった。

どうやって家具まで運び出したのか知らないがもう彼はここにはいないのだ。

しかし、ずっと彼を心配してた人たちが見張りに立っていたはずなのにどうやって出て行ったのだろうか？

隠し扉の先も彼がやつとこさ出れるぐらいなので荷物を持ち出す事、ましてやばれずに出ていくなんて不可能だ。

とりあえずこの事を公開するほかない。

保護者としての面目は丸つぶれである。

事情を話し、搜索願を出す事にした。

驚いた事に各店舗から少なくとも搜索費用が寄付された。

その額五万エク。

さらに貴族から五万エクが追加され十万エクの資金を投じてなされた搜索願が出された。

出されたはずだった。

あの日からさらに九日後。

驚くべき情報が提供された。

搜索願として出したはずのそれは金額のせいか手違いにより手配書として出されてしまっていた。

そして実は彼、すでに一部の活動を再開していたらしくミノタウロスの店主が経営する雑貨店に顔を出していたらしい。

彼が知る前に訂正できればよかったのだが今からではもはや遅い、何もしないよりはと訂正願いと各神殿での事情説明をお願いした。

翌日、彼が訪ねてきた。

何を話したのかはあまり覚えていない。

私がほぼ無意識に作った報告書によると彼は一人立ちし、神殿の生活を終わらせたというような事が書いてあった。

彼への連絡は雑貨店の店主につければ伝わるだろうとも書いていたのでそれをそのまま公表した。

これでこの神殿へ子供を預ける人はいなくなるだろう。

神殿は安全という暗黙の了解は破られてしまった。

そして私は……、寂しいのだろうか。

何か家族を失った時のような空虚さが胸を潰している。

なぜ、こんなことになったのでしょうか。

閑話 大神官の憂鬱（後書き）

なお、閑話では直接物語に係わるような重大な事を書く気がありません。

代わりに日常的なものや主人公以外の視点で書こうと思っています。リクエストがあればメールでどうぞ。

プロローグ 成長するダンジョン（前書き）

この小説にはキングクリムゾンが住み着いているらしい。
とてつもなく時間の流れが速い件。

そしてやっと、やっとダンジョン探索の描写ができた！
嬉しくて軽く泣きそうになった。

なお、ちよつと活動報告にてアンケートを取ります。

主に無駄文章の添削についてです。

プロローグ 成長するダンジョン

成長するダンジョン、活性化する町並み。

されど変わらないものもある、だが変わってしまうものも確かにあるのだ。

出会いと別れが過ぎ去りし日の輝きとなる。

その先にあるものは……。

さて、各店舗に素材の供給を始めて一週間が経過した。

色々あって町の外に家を建設したわけだが少し不思議な事に遭遇した。

野生の魔獣が俺の家を攻撃しているのだ。

正直あいつら程度に壊されるような軟な造りをしていないのでいくら攻撃しようが傷一つつかない。

飽きてどこかに行くモンスターもとい魔獣がチヨコチヨコいる中俺はガン無視されている。

なぜに家を優先で襲うの？ 普通人間である俺を優先的に襲わない？

まったく意味が分からない。

とりあえず図書館で調べてみた。

よくモンスターと魔獣、魔物と別な呼び方をしているが個人の好みであり同一のものであるらしい。

紛らわしいから統一しないかな？ まあいいんだけど。

モンスターは人間の生活圈、特に住居を優先して破壊する。

どうやらこれがどれだけ小さな村だろうが防壁を作っている理由

らしい。

モンスターはダンジョンの入口から一定範囲で生活する。外に生息するモンスターは大体三階層までの浅い階層のモンスターである。

モンスターは人間を無条件に襲う、ただしレベルが十倍以上離れている相手からは逃げる。

……あれ、逃げられた事ないよ？ 初心者は別なんだろうか？

まあさつさとやるものらしいし研究されてないんだな。

そして家を襲撃してたモンスターに冷気を扱うやつがいなくてよかった。

硬化剤って熱には恐ろしく強いのに冷気には不思議なほど弱いんだよね。

ああ、もちろん通常の気温の範囲であるマイナス五十度ぐらいまでは余裕で大丈夫なんだけどそれ以下だと脆くなっていく。

かなり断熱効果が高いのでたとえば冷気で脆くなり崩れるような温度にしても表面から砂が崩れるように壊れていく事になる。

つまり逆に冷気に強くて熱に弱い素材を作ってサンドイッチ構造にすればよくねえ？

今更だが。

ところで仕入れだが順調とはいかなかった。

村の奪還や地上のモンスター狩りを依頼されたせいでもあるが素材のドロップ率が体感半分ぐらいに落ちている。

同じ冒険者に聞く所によると過去の事例から言ってもダンジョンの成長前にはよくある事らしい。

中に誰もいない状態で成長するため、一説には中に降りる事そのものをためらわせるためと言われているらしい。

さらにダンジョンのボス部屋にボスがおらずクリア特典も貰えず自力で歩いて地上に帰らなければならなくなっているとか。

まあそれは自分も確認した。

モンスターの発生速度も通常時の百分の一くらいか？

他にもモンスターが一時的に強くなるとかより凶暴になるとか色々あるらしい。

ぶつちやけ現在休憩時間以外はフルタイムで動いているのにギリギリ注文量をさばく程度である。

自分用の材料とか調合とか一切できてません。

でもこんな感じで動いてると生前の仕事を思い出す。

休みなし、休憩なし、残業なしで（やり残しの）仕事なし。

それをこなせなければ首つていう恐ろしい職場だった。

さすがにそこは一週間ほどでやめたがサービス業怖いが合言葉になった気がする。

まあそんな生前はどうでもいい。

問題は在庫を吐かなければ処理できない注文がある事である。

薬草系や毒草系、鉱石系が元々のドロップ率の関係ではば取れず正直一時的に休業する店舗が出るほどだ。

まあ休業する店舗はちょうどいい骨休めだと笑っていたがいいのだろうか？

皆知っているから客離れも起きないと思っっているのだろうか？

そもそも本当にそうなら笑っちまうんだが。

あれだね、生前の迷台詞を思い出す。

二十四時間働けますか？ 三百六十五日不眠不休の企業戦士、サラリーマンとは日本の侍である。

前者はコンビニのバイトが言っただたい文句だったかな？ 後者は外国人が日本のサラリーマンを超誤解した台詞だったような。

そもそも三百六十五日不眠不休で生きてる方がおかしいがな！
まあそれに近い生活するサラリーマンもいるっちゃあいるが、あくまで近いだけで寝てるし休んでるよ！

まあそんなこんなで自分も寝る時間を惜しんで土地の奪還、防壁の修繕、地上の魔獣討伐、五時間耐久ソロ狩りダンジョン往復マラ

ソンと色々な事をやっている。

まあこっちのダンジョンは飛ぶモンスターが浅い階層にいないだけ楽なんだろうな。

高々浅い階層のモンスターが俺にかなうと思うなよ！

言っまでもなく村を奪還したわけですが、これって勇者の仕事じゃないかね？

勇者仕事しろ！

まあ一般的に冒険者の仕事ではあるが……、安いんだよ、壊滅した村だけあって報酬が。
困ったものである。

さておき。

現在神殿との関係は保護者から通常の冒険者とギルドの関係に戻っている。

所在地は話しておらず基本的に連絡はこちらが向こうに行かなければつかない事になっている。

場所を提供してくれていた恩もあるのでかなり高額寄付を行っておきました。

ちよこちよこ顔を出しているが未だ泊り込んだりすることは無い。
なぜかあの部屋は確保されているみたいだが、ドアの修復化不完全だよカッコ笑い閉じカッコのな。

もう笑うしかない。

改築のため他の部屋は一度完全に解体されたみたいだが自分の部屋は魔法薬で固めてあるので壊せなかったのだろう。

自分の部屋の部分だけ正面に雨宿りスペースみたいな空間ができている。

その代り二階をささえるためのごっつい柱が二本むき出しで立っているが。

本当に戻る気ないんだけどなあ。

なんか管理人室とか表札っぽくついてるし。

あれか、俺いつの間にか孤児院の院長にされているのか？

絶対にごめんである。

俺自身で引き取るならともかく押し付けられた子供なんて疎ましくて仕方ない。

そんな状態では俺も相手も幸せにはれないだろう。

というかあれだ、難民共。

村取り返してやったんだから帰れよ！

結論から言えば彼らはそのままこの町に移住しました。

あれだ、俺が取り返した意味ってあったんだろうか？

まあいいや、とりあえず成長したダンジョンを見に行こう。

ちなみに旧ダンジョンは町の中央にぽっかり地下へ向かって洞窟みたいなが開いていた。

そして現在。

「一体何があった」

「成長したんですよ？ おめでとうございます一番乗りですね」

監視員の神官さんが答えてくれた。

いやいやいや、成長したからって立派な階段と屋根付きの入口になるの！？

階層が深くなるとかそういうのじゃなくて！？

とりあえず五層ぐらいまで潜ってみよう。

さて、第一層に降りてみたわけだが……。

「変わらんねえ」

どこか愛嬌のあるモンスター、ゼリーが蹂躞跋扈する第一階層で

ある。

何処を見てもゼリー、上を見てもゼリー、右を見ても左を見てもゼリーである。

基本的に弱いので瞬殺なのだが……、いつにもまして数が酷い。

まあ描写がないのはお察し下さい。

グチヨ、とかビチャとか汚らしい水音を意識にも入れたくないしそんな擬音を表現したくない。

まあ手順としては半透明で核の位置が見えるので、角剣で突き殺すという所である。

ちなみに見た目は元の世界でいうやつすいブドウとかミカンとかの色つきゼリーの中に白い玉を入れ黒い玉二つで目を表現する。

そして口は無いが丸くして少し平たく潰して上にクリームの角のごとくチヨコンと突起を作ったらゼリーの完成である。

なお、色で強さが変わるといふ事は無い。

食べた物の色が出るのだ。

そして、色のせいかわ美味しそうに見えるが味がなく触感もグチヨっとしていて食べれた物ではないと言っておく。

ただこの感触が好きで捕獲を命令するゲテモノ好きの貴族がいるらしいが。

超雑食の野犬であるガルムという魔獣ですら食べさせようとしたら逃げ出すらしいのでお守り代わりに捕獲される事もあるとか。

ちなみに自分なら、暗い笑みを浮かべながらゼリーを持ってウッフ笑いでにじり寄る相手からは絶対逃げる。

先ほど目と表現した黒い玉は目ではなく感覚器官で、赤外線で物を見ているらしい。

死ぬと表面張力を失った水の如くペシャッと水っぽい何かになり広がってプニヨ玉が残るのだ。

ちなみに攻撃力は極小だが集団で襲ってきて埋めて窒息死させる攻撃が凶悪である。

俺は瞬殺できるので向かってきてくれるのは一々走り回らなくて

いいので楽だが初心者が一番最初にやらかす失敗はこれらしい。

これで前提知識のない初心者の九割が死亡する。

なんでこんな弱いのにやられるかわからないが死ぬ時は死ぬという一例である。

そして第一階層の敵はゼリーだけだった、成長前と同じである。

やはりこのダンジョンは食べ物系が特産なのだろうか？

さて、第一階層の階段まできた。

ちなみに第一階層は岩肌が露出する鍾乳洞のような見た目をして
いる。

各階層ごとに変わるので一切あてにならないが、その層の質によ
っては鉱石や薬草がとれたりするので馬鹿にできない。

一番貴重なのは光苔であるが、確認されたダンジョンは数千ある
なかでわずか三つである。

今回の成長で発生していてくれればうれしいなあ。

ちなみに利用法は幅広く風邪薬（抗生物質）や魔法薬（精神安定
剤）、というわけか火薬、儀式魔法の触媒、光源などである。

意外な利用法に粉にして水に溶かす事によって毛生え薬になるら
しい。

まあいいか、そんなもって第二層である。

嗚呼いつ見ても可愛い。

ただし、絶対に食事中の状態を見てはいけないのはお約束である。

第二層の主な敵は成長前のダンジョンと同じ角兎であつた。

魔法術師の上位職である調教師が一番初めに捕獲す魔獣第一位の
相手である。

第一層のゼリーも出現するようだが頻度は低くほとんどは角兎で
ある。

そして量もまばらであり見回しても二三匹しか見つけられない。
ただし、その脅威はゼリーなど比較にならない。

その兎としては巨体な体とその体重、突進力、そして鋭い角で突き刺す攻撃は金属鎧ですら軽々と貫通する。

ただし、大きいだけあってそこまで速くないので避けるのは難しい。

とは言っても、大体大きさが俺の二倍ぐらいの大きさなので突進が怖い事怖い事、慣れるまでは必死に逃げ回ってたのはいい思い出である。

ちなみに一度でも轢^ひかれると間違ひなくトラウマになるので本当に要注意である。

薙ぎ払いと言う攻撃手段もあるがこれは首の力がそこまで強くないためか痛いと思う程度であり突進と比べれば悪足掻きレベルではない。

ぜひペットにしたいのだが、魔獣捕獲用の首輪って一つが城と同じような値段でありかつ成功率も調教師でなければ低いので諦めている。

一応持つてはいるがさすがにこんなどこにもいる魔獣に使うわけにはいかない。

ちなみに捕獲用の首輪の名称を隷属の首輪と言い戦闘奴隷というモンスターのレアドロップである。

なお、幸いな事に人型には効きづらく知性があればあるほど失敗の確率が上がるので人類に対し使用しても必ず失敗する。

ああそうそう、捕獲されたモンスターは基本的に捕獲者にしか従わないためモンスターの売り買いも存在しないし、ね。

そのため乱獲で全滅したりもしないのである。
本当に残念である。

ちなみに角兎のお肉は美味しいがダンジョン内では残らない。
殺すと同時にそのもっこもこの毛皮の内側は煙のように消えてしまうのだ。

結果、角と毛皮がコロンと転がる事になる。
核の位置は頭部、脳にあたる部分にある。

ちなみにダンジョンの外で調べた。

核は空気に触れるとゆっくり崩れてなくなってしまうが、位置の確認だけなら捕獲し外に持ち出して研究する事が出来る。

よって魔獣の捕獲そのものは冒険者の必須技能である。

なお、今回言っている薬などを使って行つ捕獲と隷属の首輪でいう捕獲は別物なので勘違いしないように。

まあ核の位置は情報を買えばいいという話ではあるのだが、その場合初めて会う魔獣に対処できない駄目駄目冒険者の出来上がりと言つわけである。

冒険者は経験で語るのである。

弱点の解析は学者の仕事ではない、冒険者の仕事なのである。

そんなわけではっさばっさと十連釘バットで毛皮をゲットするわけですが。

ん？ どこぞのあれみたいに空中で多段ヒットして飛んでくような技じゃないよ？ 本当に打ち上げて九連続で攻撃を叩きこむ技だよ？

しかも釘バットとか言いながら普通の金属バットである。

ちなみにこの世界、野球が存在しないのでメイス扱いではあるが扱いやすいためか何人かのメイス使いがコピー品を持っている。

この世界には著作権とかない、コピーされたくなければクオリティと性能をコピーできないくらい上げろという話である。

世知辛い世の中だぜ。

そろそろ背中のリュックが膨らんできた。

さすが成長したてのダンジョンはモンスターの発生率が半端ない。この階層も成長前のダンジョンと同じだなあ。

さて三階層への階段へ到着した。

二階層は天井に謎の光源を持つ草原だった。

なお、謎の光源とは言いつつもダンジョン内によくある光り石というものである。

ただダンジョン内でしか光らないのでまったく価値は無い。

さて、そんなこんなで三階層である。

……あれ？ モンスターいないくない？

ああ、ちなみに自分の場合は動物系を魔獣、それ以外を魔物、総称でモンスターと呼んでいる。

ここも二階層と同じ草原マップのようだが……、はて、モンスターがない階層など普通は存在しないのだが。

まさか固有^{ユニーク}モンスターマップか、一番乗りって言ってたし。

ちなみに固有モンスターマップとは、マップ上にモンスターが一体しか発生せずその階層の強さとしては半端なく強い部類の敵が発生するマップの事である。

まあ一度限りで倒せば通常マップに戻るのだが、正直相手の強さは階層による判断があてにできないため非常に危険である。

とりあえず気配を消して歩こう。

さて、探索していたわけだが特に何もなかった。

おかしい、引き返そう。

……いた。

雪のように真っ白い、角兔より一回り小さな兎である。

角は無い、しかし俗に言う傷持ちである。

傷持ちとは通常のモンスターの三倍は手強いと言われる歴戦の戦士の事である。

特徴的なのは体に大きな傷を持っている事、そして場合によっては特殊な能力を持っている事である。

今回は額に十字の傷がある。

カッコイイ、ヤバイこれ欲しい。

さて、問題はあれが何かである。

最悪この階層で帰還しギルドに報告しなければならぬ。

そーっと近寄りこっそり調達していた隷属の首輪と捕獲用筋弛緩剤をスタンバイする。

ちなみにこれ一個で三カ月分のお給料が飛んでいる。
まず、可能な限りこっさり近づき筋弛緩剤の瓶に注射針を取り付け襲いかかってぶっ刺すのである。

「そい！」

「ピッ!？」

本当にごめんねー、これも仕事なのよー。

十秒ぐらい暴れたが痙攣し始めた。

理由は筋弛緩剤とは名ばかりの速効性痺れ薬だからである。

まあしばらくの間うまく力が入らないって意味では筋弛緩剤ではあるのだけれど納得いかない。

まあ痺れ薬の効果は大体三十秒ぐらいしか効果がないんだけどね。さて、まずは種族の確認だ。

見た感じ角なしの角兎ベビーってところだが、角兎にしては異様に白いな。

角兎も白っぽいのが薄い絵具で黄色く汚れた感じの体毛をしている。実はあまり知られていないが、ダンジョン内でも年若いモンスターと年を経たモンスターの二種類が発生する。

どこから転送されているという説もあるが実際のところはわかっていない。

そしてこの魔獣、一体何なのかちょっと判断がつかない。

まあとりあえず、薬が効いている間にさっさとロープでしっかり拘束する。

そして、ここで隷属の首輪を使うがここで失敗したら報告義務があるので可能な限り持って帰らないといけなくなる。

成功して、くれよ？

そつと隷属の首輪を兎の首にはめる。

さて、どうなるか？

隷属の首輪が光る、そして溶ける。

ここまでは共通のプロセスである。

そして広がり兎を覆っていく。

兎がピーピー鳴いて可哀そうだが、慈悲をかければこちらが殺されるのだから手は抜けない。

なにせ、今回はうまく不意を付けたが傷持ち相手なら熟練の冒険者も死ぬ覚悟をするほどである。

このまま卵のような形になればだいたい成功であるが、たとえ完全に動けない相手であってもそうでなくても隷属の首輪で捕獲できる確率は一定である。

さつきも言ったように相手の賢さに応じて失敗する確率も上がるので傷持ち相手に成功するのは今回の世に薬を使った直後で万に一つと言う所か。

まあ首輪をはめる関係上薬を使って行動不能にしないとほめる事自体が難しいが。

そして、最初の処理が終わった。

綺麗な卵形ではあるがここから一分間、殻を割られなければ成功である。

十秒がたった。

二十秒が立ち痺れが取れたらしく暴れ出した。

三十秒が立ち暴れ続けている。

四十秒、五十秒、五、四、三、二、一……、成功したのか？

ちなみに調教師だとこの一分間が省略される。

噂によるとこの一分間で残り体力を使い抵抗されるらしい。

各職業に与えられる世界からの祝福って基本理不尽である。

どうやら大人しくなった様だ。

まあ捕獲に成功したからと言ってすぐにどうこうできるわけじゃない。

一ヶ月ほどして卵から出てくるまで一切干渉できない。

一説にはこの一ヶ月間で必要な知識と服従を刷り込まれるのだと言われている。

まあ、捕獲に成功したので卵をリュックに詰め込み四階層へ、いこ……？

気づけばすでに発生し始めていたモンスターに囲まれている。

一体の大きさは俺の三倍程度ではあるが、爪が鋭い。

これで大体成人男性とかぐらいの大きさか？

狼、だと？

なんとなく纏っている空気がおかしい。

兎の体臭がついていて兎の耳を付けている自分はさぞや美味しく見えるのだろう。

狼たちの目がギンギンキラキラ輝いて嬉しそうに詰め寄ってきている。

もつよだれダラダラで牙も剥き出し、口をあけ息は荒く非常に興奮してるっポイ。

うん、逃げよう。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ物理的に食われる！

即ダッシュで逃げ出したのだが俺の速度と狼の速度は大体一緒であつたのが救いか。

四階層の階段に近かつたため前の階層に逃げ込むには相当走らないといけない。

狼たちは四階層に逃げ込まれるのを防ごうとしたのか四階層側の階段付近からこちらを追い詰めていたのが逃げ切れた要因である。

しかしよかつた、今日は加速セットを装備してきている。

なかつたら追いつかれて強制的に戦闘になった事だろう。

そして俺はそのまま二階層へと逃げ帰った。

ちなみにモンスターはダンジョンの階層から出られないので入口で立ち往生する事になった。

そのまま突進してきた場合、モンスターだけ見えない壁にぶつかって痛い思いをする事になっただろう。

「ここらへんはどうなってるのかわからないがファンタジーで片づける事にする。」

さて、そのまま二階層も一階層も走り抜け外に出たわけだが、超笑顔で監視員の神官さんが待っていた。

「いや、新しいダンジョンの情報が欲しいのはわかりますけど、そこまで綺麗で純粋で物欲しそうな笑顔だと引きますよ？」

「今日も大量ですね。それでは報告の方をお願いします」

「あー、えっと。最終到達階層は三階層、二階層までは前ダンジョンと同様、三階層は固有階層で兎つばいモンスターを撃破、しかしその後発生したモンスターに囲まれたため逃亡」

「ふむふむ、そのお相手は？」

「倒さなかったので不明ですが見た目から言つて影踏み狼の可能性大、しかも三階層は影踏み狼のみのようでした」

「……元四十階層のモンスターですか。これはまた、難易度が一気に跳ね上がりましたね」

「報告は以上です」

「はい、ご協力感謝します」

ちなみにここで行われた報告は神殿で統合管理される。

情報は買う事によって閲覧できるが基本有料である。

ただし、たまにダンジョンからモンスターがあふれる現象があるので警戒のため報告は必須であり義務である。

まあ大抵要注意の階層があれば入る前に教えてくれるのでその恩返しみたいなものである。

神殿もといギルド側も冒険者が減るのは不利益なため基本的にそのようにしている。

さて、もう今日は帰ろう。

移住先の家は現在地上二階地下二階の四階建て？ である。

地上一階が寝室兼調合室、二階が薬剤庫、地下が地下通路入口兼倉庫である。

とりあえずそんなこんなで生活しているわけだが、移住先は現状としては魔法でエアコン作らないと死ねるかもしれない。

いやあ、作った当初は扉があきつぱなしかったから気づかなかったんだけどさ、硬化剤の断熱効果恐ろしい。

この部屋で熱を発するのって自分ぐらいな覚えがあるんだが気づけば真夏みたいな気温になってました。

この前開発した冷蔵魔法を改良するしかないか……。

しかし室温の感知部分って未実装なんだよなあれ、開発者がへまこいたのか元々そんな機能なかったのに誰かが後付しようとしたけっかあんなへんてこな式になってるのかわからんが。

ちなみに方式としては転移の魔具の応用で、熱だけを転送する方式である。

これ調べてみるとすごくぶっ飛んだ方式で理解するまで一年もかかった。

いやね、例えるなら空気中の静電気を集めて電化製品で使っつてぐらいぶっ飛んでるのよ。

エネルギーを感知する方式と転送する方式は（常人には解読不能という意味で）最早芸術レベルの領域で、温度感知術式を組み込むための部分であろっ所が空白になっているぐらいか。

予測するに空間座標上にあるエネルギー総量で温度をはかろうとしたが、術式を見る限り感知できるのは転送しているエネルギーの流れのみとなっている。

これって別の温度感知用の術式作ってその連携術式ぶち込むしかないよな。

速いところ開発しないと室内がサウナになってしまう。

ここ一週間は開発のために野宿ですよ家があるのに、泣くぞこん

ちくしょう。

とりあえず新しく作った熱量観測術式を温度計式とでも名付けるか。

それによると扉を閉めた状態では室温が一向に下がりません。

まあ、一応温度計式はできたがこれどうやって連携させるよ？

あー、温度に応じて転送量をいじる方式も組まないといけないのか。

という事は最低でも三つも魔具製品組まないといけないって事か？

とりあえず温度計式に通知機能を付けて別の術式へ発動トリガー用のデータ転送機能をつける。

そして今度は受け取って判断する術式だ。

適温は二十五度ぐらいか？

いっその事この術式に手を加える事で温度調節できるようにするか。

ってことはあの芸術的な式を解体してエネルギー排出量を外部から受け取って作動するようにしないといけないわけか？

ヤバい死ぬる。

プログラムは趣味でちよつといじってた程度だから本格的なコーディングつつたっけ？ とにかくプログラム組むノウハウなんて持っていないよ。

どうしろってのさ。

とりあえず受け取った現在の室温と設定温度の差分をエネルギー排出量に変換して渡すようにしなければ。

更新タイミングは五分周期ぐらいか？

それだと室内の魔力が枯渇するか。

ただでさえ転送術式に限定空間内の魔力使うしな。

液体魔力をエネルギー源にするか？

それだと本格的な“装置”を作る事になるな。

ぶっちゃけオーバーテクノロジーってレベルじゃねえぞ。

もし王宮に献上したらそれだけで最高位の貴族に成れるぐらい革命的である。

それぐらい室温の管理にはいろいろな奴らが悩まされているのである。

なんで皆こんな術式を開発しなかったのかね？

もしかしてあの謎の空白部分は現在開発中なのか？

あの術式じゃどう見ても難しいと思うけどなあ。

ちなみに術式を物体に対して焼き付け術式基盤エンチャンターという現代で言う精密機械を作る職業は付与術師ウィザードと呼ばれる魔法術師の上位職が行える。

術式基盤はその周囲にある空間魔力と言うものを吸い上げて通常は常時、俺が開発した一部のものは任意で作動するようにできている。

ちなみにどれだけ微細な術式を焼きつけられるかは付与術師の技量によるわけで、どれだけ万能な術式を作っても複雑であればあるほど刻める術師はいなくなるわけだ。

自分が作ったオンオフ回路だけでも付与できるのは国宝クラスの付与術師が一年かけてやっとぐらいであろうと思う。

ただし何事にも裏技があって、基盤部分と術式回路部分を魔法やスキルではなく人力で作成した場合、付与術師の仕事は基盤への回路定着作業なので腕は関係ないのだ。

まあ自分がぽつと出の付与術師捕まえてその技術を一緒に開発したわけだが。

いやあ、正直鍛冶の腕とかも必要なのでお爺さんの協力がなければ一切成功しない技術なんだけどね。

正直現代の精密基盤を知っている俺からしたらこの世界で使われている魔法陣？ まあ術式基盤は糞みたいな集積度、子供の工作レベルに見えるわけで。

まあ実際スキル代行という技術を利用して作ってみたが糞難しく
まともに術式組むこともできなかったが。

あれだね、子供のおもちゃって馬鹿にしたものに馬鹿にされると
本当に腹が立つ。

ああちなみにスキル代行ってのは、その魔法やスキルを覚えてい
る相手から魔法やスキルを借り受ける技術である。

ただし使用にはとてつもなくたくさんの制限があり、特定の場所、
特定の時間、特定の触媒、特定の手順を踏まなければならないと厄
介極まりない技術だ。

まあ相手の脳味噌を自由に使うような超技術なので理解不能で解
析不能でとりあえずつかえたからいいやと言う技術である。

開発に戻るか。

冷蔵術式も既存の術式を組み合わせで俺が作ったとは言え、術式
そのものは論文やらなんやらにあった術式のごっちゃ煮である。

それも全部理解しないと作れそうもないなあ。

そんでもって作らなければいけない術式が。

・受け取った排熱エネルギー量に応じて熱エネルギー転送量を変更
し上空百メートルへ転送する術式。

これが完成系のエアコン術式である。

現在冷蔵術式から解析できている式が次のものだ。

- ・熱エネルギーのみを転送対象にする術式。（解析中変更不可能）
- ・ターゲット範囲の指定術式。
- ・ターゲット範囲と外部の空気の層形成による区別用術式。
- ・指定対象を上空百メートルへ常時転送する術式。（解析中変更不
可能）

うわあ、重要部分丸々流用じゃないか、絶望的。

まず熱エネルギーのみを転送対象にする術式の解析からである。
んー、複雑な術式って安易にコピーされないように暗号化もされてるから、例えるならピカソの絵なんだよなあ。

まず暗号化を解除つと……、また複雑な術式が。
頭痛え。

えーと、対象選択の記載がこれで、熱エネルギーが……、内部術式だと？

さらに暗号化解除つと。

うわぁ……、なんでこんな術式でできるんだ。

出てきた術式は通常の転移術式の中途半端に作った物体。

かりにこんな術式で転移しようとしたら体の一部とかこま切れになつてとかになるぞおい。

これは魔力効率も悪いしーから作るしかない。

確か火炎弾の魔法に熱を作れていう術式があつたからそこから熱の部分を流用して、たしかコール魔法の解析術式に魔力量を調べる術式があつたはずだからえーと？

まあ開発なんて楽しいものではない。

結論に行つてしまおう。

他の魔法から解析して出てきた術式文字が次のものである。

- ・火炎弾から熱発生術式（熱の術式文字を流用）
- ・解析から魔力量計算術式（量を計算する術式）
- ・範囲爆撃から範囲指定、使用魔力計算術式（範囲指定する術式）

組み合わせる事によってやっと範囲内の熱量を計測する術式ができた。

総熱量を計算しないと対象にできないとか聞いてない。

まあ使用魔力は半分ぐらいになったけど。

さて次である。

転送術式は暗号化合戦と言ってもいい。

正直ポピュラーで最も多く使われており最も多く危険をはらむ術式である。

なにせ、攻撃魔法として使えば相手の腕や足を瞬時に奪ったり触れる事も近づく事もなく首を飛ばす事もできる。

そりゃあ解析が禁止された挙句研究も王立の専門機関でしか許可されないわけだ。

なるほど、それで暗黙の了解「転送は攻撃に使用しない」があるわけね。

ちなみにだが、魔法と術式は同一の技術体系上にある別物で、魔法は「体系付けられた変更不可能で個人でも習得可能」であるもの。魔法から発展し「個人での使用は不可能であるが誰でも使用できる機能特化魔具」にした基礎部分が術式である。

なお、プログラム部分である術式を作動可能な物理面に書き込んだものを術式基盤という。

まあ転送術式解析中。

一ヶ月かかってもまだ解析できていない。

どんだけー。

まあいろいろ忙しいってのもあるけど。

現在全体からみた一割程度しか解析できていない。

王立の暗号化技術スゲー。

正直ブラックボックステスト（内容を知らず作動させて動作を見るテスト）でリバースエンジニアリング（逆算のようなもの、隠された中身を暴き出す事）すれば早かったか？

しかし理解せずにやって腕とか足とか命とか無くなっちゃいましたーなんて言えないしな。

頑張って解析するしかない。

ああ、後兎が帰ってきた。

基本外で草食べている。

残念な事に時間がないのでかまってやれない。

とりあえずはフィフィル家の警備員みたいなことをしてもらっている。

さらに一ヶ月がたった。

なんで解析してるんだっけ？

商品の入荷もしながらだからなかなか進まない。

とりあえず法則性を見つけ半分ぐらいまで解析できた。

全体が見えなければどうともいえないが、空間をつなぐ術式と入れ替える術式があるように見える。

一体全体どうやってこれが転送になるのさ？

一方的に押し出して送るのか？

さらに一ヶ月がたった。

やばい解析面白すぎ。

商品の入荷もしながらだが、ストレス解消にちょうど良すぎる件ヤバいわこれ、クロスワードにハマるみたいにハマるわこれほんと。

九割まで解析できたが最後の転送の始動式ともいえる基礎部分が本当に凝固に暗号化されている。

絶対攻略して見せるぜ！

さらに一ヶ月がたった。

商店の方には入荷を一ヶ月休む旨を伝え本格的に解析した。
結果、解析には成功したが高度すぎて意味不明である。

ただ何となく流れはわかるし、付け足された部分は判断できるので流用はできそうである。

えーと、そうか開発か。

えーと？

とりあえず転送術式の基礎は洗練されすぎていじれない、高度すぎる。

変な部分を排除するとこんな形になる。

- ・起動用基礎術式（流用）
- ・情報受信術式（流用）
- ・対象選別術式（流用）
- ・転送指定術式（流用・百メートル上空固定）
- ・転送開始術式（流用）

百メートル上空固定なのは元々そういう転送術式だからだろう。

たぶん通常の転送術式はここに転送先情報の受取術式と組み込み術式があるはずである。

さらにこれに熱感知術式を組み込み、排熱量受信術式を組み込み、情報受信術式と合わせる。

えーと、これが基礎術式になるわけで。

- ・起動用基礎術式（流用）
- ・新型・転送対象総熱量観測術式（新規）
- ・新型・排熱量受信術式（情報受信を改造）
- ・新型・指定熱量対象化術式（対象選別術式を改造）
- ・転送指定術式（流用・百メートル上空固定）
- ・転送開始術式（流用）
- ・終了及び事後待機術式（新規・オンオフスイッチ術式）

並べると縦三十センチ横一メートル三十センチぐらいか。
次にえーと、温度設定術式か。

- ・数値化温度受信術式（新規）
- ・数値化温度設定術式（新規・基礎を二十五度に設定）
- ・転送術式への送信術式（新規）

ちなみに温度設定は情報せて用端末、通称リモコンで行う予定である。

後は温度計術式が、えーと？

ふむ、不備のある術式があるな、ここをこうしてっと。

- ・熱総量観測術式・改（新規）
- ・数値化基準設定術式（新規）
- ・設定術式への送信術式（新規）

完成、これを術式基盤にすると……、箱ができるな。

大体縦三十センチ横三十センチ高さ一メートル三十センチになる。
材料は糞高い抗魔銀と魔法銀、内部保護用ステンレス板材、外部
包装用のダマスカス板材、燃料もとい液体魔力投入口のガラス容器
部分。

糞たけえ、たぶん材料だけで城が買えるぞおい。

まあお狐様に物々交換頼めば薬と交換で一番高いのはどうにかな
るが、術式基盤の作成に一年以上かかるんじゃないの？

課題は尽きない。

プロローグ 成長するダンジョン（後書き）

第一章プロローグ終了時点での主人公ステータス。
スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。
なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、
術式使い「99」

LV・46/99 EXP・31・44% NEXT：92534
称号一覧

「@*者」\$級#：システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破体现者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・LV・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・LV・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・LV・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42350

>魔法：生命力回復補助

・LV20 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・LV40 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

>魔法：終わりの裁き

・Lv1 Ⅱ身及び一手の罪・重+によってダメージが変わる対魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

>第一次限界突破者

>自分殺しの宿命

>呪い：シャドウハンド

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

・転職干涉「特殊職業解放」

・特殊干涉「レアドロップ率上昇」

・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」

・特殊干涉「固有スキル獲得」

・特殊干涉「肉体成長停止：十年」

・特殊干涉「再度ドッペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」

・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

第一話 環境再生、新たな拠点（前書き）

悔しい嗚呼悔しい。

今回の話は書いてる途中に三時間分が消えた。

取り戻すのに午前四時まで作業している。

正直死ねばいいのにと本気で思ってしまうほどマイナス思考モードである。

とりあえず脳内派生嘘ペットにいやしてもらおう。

とりあえず今回から作業用G B Mを導入。

そして小さなミスの直後であれば元に戻すが有効な事が判明。

全部消えた時は小説本文で勝手に挿入されるから元に戻すが効かなくなるようだ。

死ねばいいのに。

第一話 環境再生、新たなる拠点

嗚呼、うちの子が可愛すぎて困る。

真っ白である。

もっふもふである。

ふつかふかである。

もっこもこである。

歩けば後ろからちよこちよこついてくる。

何より人語を理解するので非常に賢い。

もう甘えてくるさまは鼻から愛情があふれそうになるよ。

と言つのもこの前捕獲した固有モンスターである。

種族を図書館で調べたが良くわからなかった。

ギルドの方でも調べてもらったが不明との事で、育つまで様子を見るべしと言つ指示だ。

まあ手放す気はさらさらないんだけどね？

図書館の方も大抵成体のモンスターの特徴を乗せるので、もしかしたらまだ子供なのでわからないのかもしれないというのが俺も含めた正式会見である。

そしてもう今の自分の顔はとろけているに違いない。

乗って指示すればその方向に動いてくれるしもっふもふだしもっふもふなのだ。

特に指示がないとどうするの？ どうするの？ と鼻をスピスピ言わせながら見つめてくるさまはもう世界一可愛い。

つい高麗人参をあげすぎてしまうほどである。

アイテムデータ：高麗人参

栄養価の高い植物系の人参型ドロップアイテム。

滋養強壮剤の原料であり草食系の魔物が好んで食べる。

ドロップ元は子供サイズの人型の根っこに頭に植物という感じのモンスター。

名前を「マンドラゴラ」である。

なお、そこそドロップ率の高いレアアイテムである。

出会う子供たちにも大人気だ。

まあ俺が乗っているせいで大人しく見えるからみただけど。

さすがにちよつと困っている風だったので助けたが、俺以外の子供を見ると俺の背後に隠れるのはなぜ？ 変なトラウマにならなければいいが。

それともあれか、俺と同じで集団は怖い口か。

とりあえず名前は職名をミイとした。

まあ自分と同じように本名は隠すようにしたのだ。

ちなみに正式な名前をミミル・ファウ・フォリアと名付けた。

もちろんあの地底湖はミミルの泉と名付けた。

由来は言わずもがな、ミミルの泉である。

賢かったから何となく思い浮かんだのだ。

なぜか水泳が大好きで、この前作った地底湖で暇があれば泳いでいる。

地底湖へは螺旋階段をつけたので自宅から行き来できるようになっている。

後々天井側に光苔を繁殖させて地下農園を築こうと思っている。

なおこの世界の光苔は生前の世界にあった光苔とは別物であり、空間魔力を吸収し非常に強く光る。

防衛戦略の関係上トイレは地底湖側の空き地へ繋がっている。

無論排泄物はそこに捨てられるので、ついでに肥料を作って夢が広がっていく。

とりあえず桃の木は必須だよな。

ついでに思いついたアイディアで、転送術式で水を地底湖から引つ

張っているので井戸に毒を流されても平気である。

何せ地底湖のさらに深い、表層ではなくさらに地下の部分の水源を利用しているからである。

転送術式が便利すぎて困る。

まあ生物は条件をそろえてかなりの魔力を使わないと転送できないんだが。

ふと気づくと自宅の要塞化が進んでいるなあ。

そして今は前回作ったエアコンの基盤を必死にお爺さんと作っているところだ。

前々回作った術式版発電機はうんともすんとも言わなかったので今回は相当設計の段階でチェックしたので大丈夫だろう。

自分は基礎部分に術式を掘る作業をしている。

その溝にはめ込む金属の微細加工なんて経験でしか補えないよあれは、お爺さんはある程度才能も必要だと言っていたし。

とりあえず材料は抗魔銀と魔法銀を確保している。

抗魔銀の方は宝石好きのお狐様に生前の知識で加工した俺の頭ほども大きさのある水晶玉と交換してもらった。

なんでも真球に近いほど使いやすい（何に使うかは教えてくれなかったが）らしくすごく喜んでいた。

今回刻む術式が多いとは言え整理されているので刻むのも楽しい。

本来は術式を暗号化するのでさらに複雑になるが、物理的にも解析魔法的にも封印する事にした。

正しい分解の仕方をしない限り解析できないものにしたので正直分解は考えないが正解である。

ちなみに解析する場合、三次元構造の密封圧着した回路なので、ナノ単位の正確さで各層の各回路板を切り出さないと一発でおじゃんである。

現在一個目の第二層目を作っており、合計四個作る予定である。

それぞれ一階と二階のエアコンとして、地下二階の冷凍室として機能させるための冷却器として、最後に地底湖の温度調節用である。

さて、そろそろ休憩を入れるでしょう。

「お爺さんや、そろそろ休憩にしましょう。お饅頭もありますよ」

「お婆さんやとでも言ってほしいのかの？」

「お爺さん冗談はわかるくせに乗ってくれないよね」

「なぜかのう、何となく酷い事になる気がするの」

「そんな事は無いはずだけどなあ」

さて、今現在目の前には黒の素地に白銀の回路が踊る術式板の前に座っている。

改めてみると本当に贅沢な素材を使用している。

精密回路を使用する関係上、どうしても通常の魔力を通す基盤ではうまくいかないため電気で言う絶縁体にあたる抗魔銀を使用している。

本当は符号化^{あんごうか}までどうにかしたかったんだけどあれやると刻まなきゃいけない量が十倍近くになるんだよね。

後、符号化すると起動魔力が増えるというのもあるので今回は完全な物理封印で解析不能にすることにした。

ん？ ああミイか、どうした？

「ミイー」

「ご飯が欲しいのか？」

「ミュー」

「んー、遊んでほしいのか」

「ミューイ」

嗚呼癒される。

とりあえず取り出したのは巨大猫じゃらしモドキ。

どういう理屈か恐ろしく弾力のある茎と真ん丸で細長い穂を持つ植物だ。

結構どこにでも生えている。

ふにふにと振るとペシッと穂先を叩こうとがんばるミイが可愛くて困る。

それを必死によけながらより近くで挑発するようにじつとさせ叩こうとしたらピッと避ける。

そしてすぐ戻す。

とりあえず十分ほど遊んで癒されていた。

「ところでこれは何かの？」

「だからエアコンだってば」

「だからエアコンとはなんじゃ。お主の言う事はたまにさっぱりわからん」

「だから室内温度調節器だってば」

「そんな王侯貴族が使うような物作れるわけないじゃろ」

やれやれと首を振るお爺さん。

本当なんだけどなあ。

まあこの回路を刻みつけてから術式回路を重ね焼きする手法、付与エンチヤンター術師の能力を一気に引き上げる手法なのでこの頃この町を中心に広まり始めている。

無論、最初に開発したのは俺である。

高々異世界の祝福に何千年もかけて積み重ねてきた人類の英知が負けてたまるかと言う話で、必死こいて考えた末にヒヨッコ付与術師を捕まえて開発したのだ。

無論、自分の技術力が足りないため精密回路を作る鍛冶師の協力も必要不可欠なので新技術とは言い難いが。

そんなわけで術式を刻んでいる間は特に問題ない、問題は作動させてその機能が知れてからだろう。

まあ自宅の室内でしか使う予定ないからばれようがないんだけど。

「それにしてもお主は突拍子もない事ばかりするのう」

「そんな事は無いと思うけど」

「大体魔具の開発なんて国の研究機関がやるような事だしの」

「いやいや、日用品ぐらいは素人でもそれなりの知識があればできますって」

「その知識がないから普通の冒険者にはできないんじゃないやろ」

「いやいやいやいや、魔法術師ならともかく上位にあたる魔導師メイガスなら効率化のために魔法式を読み解くし最上位の真言術師スヘルキャスターなんてそれそのものを扱ってますよ？」

なんでもう手遅れかって感じで頭を抱えるのさ。

いやだって術式文字が理解できるなら後は組み合わせで魔力を現象変換に流して現実侵食型の魔法機関に流して結果を引き出すだけじゃない。

魔法だって実際、魔力を、術式回路に、流して現象を引き出すっていう手順を踏んでるわけで今説明したの全部やってるんだよ、なぜこれできないと思うのさ。

独自の改良とかやってる魔法術師もいるんだよ？ そんな初期上位職でもできる事をできないなんて言われても俺が理解できないがな正直改造にしろ何にしろ、術式として刻み込んだら魔具になるのになんで本当に分からないんだろ。

「だから、そういうのは専門の学者が必死にの？」

「そういうのは広域殲滅術式とか完全蘇生術式とか大規模な奴の話でしょ？」

「そもそも素人には魔法文字はわからんと」

「だからその素人が魔術文字の知識を持ってるんだって何度言ったら理解するのさ」

そもそも魔術文字を扱えない人は魔法適性ゼロ判定受ける事になる

のですよ。

ぶつちやけそれって「喋れません」って口で言っちゃってるぐらい信用できない言葉だから。

一定範囲の言葉しか喋れない村人^{エスパーシー}じゃないんだからありえんだらうという話。

そもそも魔術文字って結構実際に文字書く時も使ってるよねという所をどう説明付けるんだが。

「何度も言うがの、そういうのは専門の」

「はいダウトー。それが先入観です」

「だうととやらが何かは知らぬがの、みな感覚でいじっておるのじやよ？ お主のように理解しておるわけなかるう」

「それで改造できるとか魔法を改造してた魔法術師^{ウィザード}はどんだけ天才なのさって話になるんだけど」

いやね、積み木を適当に組んでたらハリネズミのように武装した要塞が出来てましたってぐらい信用ならない話です。

まあいいや、エアコンの作成を再開しながら話すか。

えーと、確か二層目が完成したから休憩入ったんだったな、三層目か。

「大概そついうのは過去の事例から当たりを付けてだの」

「そんなんで改造できるほど魔法は幼稚じゃありませんよ」

「それは過去の偉人たちがじゃな」

「はいはい、適当にいじったら炎槍が氷棘になるんですねー、あはは面白い冗談だ」
ファイア・ヒアイス・ニードル

「……確かにそれは極端な例だがの？ 事実お主の言う術式文字を認識して使っておるやつらなど万に一ついれば奇跡じやの」

仮にそうだとしたらファンタジー半端^{バネエ}ないってレベルじゃねえぞお

い。

ぶつちやけ俺の知ってる技術公開したら世界戦争に発展しない？

第一次魔法対戦ですねよくわかります。

でもそれって本当にそうなるのだろうか？

コデック

そもそもなんで皆変換機使わないんだろうと思ったら、もしかしてパソコンで言うバイナリをこねくり回してたの？ 中身も知らずに？

…… あー、よくわからん人のために例えて言うなら、沢山の部品使って機械造るところを原子配列いじつ機械を作りましたと言えば分るだろうか。

ねーよと言わざるを得ない。

つとよし、三層完成。

ちなみにどんな作業をしているかと言うと、まず薄く延ばした抗魔銀を指定の大きさに切りひたすら術式文字焼付け用の溝を掘っていくのだ。

掘るための道具は万年筆のような形状の専用工具で超硬金属とファンタジーで名高いオリハルコンというものが原料らしい。

手に入れた事がないので詳細は不明である。

そしてお爺さんの担当はその掘った溝に焼きこむ魔法銀である。

魔法銀を溝にそってはめ込むような形になるように加工し、実際にはめ込むのだ。

量が少なかつたり多かつたりしても作動しなくなるのでお爺さんの長年の勘と技術力が頼りである。

まあそこまで終わってから一枚一枚作動確認し回路として成立しているなら部分的に作ったブロックを統合すれば各層の出来上がりになるわけだがここで焼き込み作業が必要になる。

エンチャンター

そして最後に今は食事に出ていないが付与術師の仕事である。

付与術師は本来材料の上に魔法銀を置き回路を自力で形成し焼きこまなくてはならない。

それをすべて思念操作でやるのだから神がかつているとしか言いようがないが、正直非効率この上ない。

まあ回路形成までやると後は思念操作による焼き込み部分だけなので大抵の付与術師は問題なく成功できる状態になっていると言ってもいい。

今回は信用のおけないやつを使うわけにはいかないので、超忙しくしていたが弟子兼下働き一号ことルイ・ファンベルを呼び出した。ちなみに仕事名である。

過去に薬の調合で呼び出したことのあるリアのお父さんにあたる人だ。

ちなみにファンベルは俺が考えたブランド名で、安定した質を提供しますファンベルシリーズがうたい文句である。

工場と大量生産の概念を教えてからは生活用品の魔具を量産しているらしい。

休みがないと泣いているらしいが奥さんはホクホク顔だった。

今日も「久々の休みだったのにー！」と血涙を出してリアに抱き着いていたがお父さんうるさいの一言で撃沈していた。

まあお金の心配しなくていいって楽でいいわな確かに。

そして工場長なんだからもっと人雇えよという話。

もう一度行っってしっかり運営について教えないといけないかもしれない。

といっても自分も知識だけなのだがないよりはましである。

さて、そうこうしている間に二個目ができた。

慣れてきてからは結構簡単に掘れるのだという事を今日初めて知った。

まあ今まで冷凍庫しか作ってなかったからな。

アイテムデータ：冷蔵庫

一辺を二メートルとする正方形箱型の魔具で中の温度を密封時に限り絶対零度近くに保つ。

密封している間だけ作動し、基本的に空間魔力を馬鹿食いするのでその周囲では魔具が使えなくなる。

基本温度の影響を受けない緋金と呼ばれる金属でできた器具で中を管理する。

なお、緋金は柔らかいので重い物を扱うと結構壊れる。箱や術式基盤も緋金製であるものもあり完全断熱とか馬鹿じゃねえのというぐらい断熱素材尽くしである。

冷蔵庫術式は無駄に符号化されてたから複雑で複雑で、術式そのものが小さかったのが救いか。

まあ元自宅とかミノのおやっさんの所とかこの工房とかで使っている。

他にも配ればいいかもしれないが、そうするとメンテナンスが糞めんどくさいので諦めた。

まあ日用品はルイさんが作ってるしそのうち誰かが開発して普及するかもしれない。

急で悪いがそろそろ話を戻そう。

誰でも日用品の開発をできるようにするといったが下働き一号ことルイさんはその実例第一号である。

最初こそ使う術式を俺が作ったがファンベルシリーズは基本ルイさんの開発設計したものである。

なので、決して俺がおかしいわけではないはずなのだ。

お爺さんも実例は知っているはずなのになぜ理解してくれないんだか。

よし、三個目完成。

「ほう、もうできたのか」

「一個目以外は書き写すみたいなものだったからね」

「無駄に器用じゃのう」

「無駄って何さ無駄って、数作るなら慣れの問題だよ」

「無駄に器用じゃのう」

「苛め？ 苛めなの！？」

うわーんと鳴きまねをしながら四個目の一層が完成した。

書けば書くほど覚えるのは漢字の書き取りとかといっしょなので、後は慣れである。

そういえばミイはずいぶん静かだなんて寝てるし。

本当にマイペースだよなミイって、まあそんな所も可愛いんだけど。ああ、ちなみに雄か雌かもわからないので名前を付ける時に困った。本当にこいつの種族は何なのだろう？

そうこうしているうちに二層目完成つと。

三層目は集中してぱーっとやってしまった。

後はお爺さんの魔法銀とルイさん待ちである。

削りカスはお爺さんに「メッキ」という技術概念を教えたので、ためしに試してみるそうだ。

まあお爺さん達を待っている間に液体魔力の供給器と筐体部分をつなぐ部品でも作りますかね。

まあ例によってプニヨ玉なわけだが。

今回プニヨ玉は腐るほどあるのでいくら失敗しても問題ない。

あれだね、成長直後のダンジョン半端なかったですハイ。

ん？ あー、ミイさんや。

危ないから飲み込むなよ？ 転がして遊んでる分には怒らないから。ちまにみプニヨ玉は水にも浮くので地底湖でボール代わりになるだろう。

さて、供給器用の穴をあけて削って大きさをそろえる。

後は封印用のステンレスの内装と見た目用の外装であるダマスカス鉾か。

ステンレスは板をプニヨ玉で接着するからいいとして、問題はダマスカスカ。

よし、省略！

問題解決よきかなよきかな。

いや、ダマスカス鉾作るのメンドクサイし良く考えたら木目模様作

るのは斜めに削って板にしないとイケないんだもの。

「おや、どんなものになるか期待していたのに筐体は手抜きをするのかい？」

「あ、ルイさんお帰り。ごはんにします？ お風呂にします？ それともわ・た・し？」

「それを妻に吹き込んだのは君だったのか。正直ビックリして妻を病院に連れて行きかけたよ」

「それでボコられてたんですねわかります」

「それは言わないでくれ」

「奥さんの冗談ぐらい笑って流さないと」

「あの後かなり大変だったんだぞ？ 頼むから妻におかしなことを吹き込まないでくれ」

ふふ、それだけじゃなくリアにも吹き込んでるんだぜ。

お母さんに上目使いで「かわいい弟が欲しいな」って言うようにつて。

俺のターンはまだ終わっていないぜ、ドロートラップカードってか！
なお、他にも奥さんの方にはネタを仕込んでいるのだよ、使うかどうかはわからんがな。

ふはははより一層困るがいい！ リア充なんて苦労すればいいんだ！
ん？ 嫉妬じゃないよ、仮に嫉妬だとしても嫉妬と言う名の悪戯だよ。

何言ってるかわからない？ こまけえことは良いんだよ！

まあいいや、そんなこんなで焼き付けも終わって最後の工程、作動確認である。

ステンレスは後ではつつければいいや。

供給器をセットして液体魔力を投入、リモコン用の端末は作ってないので今回は手動で起動する。

リモコンの情報受信部分に直接魔力を注ぐ。

今回流す情報はプラスマイナスゼロ、室内を二十五度にしろという命令だ。

冷却用のやつだけ初期温度がゼロ度に設定してある。

今ここで使えば、鍛冶場で金属を扱った後だけあって糞暑いので効果は十分体感できるはずだ。

「起動！ さあ示せ、貴様の有能さをなあ！ ポチツとな」

「……ほう、これは涼しいの」

「広域冷蔵庫ですか？ 確かに涼しいですね」

「だからエアコンだってば。冷凍庫にする事もできるけど」

起動してみてわかったが一つ失敗した。

元の世界のエアコンと違ってモーターで風を回すわけじゃないので空気が循環しない。

天井にプロペラみたいな攪拌機でもつけて空気回すしかないようだね？ という事はどっちにしろモーター型の魔具を作らないといけないのか。

確か既存の技術に合ったよな、特定の言葉に反応して特定の行動をするやつガーゴイル技術だっけか？

まあこれで室内で生活できる。

正直隣に自宅があるのに野外で生活しなきゃいけないとか泣きそうでした。

神殿の掘立小屋の時は天井塗ってなかったからそこから熱が逃げてたんだね。

まあ冬なのに不思議なほどあったかいなとは思ってたけどまさかあそこまで断熱効果が高いとは思わなかったね。

世の中予想外の事でいっぱいである。

「うん、規定温度になると作動停止するのも確認と。後は温度が上がった時に作動再開を確認できれば」

「あ、動き出しましたね。という事は完成ですか？」

「そうだね、完成したっちゃしたけどこれ広めたらだめだからね？」

「ほう、なぜじゃ？ お主の事だからまた広めると無茶な注文をするかと思っただがのう」

「これを広めたら危ないんだよ、使い方によっては人工的な災害発生装置にできるから」

何せ魔力の許す限り極寒時刻でも灼熱地獄でも思いのままに作り出せる。

それこそ包装材に緋金を使って燃料庫を内蔵型にすればそれだけでどんな環境でも燃料の許す限り地獄が作れるのだ。

熱転送は正直、人にはまだ早い技術である。

まあ必要に迫られて作ったわけだけだね。

「それなら仕方ないのう。そこいらの付与術師を使わなかったのもそれが理由かの？」

「その通りだよ、そういうわけで申し訳ないんだけど今回の事は忘れてくれると助かる」

「仕方ありませんね。まあフィーさんにはかなり使える技術を提供していただいているので否はありませんが」

「しかし、鍛冶場でも効くとなると相当強力じゃの」

そういえば出力計算してなかったけど最大出力だとえーと？ 瞬間的に絶対零度か。

まあ元が冷凍庫術式だからな、しかたないっちゃしかたない。

ちなみにだが、この式を転送温度をマイナスになるよう設定すると暖房になったりする。

転送で俗に言う逆転送現象である。

まあこれが発展したものが物語で言う勇者召喚の魔法陣になるんだろつけどさ、条件付けて呼び出すって本当に国家規模じゃないとで

きないと思うんだ。

どれだけ複雑な術式書けばいいか想像もつかないし。

さて、環境も整ったしダンジョン攻略を始める事が出来そうだ。

よし、運ぶための台車をおやつさんから借りてこよう。

おやつさん所はスケールがデカいから使いやすいだよな、台車はミイ、出かけるぞー。

ん？ 台車ってミイにひかせりやよくない？ 力強いし。

そうだな、そうしよう。

そんでもって商店に到着した。

「おやつさん台車貸してくれー」

「おう、お前さんじゃないか」

「いや誰だよ、このネタ好きだねー。まあちよつとデカい物運ぶんで貸してほしいんだけど大丈夫？」

「そんな事もあるつかとー！ お前さんのぶんも作っておいたのさ！ ……これ結構気持ちいな」

……なん、だと！？

先を越された！

まさか先にこのネタをやられてしまつとは一生の不覚。

「まあいいか、じゃあ借りてくねー。ミイおいで」

「ん？ 土産か？ よつと、結構重いな」

「ミイ？」

「食べごたえがありそうだ」

「ミイイイイイイイ！？」

「いやおやつさん違うから。ほらミイ大丈夫だから、冗談だから」

「はっはっは、悪いな。お前さんのペットなら冗談を理解するぐらいぶつ飛んでるかと思っただがさすがにお前さんほどぶつ飛んでないか」

「いやおやつさん、ぶっ飛んでるのは行動であって存在自体じゃないから。さすがに類友でも万能なやつが集まる事は無いから」

解放されたミイが俺の背後で丸くなって震える。

さすがに冗談は理解できないらしい。

しかし可愛い、鼻から愛があふれるかと思っただぜ。

まあ実際にそんな事は起こらないんだがイメージ的にの話である。ゆっくりゆっくり説得し高麗人参でつつてやつと少し慣れてくれたあれだね、高麗人参の匂いで鼻をスピスピ言わせるのはさすが動物と言わざるを得ないが可愛すぎて困る。

恐る恐ると言う感じで出てきたミイに台車の縄を括り付ける。

よし、鍛冶屋に戻るぞー。

……引いてる感じは問題ないな、走らなければ大丈夫か？

まあ運び終わってから走行テストだな、問題なければダンジョンのアイテム回収が相当楽になるはず。

そんなこんなで鍛冶屋に戻ったわけだが誰もいない、何があった？とりあえず四台ともステンレス板の張り付けまで終わってるな。

少し待つか？

ああそうだ、プロペラとモーター作ってしまおう。

あんまり速く回さないしプロペラは結構デカくていいか、えーとモーターはガーゴイルの技術なんてしらんし一定の磁力が交互に発生するようにして反発を利用するか。

お？ 帰ってきた。

「おかえりー」

「おう帰ってきてたのか。酒でも飲もうかと思ったんだがそういやお前さんはまだ子供だったな」

「残念ですね、せっかくいいお酒を買ってきたのに」

「まあたまの休みぐらい羽目を外していいと思うけどさ、お父さんお酒臭いなんて言われないうちにね？」

「仕込みか、また仕込みなのか!？」

「いいじゃないか、さっさと飲もう。甘いものでももってってやれば子供なんて簡単に機嫌を直すぞ」

「ああ、その前にこの術式焼き付けてねー」

ふふふ、親子に異口同音で言われるがいいさ！

そしてあれですか、二人で飲む気満々ですか。

まあアルコールは味が苦手なんで飲まないんですけどね。

まあいいや、回収して帰ろう。

結構重いなさすが金属製。

よし、積み込み完了ミイ引つ張っていいぞー。

やっぱ首輪の以心伝心効果便利だな。

さて、森の中を歩いていてふと思った。

結構な期間ダンジョン探索してたくない？

仕入れ大丈夫だったのかな、まあ仕入れしてないのは一ヶ月程度だったから余裕だろうけど。

そついやこの頃裁縫屋のおばさんが商人が来て大量購入していくとか言ってたな、他の店舗でも起こり始めたらさすがに俺一人で入荷がもたないぞおい。

しかも今は未探索箇所が多くて入荷できるものに限りがあるしなあ、早めに探索を再開しないとな。

となるとしばらくはダンジョン探索かあ、めんどくさいなあ。

んー？ ああ、生活が安定した弊害か昔のものぐさな性格が戻ってきてるくさいな。

がんばらんとすぐ骨と皮になりそうだ。

さすがに食事するのがめんどくさいからって適当に水とかですませたのはまずかったよな、死んだ原因半分はそれなんじゃね？

まあ今は保存食が腐るほど種類あるからそんな事は無いんだけど、本格的に料理に手を出すべきなのか？

まあどうにかなるだろ。

とりあえず自宅に帰って設置したわけだが、これは快適だわー。

そのとの温度の影響も受けないから本当に適温が維持される。

これはダメ人間量産装置だわ、さすが人類英知の結晶侮りがたし！
もう家から出なくていいかもー。

ん？ どうしたミイ、外で遊びたいって？

もう可愛いなあ、でも袖引つ張ると伸びるからやめようね？ いや
怒ってるわけじゃないからね。

もう可愛いなあ、今日はドルイドの社の方まで行ってみる？ 確か
ミイの好きな薬草が結構生えてたはずだよ。

もう可愛いなあ、そんな嬉しからなくても、ちょ！？ 押さない、
押さないで！ 行くから今行くから！！

第一話 環境再生、新たな拠点（後書き）

第一章の一話終了時点での主人公ステータス。

スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。

なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、

術式使い「99」

LV・49/99 EXP・94・46% NEXT:14352

称号一覧

「@*者」\$級#：システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破体现者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号：民間称号による補正を受ける、先行実装システム。

「技術屋さん」民間称号：魔具工場より

「ラビツ党」民間称号：町の住人より

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・LV・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・LV・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・LV・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42300

>魔法：生命力回復補助

・LV20 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・Lv40 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

>魔法：終わりの裁き

・Lv1 Ⅱ身及び一手の罪・重+によってダメージが変わる対魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

>第一次限界突破者

>自分殺しの宿命

>呪い：シャドウハンド

>称号：技術屋さん

>称号：ラビッツ党

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

・転職干涉「特殊職業解放」

・特殊干涉「レアドロップ率上昇」

・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」

・特殊干涉「固有スキル獲得」

・特殊干涉「肉体成長停止：十年」

・特殊干涉「再度ドッペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」

・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」

・特殊干涉「個人技能の向上時、器用さが追加上昇」

・特殊干涉「兎系がPTにいる時取得経験値上昇」

第二話 ダンジョン本格攻略（前書き）

現在主人公の一人称が不評のため変更予定、詳細は活動報告の一人称問題浮上を参照の事。

とりあえず暫定的に俺に変更済み。

候補があればコメントで入れたいとってくれると助かります。

一部使い方的にワザと残してる場所もありますが、基本置換漏れですのでありましたらご報告をお願いします。

後、今回は初めての本格戦闘描写です。

難しいのでしばらく書きたくありません。

第二話 ダンジョン本格攻略

いやね、いくらボスって言ってもさ、十階層なんて浅い階層にドラゴン配置する事は無いと思うんだ。

「どうした挑戦者よ。入ってこぬのか？」

「もうちよつと、もうちよつとだけ心の準備をする時間を下さい」

さて、なんでこんなヤバい状態になっているのか理解するために朝まで時間を戻して回想しようと思う。

目が覚めるとそこは真つ白だった。

……どう見てもミイの毛皮です本当に以下略。

あれ、昨日ミイ抱えて寝たっけか？

確か薬草食いに行かせてそのあと強制的に水遊びに誘われて疲れてばったり寝たはずなんだが。

そして理解する。

嗚呼、潜り込んできたんですね本当に可愛くて困る。

とりあえず寝かせといてやろう。

さて、今日は久しぶりのダンジョン探索である。

あれから親の仇を狩るかの如くガルム共（犬型モンスターの蔑称）をぶち殺し続けてたわけですがそろそろ下層に降りようと思うのですよ。

経験値もあんまり高くないし。

そもそも影踏み狼は地雷というか罠というか、RPGやMMOで言う所の「美味しくない」と言われる敵なわけで、何か特殊なドロップがないかと検証したんだが一切そんな事は無かったんだぜ。

そつえば昨日暇つぶし代わりに調べて分かった事だが、捕獲し

た魔獣ともパーティーを組めるようで経験値を共有できるみたいだった。

捕獲された魔獣は俗に言う「人類側」の存在になるのでモンスターの攻撃対象になるんだとか。

それでパーティーに入れてみてわかった事実。

魔獣側もレベルによる恩恵を受けているようなのだ。

つまりダンジョンの各階に出現するモンスターはレベル調整されたユーザーに優しいモブなのだった、ババン！

口で効果音はやりすぎたか？

ちよこちよこ図書館の入門書と同じ本を見つけて買ってたから家でも調べられるのだ。

いやあ、蔵書ついていいね、蔵書最高。

まあ苦学生が小遣い稼ぎのために必死こいて作った文字の汚いコピー本なんだけどね。

たぶん教科書の元になったのがあの本で教科書を元にしたのがこの本なのだろう、よりわかりやすくなっている。

とりあえず濃縮熱爆弾（固まる前の硬化剤と溶解剤の混合液）と戦闘用の薬各種、緊急用の原液麻酔薬ぐらいか？

ちなみに濃縮熱爆弾は溶解剤が固まった状態の硬化剤にしか反応しない事を利用して作った火炎瓶モドキとも言えればいいか。

まあ使用可能期間というか寿命が短いんだがそこらへんはしかない。

後は食料とアイテム回収用の袋か。

まあ今回の探索からの試験導入だし小さいものにしておくか。

んー、そうなると荷物として固定する紐も必要か。

後はいつもの完全装備と、……念のために使い捨ての冷却爆弾持っていくべきか？

ちなみに冷却爆弾は冷蔵庫の小型版で起動後五秒後に半径一メートルほどの熱を奪い去る兵器である。

試しに使ってみたら絶対零度の空間ができたのか、使った瞬間何

かが液化して爆発したような音の直後から周囲の熱が奪われて視界全部霧におおわれてパニックになったな。

まあ実際には周囲が断熱材じゃないので絶対零度なんてなるわけないがとてつもなく低くなるのは事実である。

そもそも絶対零度なんて観測できんがなと言っ話。

すくなくともここまで来ると武器や道具の範疇ではないので使いたくないし持つていきたくもないのだが死ぬよりましである。

某小説の最後みたいに世界を守るために冷却爆弾と敵に突っ込んでとかシャレにならない事のフラグになりそうで少し怖いというものもあるが。

大丈夫だよな？ 大丈夫だと思いたい。

さて、そろそろ起こすか。

「ミミルー起きろー」

「……………ミイ？」

「今日はダンジョンだぞー、高麗人参出るかもよー？」

「ミイ」

寝起きは素晴らしいんだよなあ、寝つきは興奮して（遊び足りなくて？）なかなか眠らないくせに。

まあ寝起きのちよつと眠そうなのも可愛いんだけど。

そつえば寝起きに欠伸しないな、あれ可愛いのに。

モンスターだからいつでもすぐ動ける状態になつてるのか？

それだと疲れが取れないだろうしなんでなんだろ。

まあそんなこんなでダンジョンに向かったのだった。

さて、ダンジョン前についたんだがこれはどうした事だ？
ダンジョン前に監視員さえない。

また何か起こったのだろうか？

この頃色々起こりすぎじゃない？ 町に変なものも入り込み始めてるみたいだし。

何よりも今まで見た事もないやつらが我が物顔で歩いているのをよく見るようになった。

町が豊かになるのは良い事だが治安が悪くなるのはいただけないんだけどな。

なぜか冒険者って偉そうだし大抵の冒険者が自分を一つ上に置くよね、下の扱いはそれぞれだけど。

さて、ダンジョンに入ってみればわかる事が。

—— 第一層 ——

んー、特に変化もなくゼリーばかりだな。

ほぼ反射的に近寄ってくるのを倒してしまふのは狩りすぎたせいだろうか？

にしても、やっぱり人がいないなあ。

普通は成長したてのダンジョンって人であふれかえってるものらしいのにヤバイモンスターでも湧いたのかな？

とりあえずプニヨ玉を回収しつつよってくるゼリーを瞬殺する。見て回ったが固有モンスターとしてスライムが発生しているわけでもなく異常は見つけられなかった。

夜光草という洞窟系の奥に、ごくわずかに生えている薬草もなかった。

まあ大抵使えるの状態の物は無いので落胆は無いが。

特に問題もないので二層に進もう。

ちなみに台車は自分が引っ張りミイは戦っている間台車を守ってもらっている。

台車も人工物に分類されるのでほっとくと壊されてしまふのだ。商人のスキルにカートっていう狙われない荷車を作るスキルがあ

るらしいが、商人がパーティーにいる場合しか効果がないので手に入れていない。

——第二層——

降りてすぐ見回した限りでは二層にも問題ないように見える。

前回同様角兎とゼリーがちらほら彷徨ってたり草食ってたりなごませる光景が広がっている。

とりあえず角兎の口を見てはいけない、どうなっているかはお察し下さい。

まあ一層と同じように群がってくるゼリーは刺し殺し角兎は叩き殺す。

ちなみに角兎を叩き殺す理由だが、刺し殺したり切り殺したりすると毛皮に穴が開くのだ、当たり前だが。

角は高級食器の材料なので持って帰るが、やはり大した値段しないんだよなあ。

なんで同じ普通のドロップである兎の毛皮がそれなりの値段なのがよくわからない。

まあ需要の問題だろうけどさ。

ちなみにレアドロップが出る場合兎の毛皮は出ないのですぐわかるのだが、今回は特にレアは出なかった。

さて、三層の階段についたわけだがこの先は憂鬱だ。
ガルムもとい影踏み狼を相手にするのはもう飽きた。

——第三層——

第三層についてすぐ影踏み狼に襲われるが剣でぶった切り頭の核を一突きして殺す。

ドロップアイテムは爪なのだが役に立たないアクセサリ用アイテムだ。

レアドロップは毛皮、ただし外で倒せば問題なく普通に取得できるアイテムである。

眼球というのもドロップするがあれは自分には関係ない。

なにせ儀式魔法とやらの触媒で毒関係だったかな、魔法の種類はまあ広範囲の敵に毒の異常を付加する魔法の触媒だが自分は儀式魔法使えないし。

そもそも魔具は儀式魔法に対応していない、なぜか。

そんなわけで無用の長物である。

さて、第四層の階段についての。

ここから先は未知の領域だ。

—— 第四層 ——

第四層についての感想は暑い。

周囲は溶岩のように明々と光る岩がある。

どうやら初めて見る鉱石系のエリアで火山関係なのだろう。

見る限り赤い岩でできた球体のようなモンスターが漂っている。

確かあれは赤化爆弾レッドブレイズとかいうモンスターだったはず。

核の位置は体の中心でノンアクティブ、何もしなければ襲ってこないモンスターだが大きな衝撃を受けると自爆する要注意モンスターである。

後は小型で赤い石の石ゴーレムぐらいか？

ゴーレムはその名の通り岩でできた人型でこの階層のは自分と同じぐらいの子供サイズだ。

動きが遅いので子供の練習用にとよく捕獲されるモンスターである。

核は腹の中央にむき出しで存在するので鉱石系としては結構簡単に倒せるモンスターだ。

たまりに人魂っぽいモンスターもいたが確かあれはノンアクティブかかつ魔法でしか倒せないモンスターだったはずなので放置である。

ここのレアドロップは赤化爆弾が緋金鉱石でゴーレムは命石とかいう寿命をほんの少し伸ばすアイテムだったような。

粉にして飲むが糞不味い上に臭いがきつく、伸びるのも本当に雀の涙ほどなので権力者も放置するアイテムだ。

鑑定によると大体一個十秒ぐらい伸びるらしい。

さて、四層の探索は終わったが特に変わった事は無かった。

しいて言うなら今までなかった新しいタイプのマップだということぐらいか。

——第五層——

第五層は前者の火山の後に確実にあると言われている氷山エリア。そこいらじゅう氷と青い石でできている。

確かこの青い石はアクセサリとしてそれなりの人気があったはずだが加工がメンドクサイく利益があまり出ないので業者からは嫌われている。

とりあえず感想として、寒い。

ミイがいなかったら探索やめたかもしれないな。

ああミイあったかい可愛いもう大好き！

さて、このエリアに生息する今回のモンスターだがあおだぬき蒼狸と呼ばれる冷氣魔法を操る小動物と……、あれはなんだ？

ノッペリとした青い球体が浮かんでいる。

赤化爆弾の亜種だろうか？

それなりに大きな石を投げてぶつけたが反応は無い。

新種か？

「うお！？ あつぶないなあ」

近寄ると目のようなものが中央に現れ中央から光線を出した。

次を打てるまでにインターバルがあるのかすぐには撃ってこない。

目の中央に核があつたので破壊する。

ドロップアイテムはなかった。

これで攻撃力が高かったら割に合わないな。

ちなみに蒼狸のレアは狸の葉と呼ばれる幻覚作用のある葉で煙玉に仕込むなどして逃げを打つときに使うアイテムになるらしい。

残念ながらレシピは秘伝なので調査ギルドに売るしかない。

火薬とこれと何かだというのはわかるのだが何かがさっぱりわからないのだ。

まあ次の階層へ進もう。

ここらへんでもあんまり強く感じないな、ステータスを見る限りそこまで経験値も高くないようだ。

まああの青い球体に関しては今度ゆっくり調査しよう。

もしかしたら珍しい金属か鉱石を出すかもしれない。

まあ宝石系のドロップだったら笑うけどな、珍しいって意味で。さて階段だ。

——第六層——

六階層についた。

暗い。

アンデットエリアか？

どうやら正解のようだ。

現れたのは這いずる者^{ゾンビ}。

レアは骨系の素材。

見た目は種族問わず腐り始めた歩く死体。

鳥や蝙蝠等の飛ぶ動物の死骸は悲惨でもう羽根の中途半端に抜け落ちた姿は見ているだけで可哀そうになる。

行動が糞遅いので倒すのはたやすいがグロいので極力相手にしたくない。

核の位置はどんな死体にも関係なく脳があつたであろう位置だ。

この調子なら彷徨^{スケルトン}う者もいるだろう。

言わずもがな骨である。

やはりレア素材を出す。

核の位置は不定期だが見える位置に露出している。

たまーに見えにくい位置だがそれでも骨なので内側にあっても見つけられる。

たまに思うのはどうやって関節つなげているんだろうという事だが、白く細い菌糸のようなもので繋がっているらしい。

ああ、後這いずる者は彷徨う者の前段階らしく、放置すると彷徨う者になるらしい。

両方とも毒があるので気を付けなくてはならない。

——第七層——

ここには見覚えがある。

確か鉱石の採取エリアで基本普通の石ゴーレムがじっと冒険者を待ち構えている。

まあついでだし鉄鉱石でも狙ってみるか？

まあここにあるのはわかったしまた今度採取に来るか。

後は特に語る事は無いと思う。

ゴーレムのレアが鉄鉱石なぐらいか？ 通常ドロップは屑石である。

核は頭の中にあるので商品名釘バットな金属バットで叩き壊して一撃加えないといけない。

石畳用の大理石でも出せばゴーレムもまだ人気が出るだろうに。そろそろ一撃じゃ殺せなくなってくるかもな。

ここからは確実に核を狙っていかなければいけないかもしれない。核を外した時点で長期戦は確実だ。

——第八層——

八層……、そうだ俺はここにいるスケーーーーーイ。！　って世界が違うがな。

元の世界のゲームが懐かしいな、もう三十年近くしてないわけか。ゲームっぽい剣とかって総じて末端の強度が足りなかったりするし、作りたくても作れないんだよなあ。

というかあの世界の剣は半分以上鈍器だし。

まあそれにしても三十歳になっても子供なんだから長命種って狂ってるよな、一体いつ成長するんだか。

体に引っ張られてるのか俺の行動もなんか子供っぽいし

もしかして村の住人全てがなんかゆっくりした感じなのはそのせいか？

まあ帰れないんだからどうでもいいか。

ゲームしたいなあ。

哀愁ってわけじゃないが、この世界娯楽が少なくて困る。

冒険者の娯楽って言ったたらカジノか娯楽館か食べ物関係だしなあ。

信じられるか？　本は普及してるくせに小説はないんだぜ？　と、俺の友人なら言うだろう。

後三十年ぐらいはしないと、この体もできるようにならないし縁がないんだよな、食べ物以外。

何が、とはあえて言うまい。

まあいいや、気を取り直して八層である。

マップは真っ白な雪原エリア。

一番好きなエリアだが、長いこといると目をやられる。

そして出たよ雪達磨モドキ。

スノーマンだっけか？　より人型に近く気持ち悪い。

武器は氷でできた剣や槍など刃物系。

氷だけあって簡単に碎けるんだけどね。

こいつらもスライムとかといっしょで核を潰さないといくらでも再生するんだよな。

めんどくさい部類だ、弱いけど。

そして雪語りと呼ばれる薬草がちらほら生えている。

甘いのでおやつにいいんだが地上だと冬の雪が降る時期しか生えないんだよな、どうやって繁殖してるんだが。

ブリザードウルフ
まあ氷狼がいないだけましか。

ユニーク
こんな浅い階層だと固有扱いになるのか？

下層ではあの馬鹿でかい巨体が普通に出現するしなあ、下層に行けばいくほど厳しくなっていくのは変わらん。

さて、階段だ。

次の階層はどんなかなつと。

—— 第九層 ——

…… 地底湖？

水生生物系エリアか？

中央の馬鹿でかい地底湖を中心に丸く広がった空間が出現した。

一応端っこに三メートルぐらいの岸があるので問題なく攻略できそう。

「ミュー♪」

「ミイ！ …… そうダメだ。帰ってからいくらでも泳いでいいから我慢なさい」

地底湖の中には馬鹿でかい影と無数の小さな影。

どうやら取り巻きを持つタイプの固有モンスターユニークだろう。

正直水中戦は専門外かつそんな装備も持っていないので挑もうとは思わない。

この世界酸素飢っぱいアイテムないから息継ぎ自力なのよね、無理だよ。

水中はそれ専用仲間を集めた調教師の独壇場だよ本当。ビーストテイマー

素直に外周の岸を伝って次の階層を目指そう。

たまに半魚人サハギンが出てきたがあれは弱いのでどうってことない。

ドロップは鱗で使い道は無い。レアドロップが胆、ようは心臓でニキビの治療薬になるんだったか。

どっちにしる重量と利益の割合がダメダメな素材なので依頼でもない限り誰も回収しない。

かなり警戒して歩いていたがあの馬鹿でかい魚は陸に対する攻撃手段を持っていないのだろう、反応がないし。

もしくはノンアクティブであるかだ。

さすがに試そうとは思わない。

水中の生物は総じて頭が悪く本能で動くやつらばかりだし。

魚人フィッシュハーフぐらいか？ まともに人語を操れるのは。

見た目人魚っぽいんだが不思議なほど好戦的なんだよな、なんでなんだろう？

さて、気づけば階段だ。

——第十層——

「どうした挑戦者よ。入ってこぬのか？」

「もうちょっと、もうちょっとだけ心の準備をする時間を下さい」

そして今に至る。

長い長い回想が終わり現実に戻ってきわけで、そんな事があつて今の現状だ。

目の前の龍は大きさに自分の十倍程度か？

いやまあ、わかってますよ？ 時々戯れにやる龍族の悪戯なのだ。その階層のボスを倒しておき居座りいかにも自分がボスですって演出して挑戦者を待つのだ。

まあ最強種だからこそでできる暴虐もとい悪戯だよな！

だよな！　じゃねーよ糞ボケが！

さて、どうしたものか。

もしかしてダンジョンに人がいないのはこいつのせいかな？　こいつがいなくなるのを待ってたのか。

きつとギルドでは公布を出してたんだろうけどよらなかったからな、ギルドあんまり好きじゃないし。

この壁の青い石と広い部屋の間取りを見る限り元々この部屋は水晶タルゴレム像がボスだったのだろう。

ちなみにドロップは水晶、レアドロップで各色の水晶を出す。

深紅と薄い黄色の水晶が綺麗で好きです。

まあ深い階層だと結構普通に出るからな、大きさはともかく。

確か色つき水晶で作ったステンドグラスが国宝に指定されてるんだっけか？

まあそんな事はどうでもいい、現実逃避もそろそろ限界だ。

さて、現実に向き合って交渉しよう。

交渉は機嫌がよくないと話すら聞いてもらえないしどうしたものか。

まあやるだけやってみるか。

確か説明好きで質問もどうとでも広く解釈できる端的な物言いを好むんだっただか？

「なんでこんな事を？」

「何、世界の変革が始ったのでその中心に偶然居合わせたものを見物しに来たのだ。やはり普通ではなかったがな」

「やっぱり分かりますか」

「汝は異質。勇者や魔王とも違う世界の歯車、されど本質にはかわれない一つの因子、世界を外から改竄する力」

「……」

「なれば戦おう、我は汝を世界より排除する、世界の平定のために。」

質問は終わりかね？」

「どうしてもですか」

「どうしてもだ。弱小なれど龍である我に勝てば龍族代表の権限をもって汝の生存を認めよう」

戦うしかないのか……。

生存って、ここで逃げたら討伐フラグですか？

逃げ切るとかムリゲー。

でも龍族って体が大きいし糞強いから戦いたくないんだけどなあ。台車とミイは入口で留守番だ。

正直ミイが強いつて言っても龍族から台車を守るなんてムリゲーである。

恐竜のような爬虫類系ならまだ希望はあるのが龍は無理！

これ勝てないよなあ。

死にたくないんだけどなあ。

殺したら殺したで問題になるしなあ。

「ためらっているようだな」

「そりゃあね」

「何、気にする事は無い。この体は人形^{ゴレム}の核に知識と意識を転写して作ったまさに人形よ」

「……何ですと？」

「問答は無用、かかってくるが良い」

それならどうにか、なるかな？

まあ戦術次第か。

ゴレム再利用をどうやってやってるか知らないがあの体はゴレムの物なんだな、するとゴレムの弱点も引き継いでってゴレム弱点ねえじゃん！

人型から龍型に変わったから弱点が出るか？

まあ考えている暇があるかどうか疑問が残るがぶつつけ本番しかできないしな、龍族は人型に変身できるせいかモンスターとしてわからないし。

「さて、では一曲円舞を踊りましょう」

思いっきり全速で突っ込む。

「ふむ、人族にしては礼儀を弁えているようだな。だが甘いぞ」

繰り出されるのは尻尾による薙ぎ払い。

「うおっと！？ ゲフン」

必死に飛び越えるが足が引つ掛かって三回転ほどして地面に激突してしまった。

龍族だけあって余裕を持つて最低限体勢を立て直す時間待つてくれるが胆が冷えるなんてもんじゃないぞ。

ダメージこそ武装で軽減されてほとんどないが痛いものは痛い。正直攻撃の規模が人間とは違いすぎて近づくだけでも必死にならないと無理である。

考えている暇はなさそうだ。

続けてくる逆薙ぎもギリギリで飛び越える。

最早どうしたものかなんて考えている時間もなく、立ち上がったらずぐさま右に飛び避ける。

間一髪で今までの位置に前足の爪で攻撃が加わる。

その威力は地面を裂き亀裂を作る。

引つかかって転ばないようにしないと、そんな無様なミスを見逃してくれるほど優しくもないだろうし。

速度で攪乱なんて戦術が通用する相手じゃない、面攻撃とか卑怯

すぎる。

必死に接近と回避を続けながら確実な一撃を見舞うしかない。振り下ろされる自分の五倍はある爪の振り下ろしを避け尻尾による薙ぎ払いを必死に飛び越える。

自分など先ほど言った戦い方の指定がなければとつくの昔にミンチになっていただろう。

本当に本で「龍との決闘の作法」を読んでおいてよかったと思う。何度避けただろうか？ 不意に尻尾の薙ぎ払いが振り下ろしに変わった。

「ちょ！」

「何、退屈そうにしていたから趣向を凝らしたまですよ」

頼んでない！ 頼んでないよ！？

尻尾を戻すのに隙が？ 今！

本気で突っ込み懐に入り込む。

ここで一気に剣を突き上げ鱗の隙間を狙ったが

ガキンッ

「何で！？」

「愚か者！」

吐かれる炎を必死に避け距離を取る。

致命傷にならないまでも傷ぐらいはつけられると思ったのになぜ

弾かれた？

剣の攻撃力が足りないわけではない。

一応かつ冒険初心者用の装備とはいえ最高級の装備なのだ。

原因はなんだ？ 魔力障壁か？ それにしては鱗まではとどいていた。

龍が大きく息を吸い込む。

「くそ、一体なぜだ」

魔力による緊急回避。

魔力を過剰に放出する事により発生する圧力で速度を得る反則技。魔力の消費量が半端ないので普通はこんな時でもない誰もやらないが魔力と命はさすがに天秤には乗らない。

どうにか間一髪で避けられたがブレス攻撃は反則なほど範囲がある。

ブレス攻撃は魔法ではなく純粹な熱と可燃物のブレスなので軽減が効かない、食らったら即死である。

これは……、詰んだかもしれない。

つてそういえばあの体は龍じゃなくて石ゴレムだった。

隙間なんて突いても傷ができるわけねーよ！

「策も尽きたか？ では死ね」

「冗談！」

切り札の一つ目投入！

投げるのは濃縮熱爆弾、今朝作ったばかりの出来たてはやほやつ最高威力品である。

その程度はと避ける事もしない龍、かかったな！

俺の作った爆弾をそこいらのやつと一緒にしないでもらおうか！

「ぐう、なんだ？ この程度」

龍の胸から前足までが固まり、同時に高熱を発し始める。

関節部は砕けて落ちたが関係ない、なにせゴレムの核は胸にあるからな！

「食らえ、最終兵器！」

「ふん、道具程度で我を倒せると」

事前に準備していた冷却爆弾を投げる。

瞬間、立ち込める霧。

そして何かが砕け落ちる音。

音を立てず走り込む、魔力を使ってさらに加速する。

うつすらと龍の影が見えた。

核は、そこか！

「いくら石だつてな」

核に全力の一突きを突き込む。

「対処のしようはあるんだよ！」

「ぐあ、おのれ。人間のみで正面から倒しに来るとはなんと無謀な人間よ」

霧は長く持たず、すぐに周囲に解けて消えていく。

そして霧が晴れた先には末端から崩れ始めている……、クリスタルドラゴン水晶龍とでも言うべき成れの果てがいた。

クリスタルゴーレム今回水晶像が石よりもガラスに近い性質を持っていて助かった。

ガラスならどれだけ硬かろうと急激な熱量変化に耐えられず割れるからだ。

「勝った……、のか？」

正直、後二三戦あると覚悟してたんだがどうやら本気でゴーレムを使った人形だったらしい。

緊張が解けたせいかが力が抜けて座り込んでしまふ。

まあ、ボス部屋は人がいないときしかモンスターがわからないから問題ないわけで、少し寝るか？

周囲に拍手の音が響く。

見回せば、妙に空いていた右の空間が揺らめいて一人の人間が現れた。

いや、耳が尖り耳の裏から角らしきものが出ている。

龍か？

どちらにしろ^{ステルス}隠遁の魔法で隠れてみていたのだらう、趣味の悪い事だ。

「まさか真正面から倒してしまうとは思わなかったよ人間」

「俺にはフィーという職名がある、そちらで呼んでもらおうか」

「それはそれは。ではフィー、お前は紅龍筆頭の代行権限により生存を保障しよう、今後龍がお前を狙う事は無い」

「それはどうも」

「今回の変革は面白い事になりそうだ。期待しているぞ、ではな」

転移して消えてしまう。

そこらへんも龍族って理不尽でどういう理屈か莫大な魔力を使って簡単に転移しやがるのだ。

とりあえず一度帰ろう、さすがに疲れた。

えーと、ドロップアイテム、ム、は？

なんだあれ。

大きな水晶の中に首輪のようなアイテムが封印されている。

まさか神具の類か？

とりあえず持って帰ろう、残して誰かに奪われるのは癪だし今回は台車があるのだ。

「ミイ、こっちにおいで」

「ミイ？ ミイ、ミイ」

「大丈夫だから、怪我らしい怪我もしてないよ」

まあ今回の戦闘はギリギリだった。

一撃確殺型の俺としては核が胸になかったらまず間違いなく殺されていただろうな。

まあ死ぬか無傷か二つに一つである。

魔具のおかげで簡単には死なないが子供の体だと撃たれ弱さが半端ないんだぞ！

とりあえず荷物を括り付けてっと、さあ帰ろう。

……階段上がる事考えてなかった。

まあ車輪が大きいし押せばどうにかなるだろう。

そして俺たちは必死こいて階段を超えつつ帰路についた。

これは荷物袋増やすと二人もとい一人と一匹じゃ無理だな、仲間が必要だ。

まあ後々という事で考えよう。

まあ冒険者って自分の三倍の体積を簡単に運べるし、俺も例外なく運べるから個別に持った方がいいのかもしれない。

台車が必要なほど狩る時って仕入れの時ぐらいか。

という事はミイ用のリュック作ればいいな。

まあ帰ってから考えよう。

とりあえずドラゴンの事はギルドに報告しとくかな。

「ちわーす、みかわやでーす」

「こんにちは。皆大好き受付のお姉さんだよ」

「チェンジで」

「え、ちょ、ひど、いくらなんでもちよっと酷くない？」

「教えたネタに乗ってくれないお姉さんなんて嫌いです」

「もー。それで今日の用事は何かな？」

「ああ、ダンジョンに居座ってた龍族もといドラゴンだけだよ」

ちなみに龍の時はドラゴン、人の時は龍族と呼ぶのがマナーである。

「交渉してどいてもらったから」

「あら本当？　ちょうど困ってたのよ、ありがとう」

「報告は以上です、じゃあそういう事でさいなら」

「え、ちょ。神殿に戻ってくる相談とかお姉さんにしてくれるのを期待してたんだけどなー？」

「また今度で」

「フイーのいけずー。まあまた今度ね」

「じゃあねー」

まあうその報告だがいなくなったのは本当なので問題ないだろう。さすがにグツタリなので自宅につくなり爆睡したわけで、ミィがちょっとさびしい思いをしたかもしれないがまた別の話である。

第二話 ダンジョン本格攻略（後書き）

第一章の二話終了時点での主人公ステータス。

スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。

なお、祝福は無条件に詳細閲覧可能。

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：フィー

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、

術式使い「99」

LV・72/99 EXP・99・99% NEXT:1

称号一覧

「@*者」\$級#：システム権限により詳細閲覧不可

「限界突破現者」特級称号：システム権限により詳細閲覧不可

「先を歩む者」特級称号：民間称号による補正を受ける、先行実装

システム。

「竜玉を抱く者」特級称号：龍族との契約により刻まれる称号。

「技術屋さん」民間称号：魔具工場より

「ラビツ党」民間称号：町の住人より

<<特殊技能一覧

>魔法：ステータス閲覧

・LV・1 名前、職業、称号、本スキル詳細と技能一覧を閲覧可能

・LV・2 状態、称号元、技能詳細、転職可能職業を閲覧可能

・LV・3 レベル、現在経験値量、必要経験値量を閲覧可能

・Next-count 42247

>魔法：生命力回復補助

・LV20 活力を回復可能、ただしカロリーを大幅に消費する。

効果一、一定時間生命力の上昇により傷の治りが早くなる。

効果二、一定時間気力などで動けなくなっても動けるようになる。

>魔法：肉体活性化

・Lv40 新陳代謝を向上させるがカロリーを大幅に消費する。

効果一、身体能力の上昇、傷を治す速度の上昇。

効果二、免疫力向上にともなう解毒速度の上昇。

>魔法：終わりの裁き

・Lv1 Ⅱ身及び一手の罪・重+によってダメージが変わる対

魔法。

効果一、自身より相手の罪が重ければ二倍のダメージを与える。

効果二、自身が相手の罪より重ければ自身もダメージを受ける。

効果三、自身と相手の罪の重さが同じであれば三倍のダメージを与える。

<<祝福一覧

>長命種の宿命

>第一次限界突破者

>自分殺しの宿命

>呪い：シャドウハンド

>称号：技術屋さん

>称号：ラビツ党

・レベルアップ時ステータス追加上昇

・転職制限「基本職の転職不可」

・転職干涉「特殊職業解放」

・特殊干涉「レアドロップ率上昇」

・特殊干涉「固有モンスター遭遇率上昇」

・特殊干涉「固有スキル獲得」

・特殊干涉「肉体成長停止：十年」

・特殊干涉「再度ドッペルゲンガーを殺した時反射ダメージ二倍または二分の一」

- ・特殊干涉「次の転職までステータスの大部分を見れなくなる」
- ・特殊干涉「個人技能の向上時、器用さが追加上昇」
- ・特殊干涉「兎系がPTにいる時取得経験値上昇」

第三話 ダンジョン攻略準備中。（前書き）

正直前回手に入れた神具は魔具解説のための布石です、特に効果は設定していません。

将来設定して使うかもしれませんが、設定上今はミイが隠してしまっています。

なお、余談ですが自分が書く場合一切の没話が発生しません、なぜか。

好きなんだけどなあ、没話。

今回から話の後書きのステータスは部分的に省略します。

重要なお知らせ

作品内の矛盾が腐るほど溜まってきたので一章の書き上げと同時に書き直しを行います。

詳細は活動報告を参照。

第三話 ダンジョン攻略準備中。

目が覚めた。

目の前には星空、浮かぶ月は真ん丸で金色に輝いている。

——嗚呼、今日はこんなにも

月が綺麗、だ。

ネタを脳内で流している場合ではない。

何と言えはいいか、うん。

なんで外で寝てるのかな？

しかも真夜中に見えるんだけど。

まだ冬だから肌寒いのにあつたかいかいう矛盾した状況。

あつたかいはミイと寝てるからだろうけど、なぜ外なのさ？

さっぱり記憶がない。

とりあえず家の中に……、なんだこれ。

透明だけどガラスじゃない、水晶か？ 削り屑？

うー、あ？ そうか拾ってきた首輪入り水晶か。

あれ、あの首輪どこいった？

見当たらないが。

まあ野生動物並の警戒ができるミイが見張ってるから泥棒も入らないだろうしどこかにあるだろ。

問題は片付けたな……、めんどくさー。

ついでだから竹ぼうき作るか、なぜか材料揃えたのに作ってないし。

…… おいおいおいおい、何してんのさ俺は。

削り出しちゃってますよ。

なにそのクリスタル製塵取り。

アホか。

もつとまともなもの作ろうよ。

透明なのを利用した暗器の類とかさ。

ほら、あるだろう？

なぜか昨日の夜？ の記憶がない。

本当に記憶がない、昨日の夜何があつた！？

とりあえず掃除用具もできたし片づけてから考えよう。

ああこれ掃除機欲しいな。

無いなら作れが合言葉。

確かモーターの術式基盤はあるから後は外殻^{がわ}か。

紙パック……、作れるかなあ？

でも薄紙って強度の問題が……。

太い繊維質を編んで籠にするか？ それだと埃が取れないよな。

ああ、スポンジフィルター付けばいいのか。

でもスポンジって生産してたっけ？

この世界で同じようなの見た覚えがないな。

へチマっぽいかわしは見たが。

魔具で無理やり魔力フィルターでも作るしかないのかな。

いやでも魔具製品がこれ以上増えても空間魔力が不足するぞ、いくら液体魔力突っ込んだ加湿器モドキで魔力を追加してるとはいえ、そもそも液体魔力ってどうやって作るんだろう？

これって今のところダンジョンの中の液体魔力がわいてる湧水っぽいものからしかとれないんだよな。

その階層って妙に魔導師系多いから採取の時も気を使わなきゃいけないし水みたいなものだから重いんだよな。

採取しに行くときそれしか持ってこれない事がざらだし、まあ何往復もして大樽分確保したりするからいいけど。

話が大幅にそれた。

考えながら掃除してたので片付いたが首輪が見つからない。

水晶に包まれたまま使わなければいけない魔具の類だったのだらうか？

でも首輪の形で設置型って悲しくない？

完成度から見て封印された神具の類だと思ったんだが……。

ちなみに封印されたのは失敗作か危険物の二つに一つと言われている、大抵は前者だ。

ついでに魔具についてもちょっと説明しよう。

簡単に言えば、魔具とはこのファンタジーな世界特有のファンタジーなアイテムである。

だって製造工程がおかしい。

特定アイテムを特定の形に加工し液体魔力に付け込んでおけば基本的に魔具になる。

まあ術式基盤は別だが。

ゲームで良く言うアクセサリは能力付きのアイテム、つまり魔具に分類されるわけだ。

武器や防具、道具に能力がついてるやつだってあるんだよね。

理不尽だろう？

さすがファンタジーと言わざるを得ない。

正直なんでそんなに能力がつくのさと小一時間この世界作つたやつを問い詰めたい。

まあかなりの数がわかってるし、魔具図鑑のようなものが時折ダンジョンから出土するので問題ないらしい。

たとえば俺が愛用する兎シリーズは根元を針金でぐるぐる巻きにし輪を付ける事で魔具加工が可能になる。

紐は応用範囲というやつである。

応用範囲というのは、魔具の効果範囲をより明確にし効果を高めるための処置である。

たとえば大抵は魔法銀を織り込んだ紐を使うのだが別に魔法銀の鎖とかでもいいわけだ。

某電車ごっこみたいに使えば範囲内の運が上がるがさすがにそん

な状態で戦闘はできない。

まあそんな理不尽なアイテムが魔具である。

後、魔具には二種類あり製造魔具と出土魔具だ。

製造魔具はその名の通り普通に人が作る魔具の事である。

それに対し出土魔具とはダンジョンクリア時に稀に与えられる魔具で、内容的には製造魔具と大差ない。

両方とも特徴的なのはシンプルである事、その一点である。

たとえば俺の腕輪、足輪に装飾は一切ないし飾り気なんて兎の尻尾を首からかける紐程度である。

ただしまれに神具と呼ばれる装飾の凝ったまさに宝物っぽい魔具が出土する。

正直そういうものは国宝に指定されるし効果も不思議なほど高い。また神具でしか確認されていない能力も存在する。

たとえば植物や動物と会話できる腕輪だ。

言語系は基本神具の類である。

一説には俺が修得している日本語が古代人類が使っていた言語だと言われているが詳しくわかっていない。

そもそも喋っているのは日本語だし術式文字は漢字のようなものが多い。

だからこそ俺でも使えるわけだ。

さて、問題の首輪はどこ行った？ 本当に。

ふと誰にしているかもわからない説明を頭の中でしながら探していたが一向に見つからない。

それに俺ってこんな説明好きだったかな、そんな事なかったはずなんだけどな。

（開発者特有の病気です。みなさんは注意しましょう）

まあ水晶塊から取り出す前の解析では解析不能な謎の首輪だったから消えてしまってもそこまで惜しくないが。

やっぱ飾るだけでも高級感あるしもつたいないのか？ 効果がないならミイ用でもいい気がする。

（隷属の首輪は使用後砕けて消えてしまいます）

まあいいか、そのうち出てくるさ。

とりあえず今日は町の探索でもするかな。

ミイはどうするか、一応情報収集だから目立つのはめんどくさいんだよな。

しかたない、返送するか。

また半獣ワイルドハーフに化けるか？

でも女の子の恰好するのは嫌なんだけどなあ。

まあ仕方ない、あれから神殿の動きも気になるし、子供の演技って難しいんだよなあ。

体に引つ張られて俺の行動が子供っぽいつて意見は受け付けなかったら受け付けない。

そんな事言われたら泣く。

何しててもこの頃楽しい気がするけど気にはいけない。

小動物捕まえるのが無駄に楽しい気がするけど気にはいけないい。

昆虫採集とかたまにしてるけど大人でもやるったらやる。

とにかく出発しよう、このままここにいて考え続けてはいけない気がする。

さあ出発だやれ出発だそれ出発だ！

「ミイ、今回はお留守番な」

「ミイ？」

「ああ近場だからお土産は無いからね、家も閉めるし外で遊ぶか？ 地底湖行くか？ それともまだ寝とく？」

「ミイミイ、ミ！」

「んー、地底湖か。本当に泳ぐの好きだなあ、生まれる種族間違えたんじゃないの？」

「ミィー。ミィー！」

……最後のはわからなかった。

こんな時言語変換の腕輪欲しいよね。

とりあえず家の中へ戻る。

ミィのごはんは高麗人参とブルーハーブ、赤色薬草のサラダでいいか。

おや、赤色薬草切れてる。

また採取しにいけないとなあ、めんどくさい。

まあいいや、着替えてつと……、いつてきまーす。

——スカートはスウスウするから嫌いだ。

まあいつてきまーす。

さて、町についた。

こんな時間に外壁の門から中に入ると目を付けられそうなのでこっそり壁を超える。

重量軽減魔法というのがあって自分は魔具で使用している。

ただし重心が激しく狂うので普段は使用されない術式である。

基本的に失敗作とされたそれだが、ジャンプする瞬間から数秒だけ使うと物凄く飛べるのだ。

ただし着地が物凄く痛い。

冒険者じゃなかったら骨が砕けてるよな絶対。

後言うまでもないが制御が難しい、とことん難しい。

慣れるまではジャンプしたつもりで水平に飛んでたしひっくり返っていた事もあった。

しっかり制御しないと姿勢崩すせいでバビュンと変なところに飛

んでいくんだよなあ。

人に見つかからないのかつて？

訓練は森の中だったし町は飛び込む先がファンベルシリーズ製造工場裏なのでばれても問題ないのだよ。

ふははは今の我は輝^{われ}いておるぞ！

うん、某金ぴかの真似なんてするべきじゃないな、やっててキシヨかった。

あれはイケメンがやるから様になるんだな、うん。

さて、まずは神殿の情報掲示板で新しいニュースがないか探すか。しかしまだ夜中だし行動が早かったか？

まあ提灯もつてプニヨ玉買いに行けばお使いって事で誤魔化せるか？

提灯が必要なな、工場で借りてこよう。

ん？ ルイさんの人権？ 弟子に拒否権はあっても人権は存在しないよ。

拒否が破門になるって厳しい世界だね、ほんと。

まあ今は社長様になってるので拒否っても食っていけるだろうけどさ。

まあいいさ、勝手に借りるから。

提灯も備品扱いで共用になってるから勝手にもってってもばれないけどね、戻しとけば。

さてギルドだギルド、別名神殿とも言っ。

まあ神殿内にギルドがあるってのが正しいんだけど兼任してるからあんまり関係ないね。

実はギルドカウンターでは素材を買う事が出来るのだ。

無論それとは逆に買い取りもしている。

「おねーさん、ぷによだまひとつくださいな」

「あら、こんな夜遅くにお使い？ えらいわねー」

「もー、こどもあつかいしないですよ！ ひとつおいくらですか？」

「一つ六エクだよ、わかるかな？」

「だからこどもじゃないもん！ はい、六エク」

「ふふふごめんなさい。はい、おまけで飴ちゃん上げるからね」

「わーい！」

ふう、本当に子供の演技はつかれるぜ。

ちなみにモデルはリアである。

さて、情報掲示板の方に何か面白い事張り出されてないかなあ？
ちなみに生前の世界で言う新聞である。

全神殿共通で張り出すため神殿のある地域の事は結構わかるのだ。
この掲示板も魔具で、どこで貼っても同じ内容が貼り出されるのだ。

かつ一度貼ると年一度、特定の日には剥がせないようになって
いる。

つまり、重ね貼りとかして情報隠そうとしても、逆に隠そうとして
いる情報ですって宣伝するようなものなのだ。

更に言えば誰でも貼っていい事になっている。

大きさも巨大で神殿の一角を壁のみだが占拠している。

ファンタジーって理不尽だね。

えーと、ふむ、ダンジョンの成長は二ユースになってるみたいだ
な、一応到達最下層は十層までか。

まあドラゴンいたもんな、あんなものに勝てんよ。

うちみたいに毎日潜るわけじゃないだろうし、いなくなったから
今頃は準備を始めている頃だろう。

他には、おや？ 全ダンジョンに謎の現象、最下層の壁に文字が
現れる、ね。

最下層つつつたらボス部屋か。

戦い終わったら転送されるから内容までは分かってないみたいだ。
各神殿にシャドー現る。まあ誰か戦ったんだろ。

闘技場閉鎖、勇者拳闘奴隷を解放ね。頑張ってるじゃないか勇者、

でもそいつらの半分は元犯罪者よ？

各地でゼリー大発生、畑が被害を受ける。お、今日の日付だ。また野菜が高くなるな、今のうちに買って冷凍しよう。

成長していないダンジョンで怪奇現象、ダンジョン内に新種モンスター現る。成長したダンジョンのここでは関係ありませぬ。

おや、搜索願がかなりの数貼られてるな、そのくせ俺のは無いし。せめて貼りなおせよ搜索願として。

手配書の方は……、結構つかまってるのな。あ、うちの手配書に詫び状が重ね貼りされてる。隣に貼れよ隣に。

うーん、緊急クエストは無いみたいだな。

……うん？ なんかの資料っぽいのが貼られてるな。

なんか隠語と造語ばかりで内容がさっぱり理解できないが、押しであるハンコは神殿の物だしなんだこれ。

悪戯か？

いや、悪戯で神殿のハンコ使ったら神殿の威信をかけて探し出されて殺されるよな、騒乱罪とかで。

ちよつと内容を読んでみるか。

良く出てくる単語が黒い狐に化け猫、商売兎？ 仮にこれが暗号文だとして、狩りにたとえられてるけど裏を読めば捕まえろって事だよな。

商売兎って確か娼婦の隠語だよな。

なんかした娼婦でも追っかけてるんだろうか。

しかも世に混乱を招くつてずいぶん物騒な兎だな。

神殿の機密文書でも持ち出したのか？

この後は謎の造語のオンパレード、流れから察するに作戦名と作戦内容みたいだがさっぱりだ。

剣持っ騎士が崖の上で待機している……、ここもさっぱりわからんな。

この先は罠に追い込め……、洞窟？ このあたりの洞窟って俺が掘った地底湖行きのやつかダンジョンぐらいだよな。

それにその先で待つ誇り高き獣って何さ。

地底湖だろうがダンジョンだろうが誇りよりも汚さが目立つモン
スターしかないよ！

奥に行けば行くほど狡賢くなるし本当にやめてほしい。

番いを見つけた兎は猫の知恵比べに勝利せり？

犬を放つも巢穴は見つからず。

そして最後の文が、未だ捕まらず黒曜石に刻め、獵犬を送る。

……まさか兎ってうちの事か？

この黒曜石ってブラックリストの事だったら笑うぞ。

仮にそうだとしたら暗号強度低すぎるぞ、本人に読まれてばれる
程度とか。

いや、俺の被害妄想に違いない。

そもそも自分自身に当てはめた時の翻訳は直感だしあたってるわ
けがないか。

と言うかこの世界の暗号概念って失われたんじゃないの？

まあいいけど普通に読んでも謎文書すぎて意味が分からん。

たまーに出回るらしいし怪文書自体は無視しても大丈夫だろう。

他に面白そうな文書は無し、ニユースは「新たな神殿層見つかる」
程度か。

ちなみに神殿層というのはその階層が神殿と同じ外観を持つモン
スターがわからないマップで、何か特別な条件を満たすと神殿の施設
として利用可能になるマップだ。

まあクリアするとその層ごと近くの神殿に強制転移させられると
書いてあったな、古い文献だから真偽のほどは定かじゃないが。

今見つかったるのは死食らいの神殿とかいう、なんだっけ、転生
神殿だっけか？

そういえばダンジョンって各層ごとに名前があるらしいな、知ら
ないけど。

ああ、唯一知ってるのは流転の神殿とかいう名前のえーと、解放されて転職神殿になったんだっけかあれ。

ここのダンジョンにも神殿層が発生してたら泣くぞ。

何せ条件を達成しないとそれ以上下の層へ降りる事が出来ないのだ。

ちょうど転生神殿が生まれたところに見つかったという事だったからこれこれ三十年攻略されていないわけだ。

そんなもの未だぼつと出の冒険者である俺が攻略できるわけがない。

ただし……、ダンジョンの元々が訓練用であつたならばそれ関係の条件である可能性が限りなく高いわけだが。

まあダンジョンが古代人の訓練用施設であつたという論文は御伽おとぎ噺はなし扱いされてるし、ファンタジーにファンタジー扱いされる論文の信用度がどれくらいかと言えば微妙と言わざるを得ない。

まあ、ダンジョン内のモンスターがレベルが調整されていたりそうなんじゃないか？　と思える前提条件は結構見たからそうなのかも思っているわけだが。

まあ、一応死食らいの神殿は機能しているらしいし一回限りであれば利用できるみたいだけどね。

確か効果は若返りだったっけ、お爺さんに勧めるのもいいかもしれない。

でも生還率が三十パーセントだったけか。

理由がさっぱりわからん。

そもそも中であつたことを忘れるとか条件厳しすぎませんか？

まあない事を祈ろう。

こんなものか、オツチャン所って今夜中だったな。

帰って寝よう。

自宅に戻ると寝室のベッドの上でミィが丸まっている。

可愛いんだけどそこ俺の寢床だからね？
まあいいや、隙間に入って寝るべ。

翌朝、翌朝？

とにかく朝になって窓ガラスが割られる音で目が覚めた。
たまに細い蛇のようなモンスターの攻撃が当たって割れるのだ。
念のために窓のある部屋は特別なものを何も置かない事にしている。

さらに窓は疑似的な鉄格子をつけているのでその細いモンスター
以外は侵入できないようになっている。

しかしはめ込み式の窓だから変えるの楽だが、結構高いんだぞコ
ラ。

鉄格子モドキも例の硬化剤で作っているのでモンスター相手では
まず破壊されないはずなので大きなモンスターは入れない。

寝室からは覗き窓でリビングの様子を見れるようになっていて。
もう要塞化は徹底して行っているので襲撃されたとしても籠城戦
できるし何より窓のある部屋は畏になっている。

入ったら最後死ななきゃ出さないぜ的な。

主に通気口を塞いで濃縮熱爆弾を放り込むのだ。

無駄に断熱素材で前後左右上下が固められているため蒸し焼きに
なる。

床も少し解けてしまうのが玉に傷と言うか欠点というか、まあい
いだろう。

どうせ今回もモンスターだろう。

念のために双眼鏡モドキと小さな鏡を組み合わせた覗き窓からあ
ちら側を覗く。

……誰？

真っ黒なフードに真っ白な目の部分に穴のある仮面をつけた人物が吹き矢つばいのをドアに向けて待っている。

本当に誰？

マジで怖いんですけど。

まあ中には侵入できなかったみたいだしここにいれば安全か。そもそもなんで俺命狙われてるの？

いやまて暗殺者と決まったわけじゃない、見た目が怪しすぎるけど。

外は霧が出ている。

抜け穴から出ても追跡は不可能だろう。

窓を割られないように新素材の開発は急務だな。

窓なくすと外の様子がわからんなあ。

せめて王族が使う氷冷鋳コキユートスがあれば安心なんだが。

ちなみにファンタジーな類の金属で、うっすら水色の透明な金属だ。

初めて聞いた時はねーよと笑ったが、実際に作った窓の欠片を見るまでは信じられなかった。

王族は暗殺防止のために窓まで金属で作るらしい。

怖くてついつい現実逃避したがまだ構えてますよあの人。

あそこの落とし穴作動させるか？

いやでも地底湖バラす事になるしな、どうするべきか。

動かすなら殺す事を考えないといけないし今回はやめとこう。

それにしても今回はどのギルドだ？

さすがにあれから自重して新技術は流出させてないぞ俺は。

製造ギルドの暗殺者は鬼の面だったしな、製造ギルドからの襲撃はなぜか三回とも統一していて素性バラしてどうするのと突っ込みなかった。

調薬ギルドは狐だっけか？

なんか裏で取り決めがあるんだろうな。

ちなみに全部逃げ切っている。

逃げた後真正面から一般客がいる状態で抗議したら泣き付かれたが。

話し合いで調薬ギルド側は「技術公開をギルドを通してやる」事で納得してもらった。

製造ギルドの方は勝手に収まったので知らん。

ガラス関連だったしたぶんお爺さんが何かしてくれたんだろう。

ちなみに暗殺者とは戦ったって勝てません。

モンスターに勝てるのは核という弱点があるからです。

さてどうしたものか。

たぶんあれ毒矢だよな？

魔法薬の方の万能解毒剤は馬鹿みたいに作ったがわざわざ毒食らいたくないぞ、止めに何されるかわかったもんじゃないし。

もう放置して地下道からオツチャン所に出るか。

おう！？ 足の小指ぶつけた……、泣きそう。

「ミイ起きろ、静かにな？」

「ミイ」

「こつそり逃げ出すからミイは……、一緒に来るか？」

「ミユ」

そついやミイの事全然考えてなかった。

まだ黒いのいるしなあ、さつさと諦めるよ。

もう今のダンジョンで氷冷鉱が出るのを祈って一気に攻略するか？

そつだなそれがいい、安全度で言えばダンジョンの深部は天然の要塞だ。

地下に行けば行くほど通路は複雑になり広い空間はさらに馬鹿でかく変化する。

敵の大きさも、たぶんレベルによって大きくなるのだろう。
大きさは強さだ。

大きければ敵の攻撃が小さくなり大きければ自分の攻撃が大きくなる。

不思議な事に大きいほど速度が速く力も強く耐久力も高い。

まあレベルが高いんだから当たり前と言えば当たり前か。

ミイはさっぱり大きくならんがペットは適応外なのだろうか？

いやそんな事は無いはずだ、調教師が連れている馬鹿でかい馬を見た事があるし。

きつとそういう種族なのだろう、聞いた事ないが。

まあいい、分からない事を気にし続けるのは時間の無駄だ。

とりあえずは未だ吹き矢を構えている可哀そうな人を放置してオツチャンの店から出てダンジョンだな、うんそうしようそれが一番いい。

あ、そうだ。

布もあるしミイ用のリュック作っていこう、さすがに台車取りに来るわけにはいかないし。

縫い縫い縫い縫いチクリ、縫いチクリ、チクリ、縫い縫い縫い縫いチクリ。

結構指刺したよ、糞いてえ……。

やっぱ裁縫は苦手だ。

そもそも暗がりでする事じゃないが見えるからいいんだが。

電球とか電灯は自作するの厳しいからなあ、どれだけ設備揃えればできるんだか。

蛍光灯が恋しい。

まあそのうち光苔の鉢植えでも作るさ。

そして明るさに関係なく裁縫関係は、完成度は普通なんだけど必ず作成時に指を刺すのだ。

なぜだ。

まあ移動しよう。

ああ最後にちょっと覗くか。

んー、あの人まだいるな？

さらば可哀そうな人、縁えにしがあればまた会おう可哀そうな人、放置するけど許してね可哀そうな人。

あんな霧の中待機とか絶対全身ベトベトだよ、水滴で。

本当に可哀そうな人。

ターゲットに百パーセント逃げられている暗殺者つてもう可哀そうな人だと思うんだ。

まあ同一人物じゃないんだろうけどさ。

でもターゲットの姿を見る事もなくを逃がすとか確実に仕事ダメな人のレッテル貼られるよね。

嗚呼なんて可哀そうな人、きつといつかいい事あるよ。

ただ行いを恥じて死んでくれると少しだけ平和になるよ！

……ネタやってる場合じゃなかったな。

というかいつやつてもこのネタ酷いな。

前の暗殺者にやった時は激怒して捕獲が抹殺に変わってたものな。白霧使って声変えてなかったら絶対報復されてたよな、和解後でも。

まあいいや、倉庫の中におっちゃんも奥さんもないみたいだな。なんかこの頃投げやりな気がするのは気のせいかな。

きつと理不尽な事が重なってるからだな、うん。

……グレてもいいのかな？

いやいやいやいや、何処の不良だ。

一応体に引きずられて精神的に子供っぽいとは言え元社会人だ、社会人とは妥協と我慢と忍耐と諦めである。

暗殺程度軽く流せなくて上司のいびりが流せるか！（絶対違うと突っ込んではいけない）

よし、頑張つてダンジョン攻略しよう。

とりあえずはおやつさんに挨拶からだなーって地上への出口に扉がついてる、いつの間に。

さすがおやつさんだぜそこに痺れる懂れる！

マジで一晩でどうにかしちまう某ジェバンニだっけか？ あれを彷彿とさせるよ。

物作りの才能本当にあるよな、発明は現代技術のせいで俺に負けてるみたいだが。

「おっちゃん、あけてたもれー」

反応はない。

「おっちゃん、あけてたもれー」

やはり反応がない、物音はするからいるみたいだが。

「お兄ちゃん死んじゃ嫌ー。目をあけて、返事をして、私の名前を呼んでよー」

女の子用の声で棒読みを試みる。

「おっちゃんの浮気者ー、そんなに発明が大事かー、もう奥さんと別れて発明と結婚しろよー」

無論棒読みである、しかし反応がない。

「おっちゃんマジで大丈夫かー？ 生きてるかー？ 死んでたら返事してくれー！」

なぜだ、ここまでネタを投入しても無反応だと！？
まさか朝から小作りはしてないだろうし、もしかしてこの物音は泥棒か？

にしては声がしても逃げないな。
突入するか？ いやしかし、ミノタウロス用のデカくて厚い扉を
け破るほどの力はないぞさすがに。

良く見たら鍵ついてねーよ。

全俺が泣いた。

とりあえず扉を開けて……？

「は、ハロー？」

いやいやいや、目の前に簀巻きにされたおっちゃんがいたら誰で
もこうなるって！

ほんとだよ、ほんとにビビってないよ！

とにかく解かないとまずいよな。

「一体何があったのさ」

「それがな、真夜中に黒い服に白い仮面つけた変な奴らが来てお前
がどこにいるか教えろって言うんだよもちろん俺は教えなかったが」

「それどこかのギルドの暗殺者だよたぶん、良く生きてたね」

「いやな、そもそも知らないから知らないって言ったんだがどうや
ら相手は神殿官クラスだったみたいで嘘かどうかかわかったらしい」

「で、何も知らないから協力したり知らせないように縛って放置し
たと。まあ仲間判定食らわなかったただけよかったんじゃない？」

「まあ俺はレベル高いから簡単に死なねえからいいが、ミリイが里
帰り中でよかったよ」

「あれ、奥さんレベル低いの？」

「いやその逆でな、下手しなくてもいたら死人が出てたな、確実に」

いや、なんというか、本当にすまんかった。

あれだね、もう二度とおっちゃんの奥さんに逆らったりしないよマジで。

とりあえずばれないようにこっそり出ていくよ。

「あ、そうだ。しばらくうちのミイ預かってくれない？」

「あん？ どうしたんだ」

「ミユ？」

「一緒にいる時に襲われると逃げ切る自信がないわ」

「そうか、まあ仕方ないから預かってやるよ」

「ミイ！？」

「って事でお留守番な、外に出てさらわれたりするなよ？」

「まあ大丈夫じゃないか？ ああ餌代はきっちり後で請求してやるから覚悟しとけよ」

「ミイ……」

しょんぼりしたミイ可愛い、これはまずいやつは俺を萌え殺そうとしている。

急げ、急いでこの場を離れるんだ、出血で動けなくなる前に！
のちにおっちゃんは語った、あの速さは脱兎と言うにふさわしかったと。

はあ、そんなわけでダンジョン前です。

流石にダンジョン内で殺傷事件起こすような輩は全国規模で叩き出されるから暗殺者もここまでは来ないに違いない。

さあ、本格的に潜るぞー！

第三話 ダンジョン攻略準備中。（後書き）

第一章の三話終了時点での主人公ステータス。

スキルでない自力での物作りは生産スキルには含まれません。

基本事項を除き前話からの変更点のみ記載

名称：ファイフィル・ファウ・フォリア 職名：ファイ

職業：職業訓練生

転職可能職業：商人「15」、調合師「15」、鍛冶師「15」、
術式使い「99」

LV・73/99 EXP・0% NEXT:643000

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0565w/>

[練習作]ダンジョン物

2011年11月15日03時24分発行